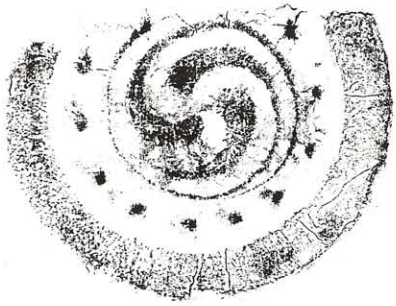
高松市埋蔵文化財調査報告　第107集

屋島寺宝物館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

屋島寺



2007年10月

高松市教育委員会

例　言

1　本報告書は，宗教法人屋島寺が計画した宝物館改築工事に伴う発掘調査報告書で，高松市屋島東町に所在する屋島寺（やしまじ）の調査報告を収録した。

2　発掘調査地ならびに調査期間は次のとおりである。
調 査 地：高松市屋島東町 1807 番地
発掘調査：平成２年４月５日～平成２年５月 31 日

3　発掘調査および整理作業は，高松市教育委員会が担当した。発掘調査費用は屋島寺が，整理費用は高松市教育委員会が負担した。

4　発掘調査は，高松市教育委員会文化部文化振興課 文化財専門員 川畑聰が担当し，末光甲正（讃岐文化遺産研究会）がこれを補佐した。さらに，香川県教育委員会からの派遣を受けて，同事務局文化行政課 岩橋孝氏（当時）の指導を随時受けた。また，調査図面作成にあたって，文化振興課 文化財専門員 山元敏裕および非常勤嘱託 中西克也が補助した。整理作業は川畑があたった。

5　本報告書の執筆・編集は，川畑が行った。ただし，第２章は，本市教委報告書第 62 集「史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ｉ」から抜粋して作成した。

6　発掘調査から整理作業および報告書執筆を行うにあたって，下記の関係諸機関ならびに方々からご教示を得た。記して厚く謝意を表すものである。（五十音順，敬称略）
香川県教育委員会，屋島寺

7　挿図として，高松市都市計画図 1/10,000「高松市３」および 1/2,500「屋島２」を一部改変して使用した。

8　本報告の高度値は海抜高を表し，方位は第１～３・45・47・48・55 図が真北を，それ以外は磁北を示す。方位がない地図は，上が北を表す。

9　本書で用いる遺構の略号は次の通りである。
SB：掘立柱建物跡　　SD：溝　　SK：土坑　　SP：柱穴　　SX：不明遺構

10　発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

目　次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1

第２章　地理的・歴史的環境
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 3

第３章　調査の成果
　第１節　調査の方法 …… 6
　第２節　調査地の概要と基本層序 …… 6
　第３節　遺構および包含層と遺物 …… 12

第４章　まとめ
　第１節　遺構および包含層（整地層）の変遷 …… 52
　第２節　調査の結果 …… 53
　第３節　屋島寺の変遷 …… 54
　第４節　屋島における寺院造営の起因 …… 58

第５章　屋島寺周辺の調査
　第１節　調査の一覧 …… 60
　第２節　屋島水族館建設工事に伴う試掘調査 …… 61
　第３節　屋島寺西側倉庫建築工事に伴う試掘調査 …… 69
　第４節　鎮守社移築工事に伴う試掘調査 …… 69
　第５節　屋島寺庫裏改築工事に伴う試掘調査 …… 71

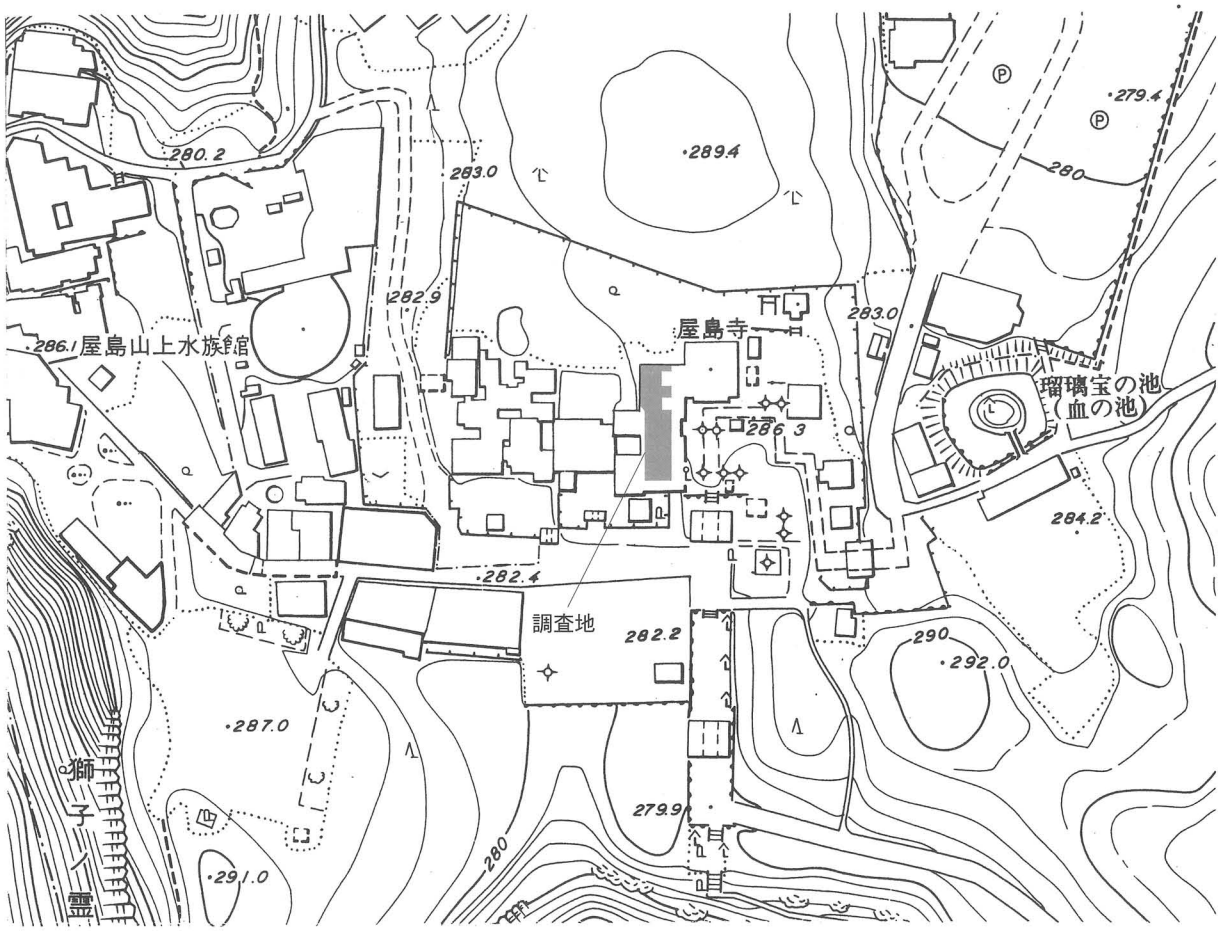
第１章 調査の経緯と経過

屋島は，全域が国の史跡天然記念物に指定されており，工事等に際しては事前に文化庁への現状変更申請と許可が必要である。このため，平成元年７月14日，宗教法人屋島寺から本市教育委員会に対して，同寺宝物館改築工事にかかる現状変更申請について打診があった。さっそく本市教委は香川県教育委員会を通じて文化庁に報告したところ，埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査が必要であるとの指導がなされた。これを受けて，屋島寺，県教委，市教委で三者協議を行い，試掘調査を実施することになった。

試掘調査は市教委が担当し，既存の宝物館解体工事が終了した後，平成２年２月13日～27日にかけて実施した。調査の方法は，新設宝物館の建設範囲が南北に長いことから，建設予定地のほぼ中央に南北方向のトレンチを設定した。その結果，弥生時代から近世にかけての遺物および時期不明の遺構が確認され，宝物館建設予定地全域に埋蔵文化財が包蔵されていることが明らかになった。このため，再度三者協議を行い，包蔵地の現状保存が不可能であることから，記録保存を目的とした発掘調査を実施することになり，市教委と屋島寺は平成２年４月２日に発掘調査協定書を結んだ。

発掘調査は，平成２年４月５日から５月31日にかけて，県教委の文化財専門員の派遣を受けながら市教委が主体となって実施し，調査費用は屋島寺が負担した。

調査終了後，市教委は発掘調査の概要報告を，県教委を通じて文化庁へ提出した。この報告は，高松市埋蔵文化財調査報告第62集「史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅰ」に収録している。その後，整理作業を市教委が随時実施し，本報告を刊行することとなった。遺構や遺物の年代・評価等については，本報告が最終のものである。



第１図　調査地位置図（縮尺 1/2,500）

第２章 地理的・歴史的環境

第１節 地理的環境

屋島は，高松市の北東部に位置し，瀬戸内海に突き出た半島状を呈している。現在は陸続きとなっているが，かつてはその名が示すとおり島であった。古くは屋島の南西部から南東部にかけて遠浅の海が大きく入り込み，港が存在していたようである。屋島の地形に変化が見られるのは，江戸時代にはじまる大規模な塩田開発によって，遠浅の海は順次埋め立てられて塩田となり，その風景は大きく変化する。寛永 14 年 (1637) には西嶋八兵衛の埋め立てにより高松平野と陸続きとなった。その後，正保４年 (1647) 松平頼重が陸続きとなった屋島相引の地に相引川を切り開き，現在に至っている。

屋島は日本を代表する「メサ」地形の典型として有名であり，東西から見たその山容は屋根形を形成し，天然記念物としての指定理由の一つでもある。これらの地形は，熔岩の周囲とその上部が開析されて形成された開析熔岩台地で，基盤が花崗岩，中腹から上部が凝灰岩，最上部に讃岐岩質安山岩が水平にのり，浸食作用によってできた安山岩の垂直に切り立った崖が山頂の平坦面を取り囲む特徴的な景観を呈している。

中腹に存在する凝灰岩がある部分は江戸時代に採石場がつくられ，火鉢や灯篭・祠の材料として切り出された。その採石場跡はコウモリの生息地となっている。凝灰岩の一部は山上部にも露出し表面を造形して雪に見立てて作庭し，名所雪の庭として知られている。

屋島は源平合戦の古戦場としても有名であり，屋島の東側を中心に史跡が点在する。これらを売り物に明治末年頃から観光客が増え始め，山頂に旅館や売店がつくられ営業がはじまる。昭和 47 年には過去最高の 246 万人の観光客が屋島を訪れ，観光地屋島の黄金期を迎える。その後，屋島を訪れる観光客は余暇の多様化などに伴い，昭和 47 年を境に下降線を辿りはじめ，平成 17 年の屋島の観光客は約 57 万人で，最盛期の 1/4 にまで減少している。

山上部の様相とは反対に昭和 30 年以降，高松市中心部との地理的な要因から屋島南西部を中心に急速に宅地化が進展した。人口の増加に拍車がかかったのは昭和 46 年に塩田が廃止され，その跡地に昭和 48 年から区画整理事業が行われたことが，人口増加に大きくつながった。屋島地区の人口増加はその後も続き，平成 19 年６月１日現在の屋島地区の人口は 22,431 人で高松市の人口の約５％弱を占め，市内を代表する住宅地となっている。

第２図　史跡天然記念物屋島 位置図

第２節　歴史的環境

屋島は史跡天然記念物に指定されているが，その理由として，白村江の戦いの敗戦を契機として造られた屋嶋城，唐僧鑑真開基と伝えられ四国霊場84番札所でもある屋島寺，そして源平合戦古戦場があり，まさに歴史の宝庫である。この屋島の歴史について，古い順から紹介する。

旧石器・縄文時代に関する遺跡は確認されておらず，屋島で人々の活動が確認されるのは弥生時代中期である。明確な遺構は確認されていないが，南嶺での調査で弥生時代中期の土器・石鏃などがまとまって確認されており，居住していたと想定される。次いで弥生時代後期末頃の土器が南嶺北斜面や北嶺山上部で出土しているが，極めて少量であることから，定住していた可能性は低い。一方，屋島西海岸の浦生集落には製塩遺跡と考えられる鵜羽神社境内遺跡があり，多くの製塩土器に混じって弥生後期末の土器が出土している。

弥生時代後期末から古墳時代前期初頭と想定される墳墓・古墳群として，尾根稜線上に造られた浜北古墳群がある。正式な調査を経ていないが３基からなり，一番山側が１号墳で全長約30ｍの前方後円墳である。２号墳は，１号墳よりも下方に位置し，かろうじて南北約10ｍ，東西約５～６ｍの範囲で古墳状の隆起が認められる。３号墳は，２号墳の北西下方約50ｍ西面崖面にあり，箱式石棺を主体部にもつ円墳と台帳登録されているが，長い年月の間に流出したのか現在は確認できない。

古墳時代中期では，屋島の北先端に位置する長崎鼻古墳があり，海を意識して築造されている。平成８～10年度の確認調査により，全長約45.8ｍを測る３段築成の前方後円墳で，墳丘表面には葺石が認められた。埋葬主体部である竪穴式石槨からは，阿蘇熔結凝灰岩製の舟形石棺が確認され，海上交通に関係した被葬者像が考えられている。

古墳時代後期では，数基からなる古墳群が屋島南側山裾に点在して確認されているが，どれも発掘調査を経ていないので詳細は不明である。中筋北古墳は，南面した緩やかな傾斜地にあって，墳丘は流失してしまっているが，蓋石を失った組み合わせ石棺が残ると伝わり，石棺の内法規模は長さ約2.4ｍ，幅約0.6ｍという。屋島中央東古墳は，昭和43年の宅地造成で破壊され，現在は宅地内の庭園の一隅に石材が２石残るのみであるが，石の規模から横穴式石室であったと想定されている。墳丘跡から古墳時代後期の須恵器が採集されている。屋島中央西古墳は，中央東古墳の西方に位置する横穴式石室墳で，両側壁と奥壁の基底部近くが残るのみである。残存石室の規模は幅約2.5ｍ，長さ約5.0ｍ，残存高約1.2ｍである。出土遺物は確認されていない。谷東古墳は農協学園グランドの上方に位置する横穴式石室を内部主体とする古墳である。金刀比羅宮社域古墳は，四国電力高松荘裏山にある金刀比羅宮の小祠の東側約８ｍにある。埋葬主体部である箱式石棺は，北半分に小祠がのって状況が不明であるが，南半分は蓋石を失って上縁部が露出している。現存の墳丘規模は，長径約8.0ｍ，短径約6.0ｍ，高さ1.0ｍである。東山地古墳は，金刀比羅宮社域古墳の東方に位置し，横穴式石室が開口している。湯の谷古墳群は，３基からなる古墳群で屋島の南東斜面に位置する。直径は約5.5～8.0ｍ，高さ0.5～1.2ｍの規模をもち，墳丘の中央部には盗掘坑と考えられる窪みが認められる。主体部の構造は不明であり，遺物の出土は伝えられていない。湯の谷古墳群は，墳丘の規模等から中筋北古墳や金刀比羅宮社域古墳と同様に箱式石棺を主体部にもつ古墳であったと想定される。

屋島には古墳時代の集落は認められていないが，浦生にある鵜羽神社の境内では，製塩土器が散布しているとともに，製塩炉と考えられる焼土や炭などが露出している。製塩土器は，古墳時代後期から平安時代のものまで出土していることから，製塩遺跡として長期間の操業が想定される。塩と屋島が属する山田郡に関連して，平城宮跡出土木簡の中に「□（讃）岐国山田郡海郷□葛木部龍麻呂□□□（調塩一カ）斗」がある。海郷については，平安時代初期に編纂された『倭名類聚抄』には記載はなく，現在では海郷が山田郡のどの地域を指しているかは不明である。ただし，その名から海に面した郷であることは間違いなく，平安時代初期までに山田郡の北端にあった高松郷に吸収された可能性がある。いずれにしても屋島を含む山田郡の海岸線では，調貢用を含めて塩の生産が行われていたことは間違いないようである。

飛鳥時代の遺跡としては屋嶋城跡がある。『日本書紀』によれば天智６年（667）11月に築城の記載が見られるが，浦生の谷奥にある石塁が関連する遺構と想定されていただけで，長らく実態が不明であっ

た。ところが，平成７年度から本市が実施している屋島基礎調査事業や，地元研究者による新たな石塁発見によって，実態が明らかになりつつある。それは，山頂の平坦部を取り囲む垂直に切り立った崖を外郭線として巧みに利用し，崖が途切れる部分に石塁や土塁を構築して防御を固めている。さらに中腹にも集落の奥，標高100ｍ地点に浦生石塁が築かれており，二重の防御ラインを形成している。しかしながら，屋嶋城跡の存在を不動のものにしたのは，平成13年度調査で確認された城門遺構の発見である。発見された城門遺構は，外郭線の南西部分にあり，幅5.4ｍ・奥行11ｍを測り，懸門や階段状の床面，排水溝をもつなど，他の古代山城に類例のあまり見られない構造を有し，規模的にも他城と比較して遜色のないものであった。

屋島では，屋嶋城跡以外に飛鳥時代の遺跡は認められないが，屋島の南岸にあたる古高松地区では，山田郡の条里地割とは異なる方位（Ｎ５°Ｅ）の条里地割が存在する。この地割の中に所在する小山・南谷遺跡では，祭祀性の高い井戸が確認されている。さらに，小山・南谷遺跡の東斜面にある奥の坊遺跡では，この異方向条里地割と一致する溝と掘立柱建物跡数棟を検出している。

奈良･平安時代になると，屋島寺が登場する。寺伝では，唐僧鑑真が京へ上る途中に屋島北嶺に立ち寄って開基したのが始まりで，その後南嶺に移ったとなっている。北嶺に千間（軒）堂跡の名が残っていたが，長らく実態は不明であった。平成11年度の分布調査で基壇をもつ礎石建物跡が確認され，平成12年度には基壇内部の調査で須恵器多口瓶が４点確認されたことから，寺伝のとおり北嶺に寺院が存在したことが判明した。しかしながら，出土した多口瓶は形態等の特徴から最も古いものでも９世紀後半までしか遡らず，周辺部で出土した土器にも８世紀中頃まで遡るものは見当たらない。北嶺の寺院が奈良時代まで遡るかどうかは今後の調査に期待される。

小山・南谷遺跡と新田街道（県道屋島西塩江線）を挟んで西側に位置する新田本村遺跡では，10世紀頃の掘立柱建物跡群が確認されている。そのうち，遺跡の東端にあり２間×５間の規模をもち東西に長い総柱の掘立柱建物跡が検出されており，倉庫跡になるものと考えられる。さらに，掘立柱建物跡群に沿って，東西方向の最大幅4.5ｍの大型溝も確認されており，当時の海岸線が遺跡近くまで入り込んでいた可能性を考えると，港湾施設的な集落跡と想定される。さらに出土遺物の中には，越州窯青磁や円面硯，土馬といったものが見られ，官衙的様相も漂わせている。

新田本村遺跡の南東約600ｍには古代寺院として山下廃寺が存在する。山下廃寺では，讃岐国分寺跡や同尼寺跡，同じ山田郡にある宝寿寺跡と同文の軒瓦片が散布しており注目される。

そして，平安時代末期にあたる元暦２年（1185）２月に，屋島東麓を中心として源平屋島合戦が行われた。合戦の内容は『源平盛衰記』『平家物語』『吾妻鏡』『玉葉』の中に詳しいが，屋島東町から牟礼町牟礼そして庵治町に至る各所にも，合戦にまつわる史跡（伝承地）が残されている。

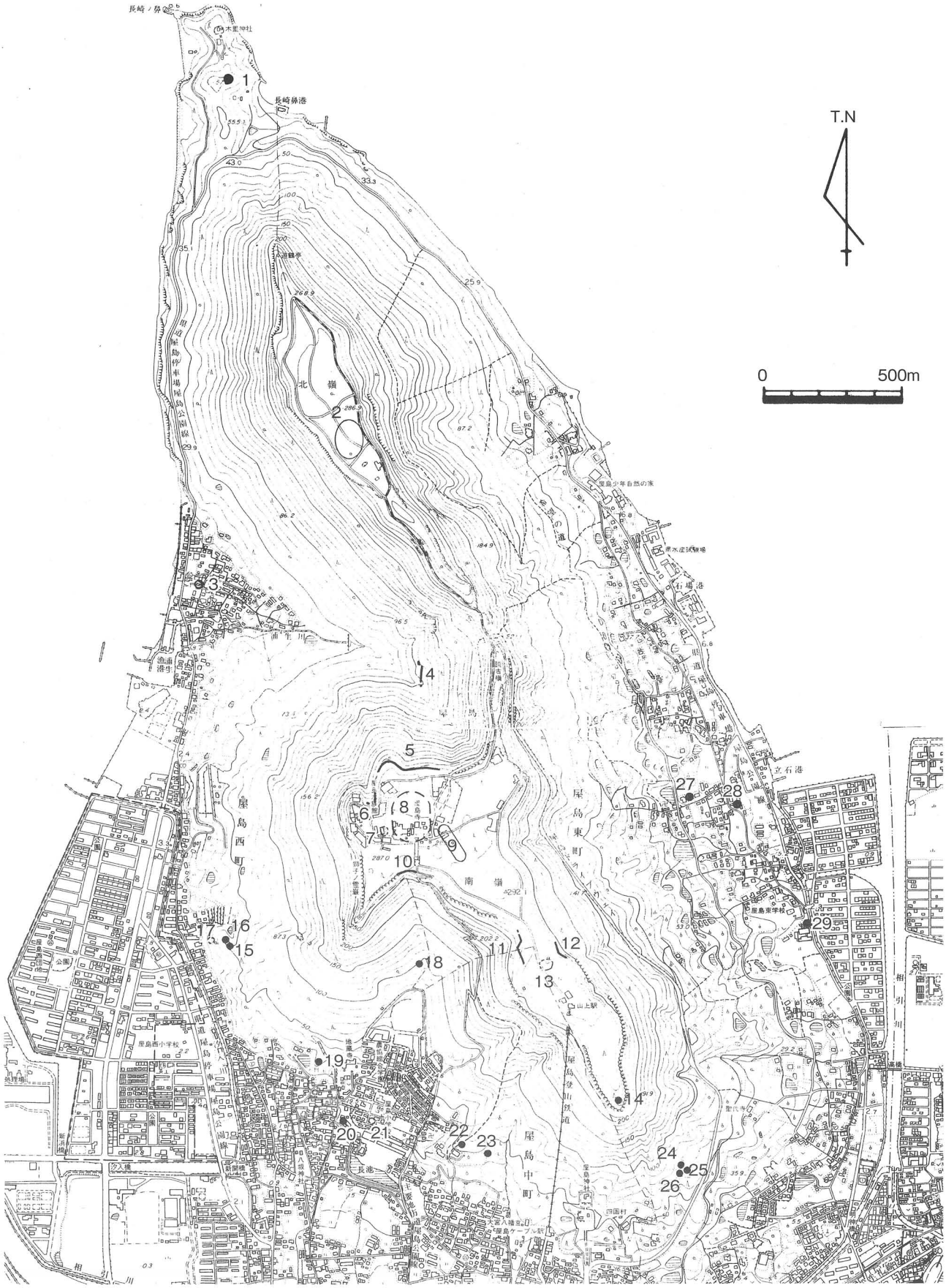
室町時代には屋島では製塩が盛んに行なわれたようであり，江戸時代には屋島の西側から南西にかけて塩田が分布していた。実際，文安２年（1445）から同３年にかけての記録である『兵庫北関入船納帳』には，船籍地として方本（現在の屋島西町潟元）の地名が見られ，積荷は塩であった。この方本を船籍地とする船は400石以上の大型船であり，方本が港として充分な機能を有していたと想定される。さらに，大型船に積み込むほどの量の塩が盛んに生産されていたことがうかがえる。

《参考文献》
国島浩正 1988「律令体制と讃岐」『香川県史１』原始・古代
藤好史郎 1996「高松市新田町小山・南谷遺跡の発掘調査」『条里制研究』第12号　条里制研究会
橋詰　茂 1989「海の時代―内海産業と水運の発達―」『香川県史２』中世

【第３図　遺跡名】

1 長崎鼻古墳	2 千間堂跡	3 鵜羽神社境内遺跡	4 浦生石塁	5 《北斜面外郭線》
6 《北水門推定地》	7 《貯水池推定地》	8 **屋島寺**	9 《貯水池推定地》	10 《南斜面外郭線･南水門》
11 《南西斜面外郭線・城門》	12 《東斜面外郭線》	13 《貯水池推定地》	14 屋島経塚	15 浜北１号墳
16 浜北２号墳	17 浜北３号墳	18 谷東古墳	19 中筋北古墳	20 屋島中央西古墳
21 屋島中央東古墳	22 金刀比羅宮社域古墳	23 東山地古墳	24 湯ノ谷１号墳	25 湯ノ谷２号墳
26 湯ノ谷３号墳	27 佐藤継信の墓	28 安徳天皇社	29 菊王丸の墓	

《》は屋嶋城跡に関連する遺構



第３図　史跡天然記念物屋島 主要遺跡分布図（縮尺 1/20,000）

第３章 調査の成果

第１節 調査の方法

調査地は，屋島寺本堂の南西側にあたる。調査対象は宝物館建設予定地全域であったが，実際は既存建物（本堂渡り廊下）や埋設管等の制約により，実際の調査面積は約300㎡となり，調査区の平面形も凹凸のある変形したものとなった（第４図）。さらに，堆積土層が複雑であることから，調査区南側中央において，試掘調査時の土層観察用断面を幅１ｍの南北方向畦畔として残した。

調査の方法としては，表土を機械掘削により剥ぎ，その後人力掘削により包含層を除去していった。調査区北側および南側において各３面の遺構面が確認されたので，上面の遺構を検出・掘削した後，さらに掘り下げて下面の遺構を検出・掘削した。そして，調査終了後は人力により埋め戻した。

調査区全体の測量は，調査区全体に５ｍ単位に杭等を打設し基準を定め，平板測量による1/20図化を基本とした。遺構平面図や遺物出土状況図，土層図等は適宜手書きによる1/10図化または1/20図化を行った。写真撮影は，35㎜のモノクロネガおよびカラースライドによった。

第２節 調査地の概要と基本層序

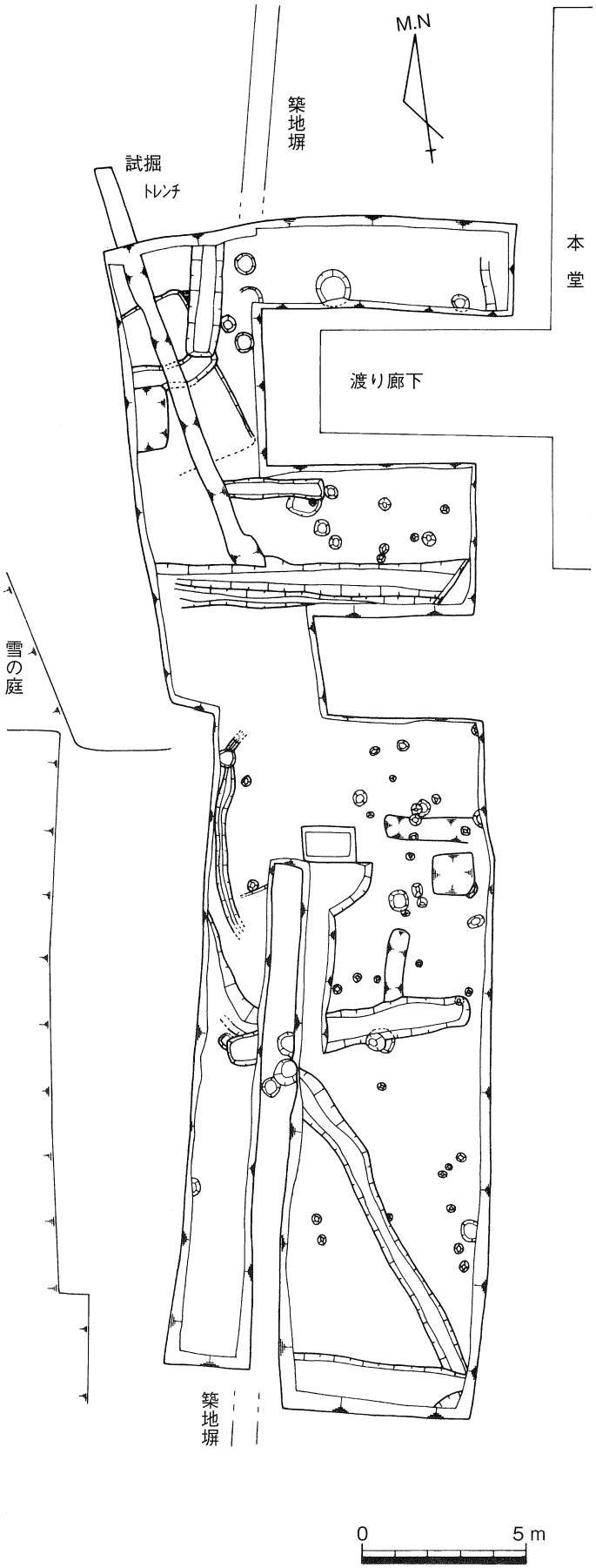
調査地は，屋島南嶺の山上部でも西側に位置し，地図から読み取れる地形では，標高289.4ｍの高所から標高292.0ｍの高所に至る尾根筋（北北西－南南東）の西側斜面にあたる。しかしながら，現在は屋島寺境内の平坦地の一部（標高286.3ｍ）となっており，現地に立ってみても旧地形を想定することは難しい。ただし，発掘調査で確認された旧地形は第５図のとおりで，北東から南西に向かって緩やかに下る斜面であり，地図から読み取れる地形とほぼ一致する。そのため，発掘調査においては，調査区北端では地表から約60㎝で地山に達したが，南端では約１ｍ30㎝もの堆積層があった。

さて，この堆積層の状況は，調査区の北側と南側では大きく異なる。まず調査区北側においては，東半分において表土を除去すると地山に切り込む遺構を検出できたが，西半分では遺物包含層が存在し大きく３層に分かれる（第８図①～⑦）。この遺物包含層の上層は第６層の明褐色粘質土で，いぶし瓦や布目瓦を含み厚さ約20㎝を測る。中層は第11層の暗赤褐色粘質土で，布目瓦や中世の土器を含み厚さ約15㎝を測る。下層は第12層の赤褐色粘質土で，摩滅した弥生土器を含み厚さ約10㎝を測り，第19層の地山と区別が困難な場所もある。おそらく北の標高の高い場所から弥生土器とともに流れてきて２次堆積した土層と考えられる。遺構は，上層・中層・下層を切り込んで存在する。

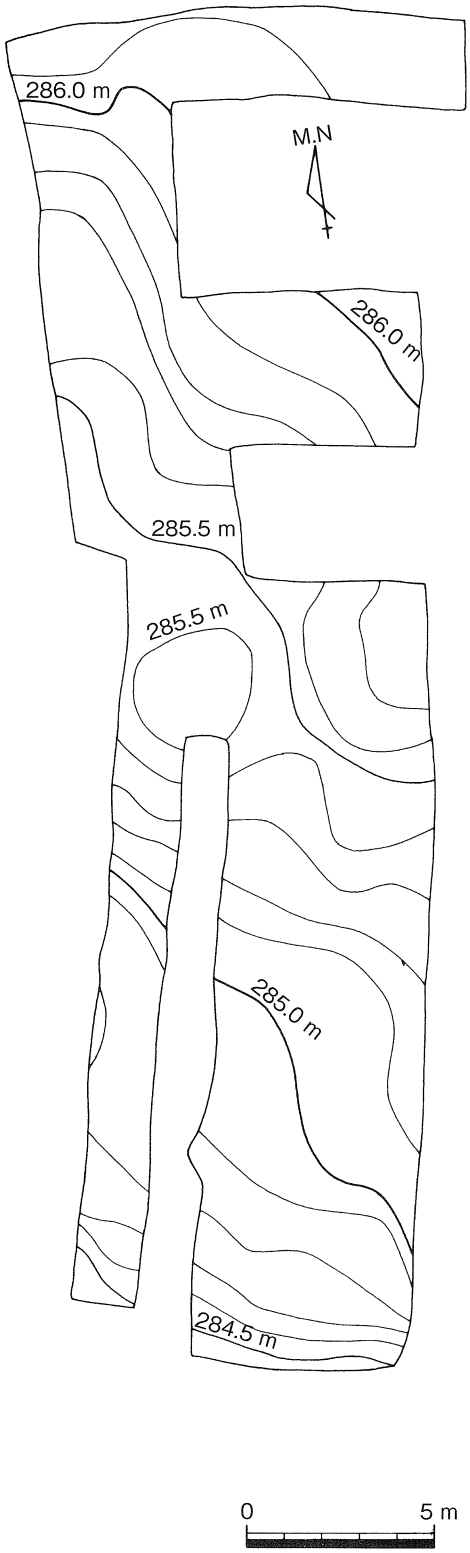
一方，調査区南側においては，北東部分では表土および宝物館整地層を除去するとすぐに第19層の地山が現れて地山を切り込む遺構を検出できるが，南西にいくに従って厚い遺物包含層が存在し，包含層は大きく４層に分かれる（第８・９図⑧～⑫）。包含層の最上層は第３層の赤褐色土で風化安山岩細片や瓦片を多く含み，厚さは調査区南端で最も厚く約１ｍを測る。上層は調査区南端においてのみ見られ，第４層の褐色土で瓦片を含み厚さ10～20㎝を測る。中層は調査区南側の中央においてのみ見られ，第５層の褐色土層で風化安山岩細片や瓦片を含み，厚さは約30㎝を測る。下層も調査区南側の中央においてのみ見られ，第７層の赤褐色土層で風化安山岩細片や瓦片を多く含み，下部に後で述べる集石が存在する。厚さは約50㎝を測る。これら４層ともいわゆる整地層で，境内を拡幅する際に盛られたものと考えられる。遺構は，最上層・下層・地山を切り込んで存在する。

以上，調査区北側と南側の堆積土層について報告してきたが，北側と南側の相互関係については，途中で撹乱等があり明確にすることは困難であった。ただし，壁面⑫北側においては，第３層（南側の最上層）が第６層（北側のいぶし瓦包含層）より上位にあることが確認可能である。

次に検出した遺構は，溝（SD）４条，土坑（SK）４基，溝状落ち込み１条，瓦溜め遺構１基，埋甕３基，柱穴（SP）63基（うち掘立柱建物跡（SB）１棟を含む），不明遺構（SX）３基である。遺構の年代は，飛鳥時代から近世に属するものが見られるが，出土遺物が限られるため全ての遺構の年代を明らかにすることはできないものの，近世に属するものが多いと考えられる。

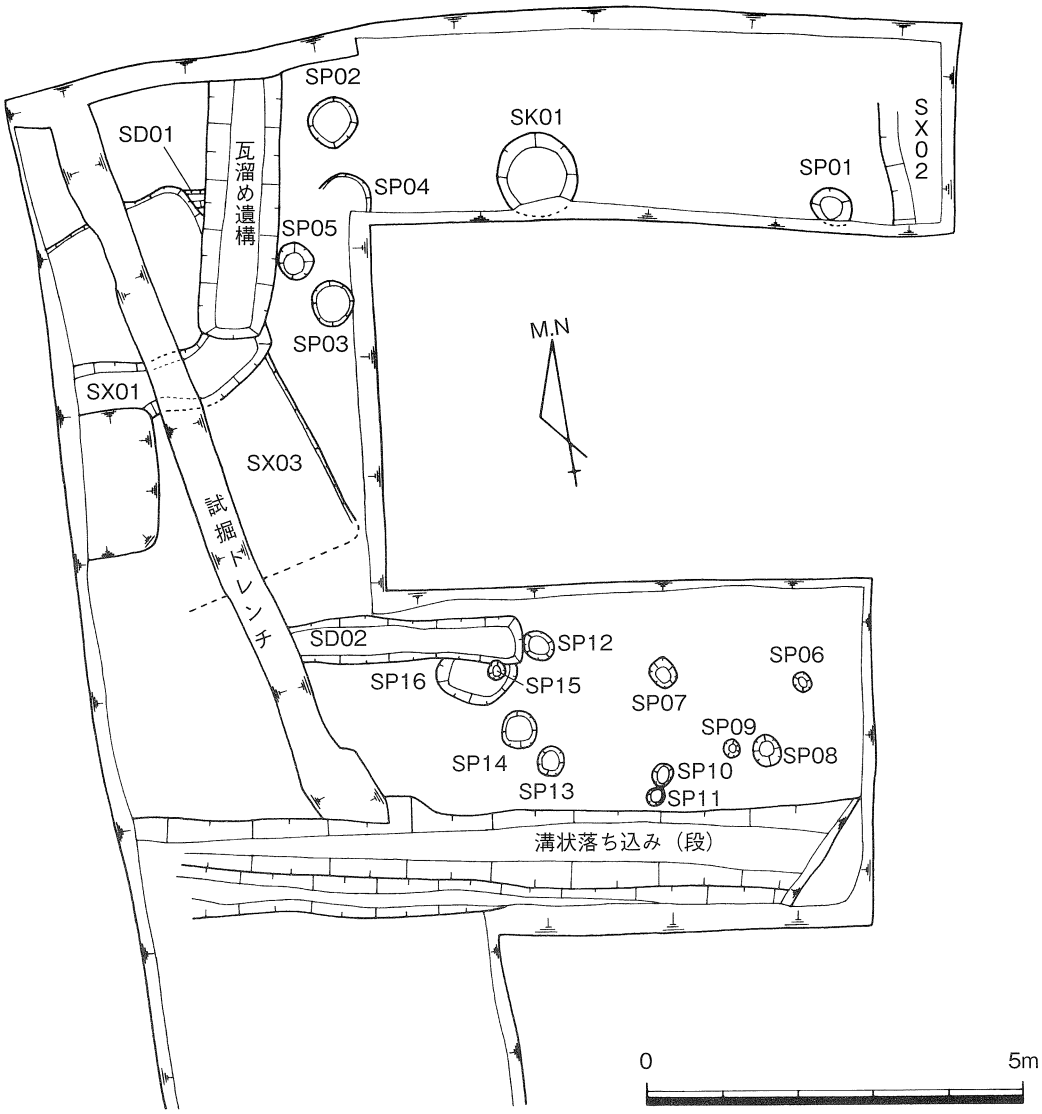


第４図　調査区平面図（縮尺 1/200）

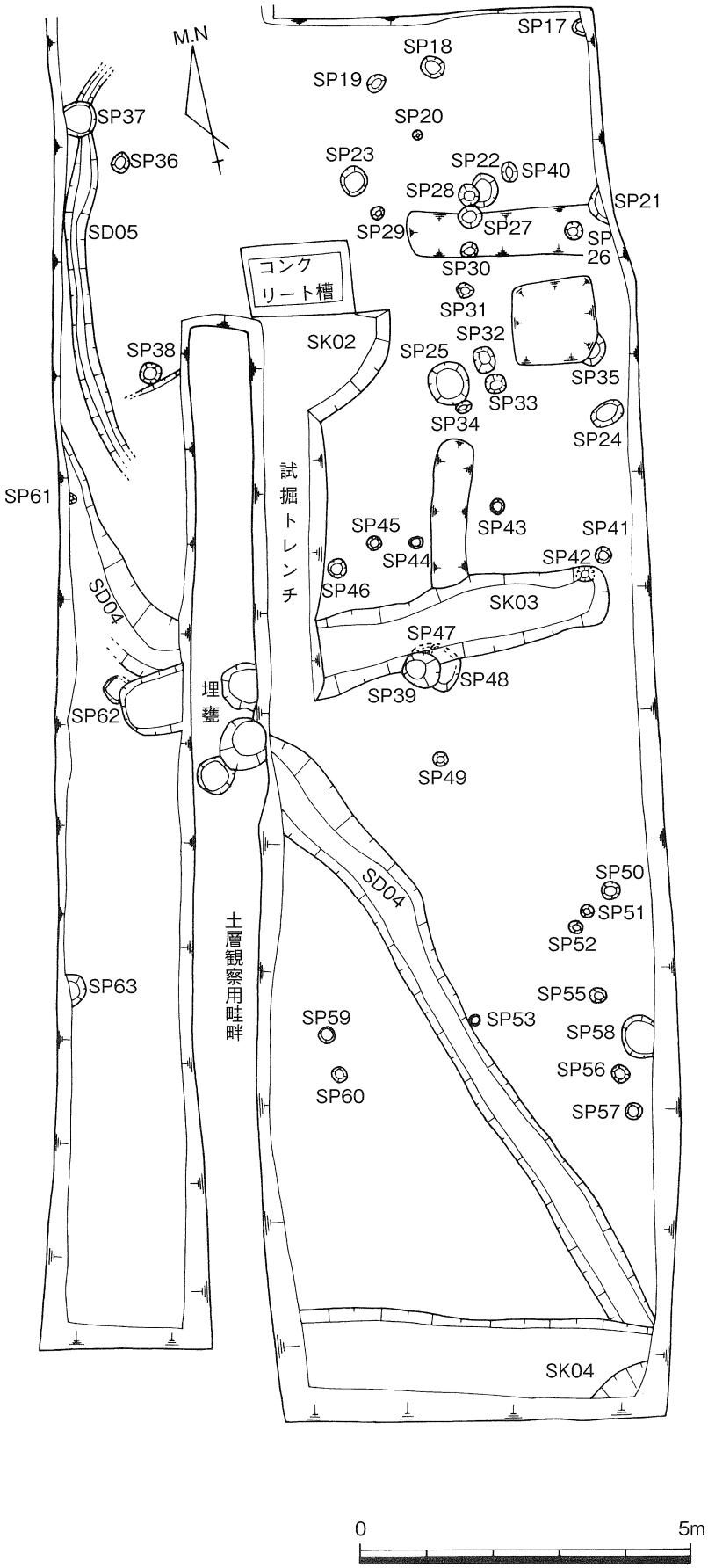


第５図　調査区旧地形図（縮尺 1/200）

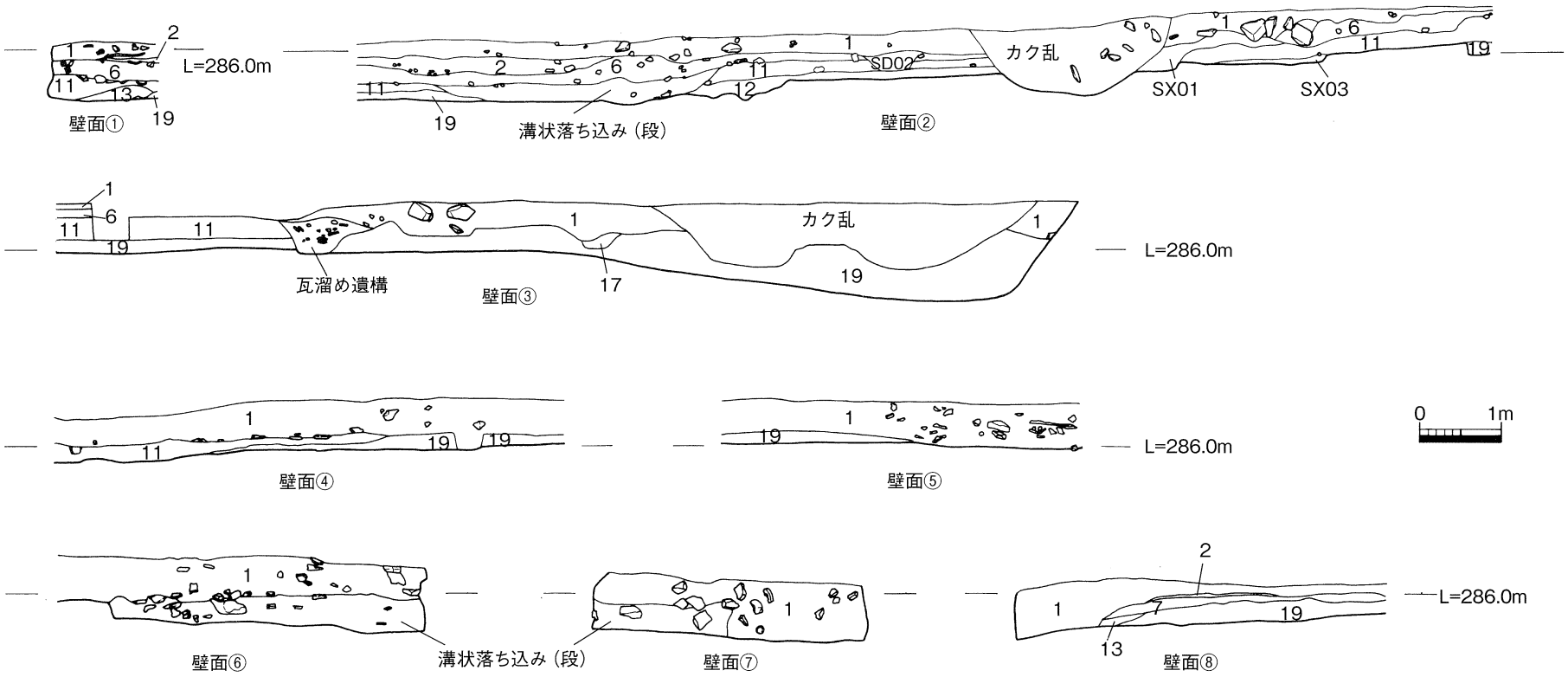
出土遺物は，弥生土器，須恵器，土師器，土師質土器，瓦質土器，陶磁器，瓦，石器，銅銭，鉄製品などがコンテナ 36 箱分出土した。特に多いのは丸瓦と平瓦で，遺物の大半を占める。



第 6 図　調査区北側遺構平面図（縮尺 1/100）



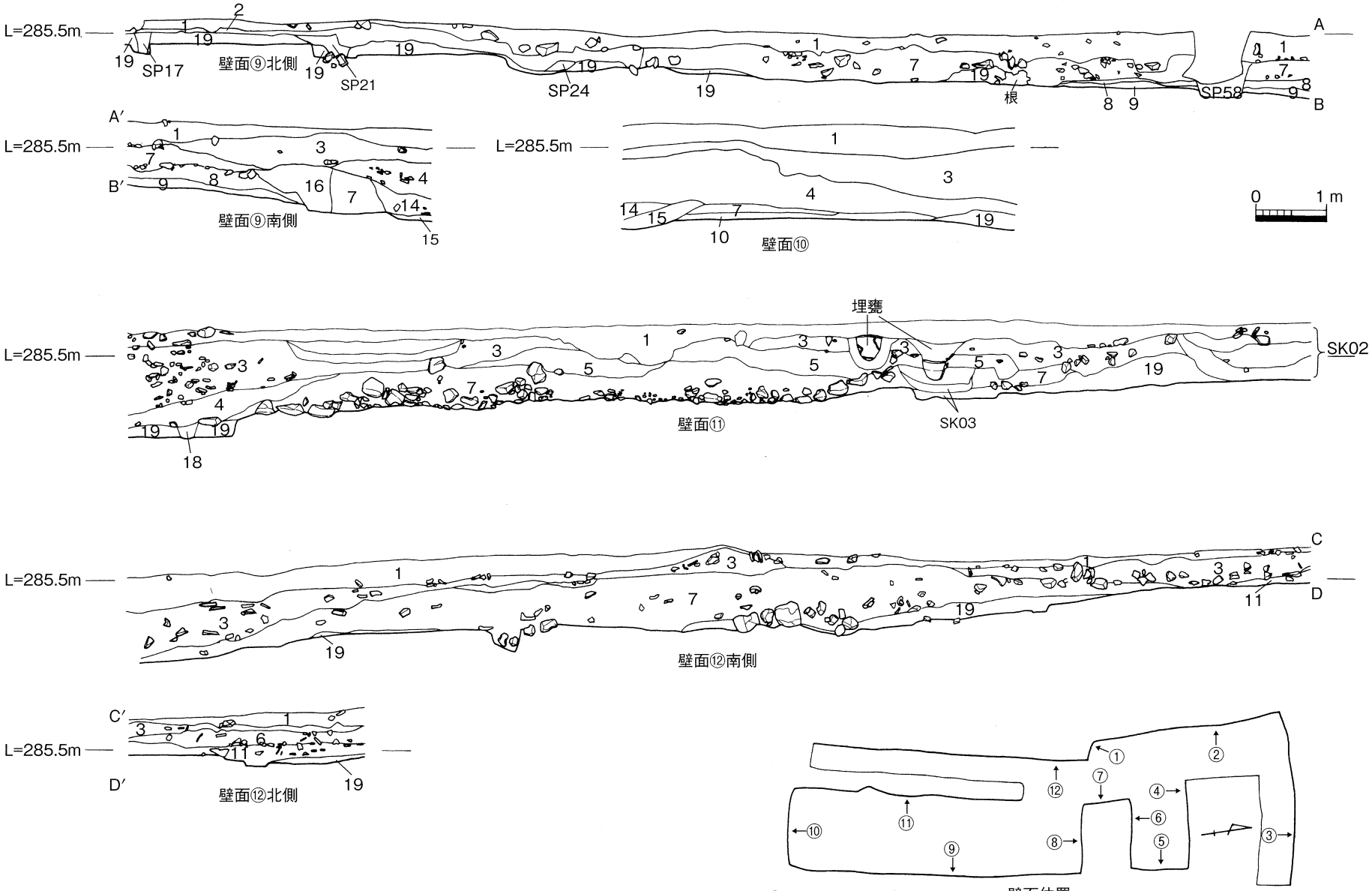
第７図　調査区南側遺構平面図（縮尺 1/100）



土層名

1　表　土
2　整地層　黄色土(2.5Y8/6，旧宝物館の整地層か？)
3　整地層　赤褐色土(10R4/4，風化安山岩・瓦片を多く含む)
4　整地層　褐色土(7.5YR4/3，瓦片を含む)
5　整地層　褐色土(7.5YR4/6，風化安山岩砕片・瓦砕片を含む)
6　包含層　明褐色粘質土(7.5YR5/6，やや硬い，いぶし瓦包含層)
7　整地層　赤褐色土(10R4/3，風化安山岩・瓦片を多く含む)
8　包含層　灰赤色土(2.5YR4/2，軟らかい)
9　包含層　暗赤灰色土(2.5YR3/1，軟らかい)
10　包含層　にぶい赤褐色土(2.5YR4/4)
11　包含層　暗赤褐色粘質土(2.5YR3/2，布目瓦包含層)
12　包含層　赤褐色粘質土(2.5YR4/6，弥生土器包含層)
13　包含層　暗赤灰色土(7.5R3/1)
14　土　坑　灰褐色土(5YR4/2，焼土塊を含む，SK04 上層)
15　土　坑　黒色炭(7.5YR2/1，SK04 下層)
16　土　坑　暗赤褐色土(5YR3/3，下部が黒く焼けている)
17　溝　？　灰黄褐色土(10YR4/2)
18　柱　穴　灰赤色粘質土(7.5R4/2，風化安山岩砕片・土師器砕片を含む)
19　地　山　淡黄色粘質土(5Y8/4，凝灰岩風化土の２次堆積)

第８図　調査区壁面土層図①（縮尺 1/80）



第９図　調査区壁面土層図②（縮尺 1/80）

第３節　遺構および包含層と遺物

遺構・包含層と遺物の報告にあたっては，通例時代順に行なう場合が多いが，本遺跡では遺構の年代について不確定な要素を多く含むことから，遺構の種類順に報告する。それは，溝（SD），土坑（SK），溝状落ち込み（段），瓦溜め遺構，不明遺構（SX），埋甕，柱穴（SP，掘立柱建物跡（SB）を含む），遺物包含層（整地層）である。個々の遺構および包含層の詳細な年代については，まとめで検討している。

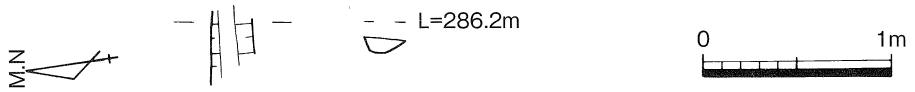
ＳＤ０１（第10図）

調査区北西端に位置する溝で，地山上面で検出した。瓦溜め遺構およびSX03に挟まれ，東西方向にわずか40cmしか残っていなかった。幅約20cm，深さ約10cmを測り，断面は浅いＵ字形である。出土遺物もなく所属時期は不明だが，SX03に切られていることから飛鳥時代以前と考えられる。

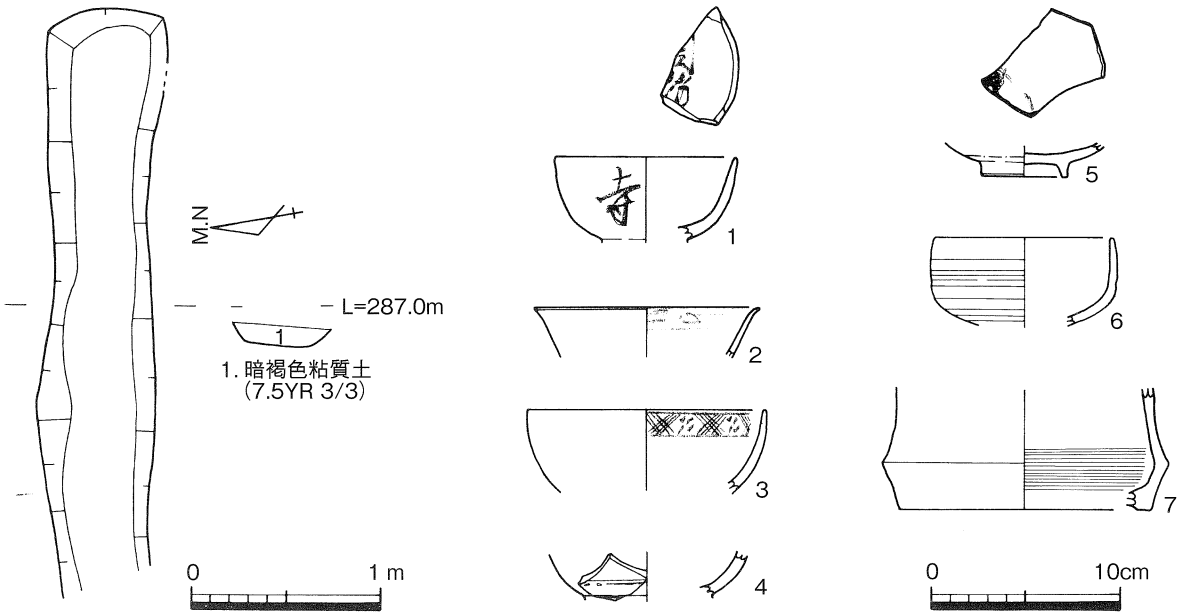
ＳＤ０２（第11図）

調査区北側中央付近に位置する溝で，第６層（いぶし瓦包含層）上面で検出した。東西方向にまっすぐのび，検出長は約3.1ｍを測るが，調査区西壁（第８図壁面②）においても確認できることから，実際は5.5ｍ以上あり，西側は調査区外にのびる。東端はSP12と接して終了しており，SP16を切るが，SP15に切られる。幅約70cm，深さ約20cmを測り，断面は浅い逆台形を呈し，埋土は暗褐色粘質土の単一層である。

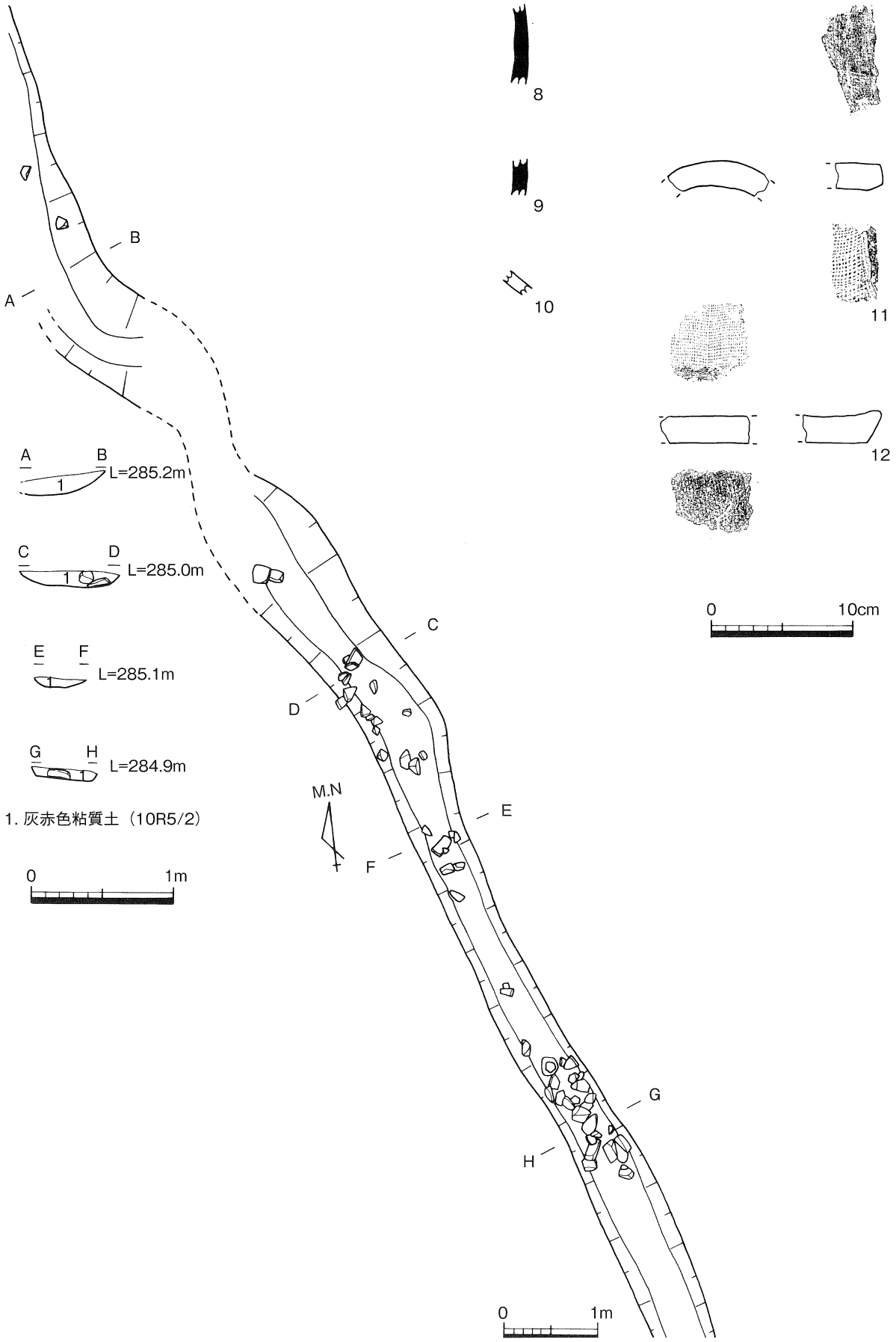
出土遺物は，第11図１～７である。１は肥前系磁器の染付碗で，外面に呉須で「寺」と書かれており，18世紀のものである。２は肥前系磁器の端反り碗で，19世紀中頃のものである。３は肥前系磁器の青磁染付碗で，口縁部内面に四方襷文が見られ，18世紀後半のものである。４は産地不明の陶胎染付呉須絵碗で，18～19世紀のものである。５は肥前産の京焼風陶器皿で，底部外面に「清水」の刻印が押されており，18世紀前半のものである。６は瀬戸美濃系陶器の腰錆茶碗で，18世紀後半のものである。７は器種不明の土師質土器である。これら出土遺物を概観すると，18世紀～19世紀中頃の遺物が見られ，溝の廃棄年代は江戸時代末～明治時代初頭と考えられる。



第10図　ＳＤ０１平面・断面図（縮尺1/40）



第11図　ＳＤ０２平面・断面図（縮尺1/40）出土遺物実測図（縮尺1/4）



第12図　ＳＤ０４平面・断面図（縮尺1/60・1/40）出土遺物実測図（縮尺1/4）

ＳＤ０３　→　SK03 に改称

ＳＤ０４（第 12 図）

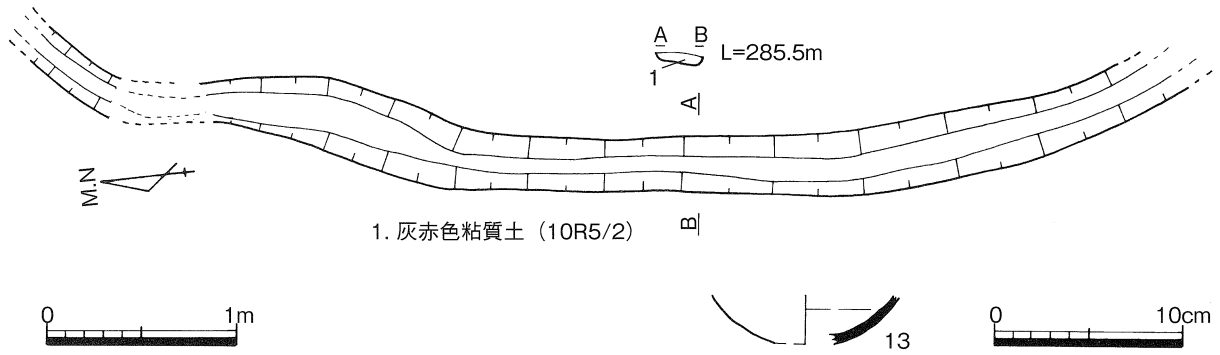
調査区南側に位置する溝で，第７層を除去した地山上面で検出した。北西から南東へやや蛇行しながら下り，検出長は約 16 m を測る。北西端は調査区内で不明瞭となり，南東端は SK04 によって切られ，途中では SK03 によって切られている。幅約 50cm ～ 1 m，深さ約 12cm を測り，断面は北側では浅いＵ字形，南側では逆台形を呈し，埋土は灰赤色粘質土の単一層である。

出土遺物は，第 12 図８～ 12 である。８・９は須恵器壺，10 は土師器壺の細片である。11 は丸瓦，12 は平瓦の破片で，ともに凹面に布目が残り，焼成は須恵質である。なお 12 の凸面には縄叩き痕が見られる。これら出土遺物は細片であるため時期決定は慎重を要するが，平安時代頃のものと考えられる。一方，SD04 の被覆土である第７層は，後述するように江戸時代前期である。また，明らかな室町時代の遺物を含まないことから，平安から鎌倉時代の幅で，SD04 の年代を推定しておきたい。

ＳＤ０５（第 13 図）

調査区南側北西端に位置する溝で，第７層を除去した地山上面で検出した。南北方向に弓なりになってのび，検出長は約 6.1 m を測るが，両端は調査区内で消失し，途中で P37 に切られる。幅約 30 ～ 40cm，深さ約５cm を測り，断面は浅い逆台形を呈し，埋土は灰赤色粘質土の単一層である。

出土遺物は，第 13 図 13 の須恵器椀の細片で，平安時代のものである。これのみで年代決定は難しいが，SD04 と埋土が同じで，第７層に被覆されていたことも考慮して，平安時代から鎌倉時代の幅で年代を推定しておきたい。

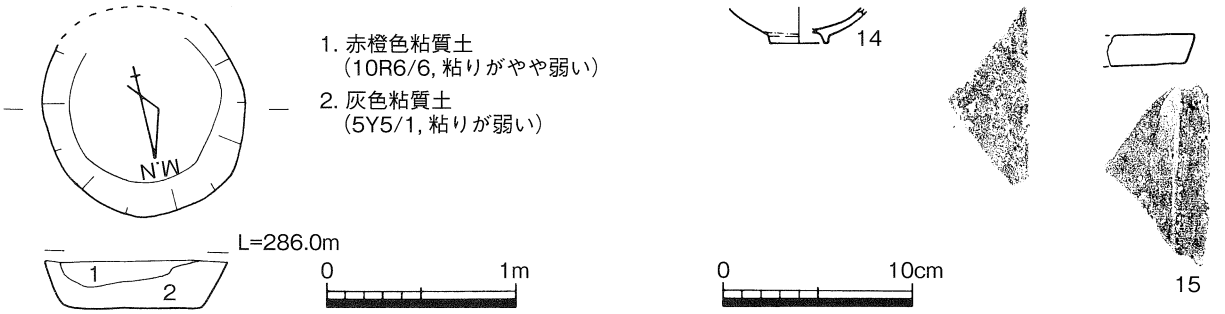


第 13 図　ＳＤ０５平面・断面図（縮尺 1/40）出土遺物実測図（縮尺 1/4）

ＳＫ０１（第 14 図）

調査区北端中央に位置する土坑で，表土を除去した地山上面で検出した。平面形は直径約１～ 1.1 m を測る円形であるが，南端は調査区外である。上部は削平されていると考えられるが，深さ約 25cm を測り，断面は逆台形を呈する。埋土は２層に分かれ，上層は赤橙色粘質土，下層は灰色粘質土であり，両層からいぶし瓦が出土している。

図化した出土遺物は第 14 図 14・15 で，下層出土である。14 は京信楽系陶器の丸碗で，18 世紀後半以降のものである。15 は平瓦の破片である。これら出土遺物から，18 世紀後半以降の年代が考えられる。

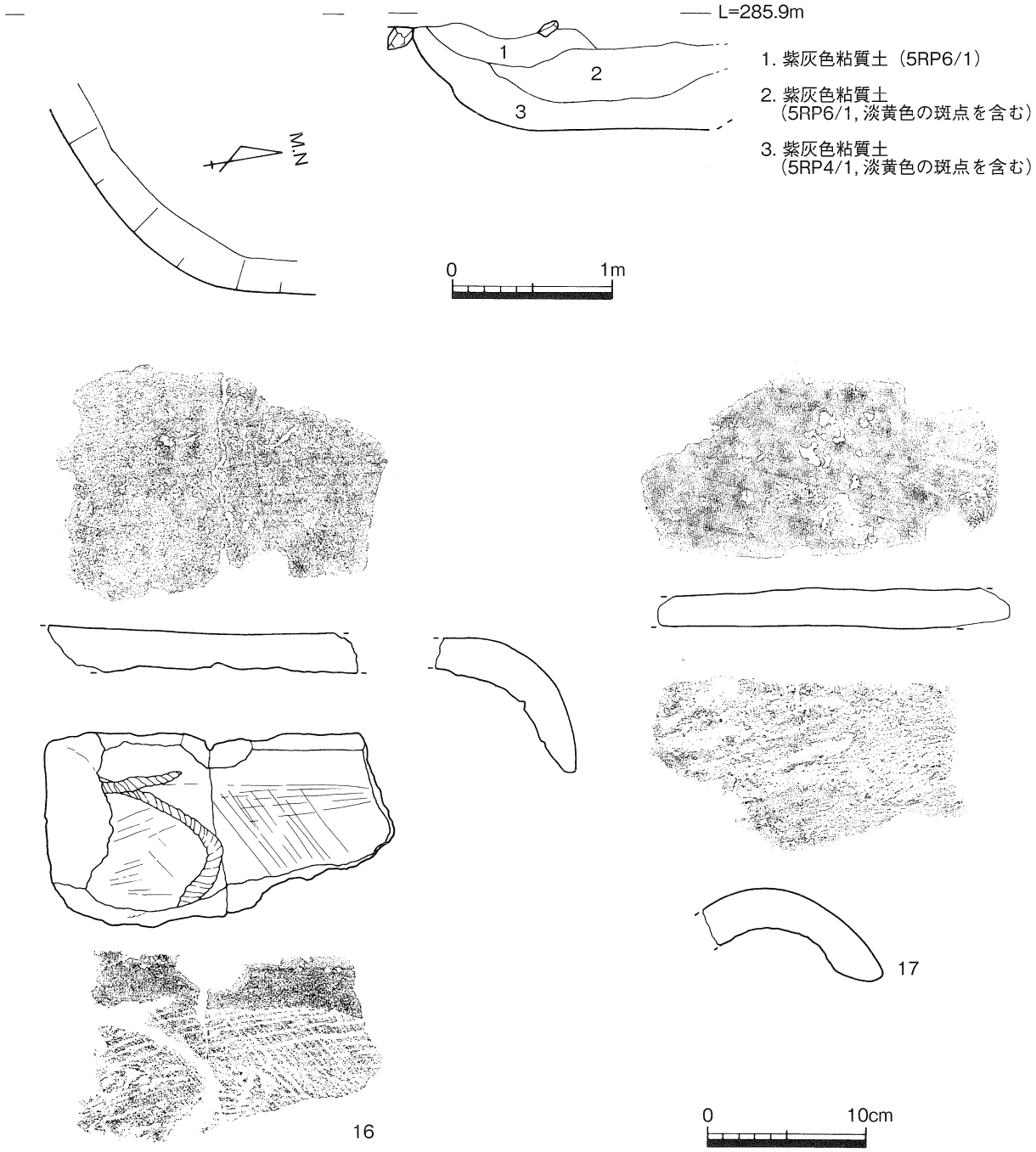


第 14 図　ＳＫ０１平面・断面図（縮尺 1/40）出土遺物実測図（縮尺 1/4）

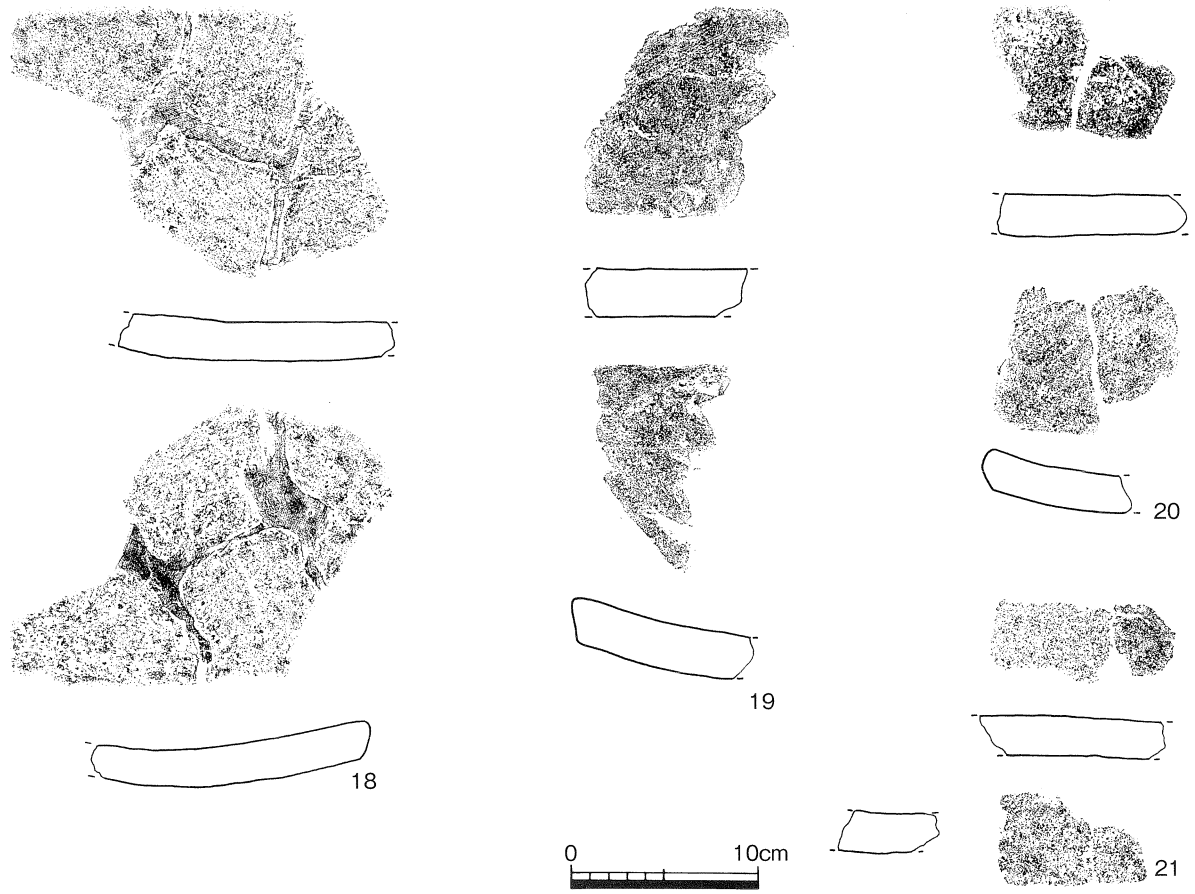
ＳＫ０２（第15・16図）

調査区南側北中央に位置する土坑で，表土を除去した第３層上面で検出した。北半分をコンクリート槽で壊され，西側は土層観察用畦畔の中にあるため平面形は不明だが，直径約３ｍの円形である可能性を推測できる。深さ約60cmを測り，断面は浅いＵ字形を呈し，平底である。埋土は紫灰色粘質土で，淡黄色の斑点を含むか含まないか，または微妙な色合いで３層に分かれる。

図化した出土遺物は第15・16図16～21で，16・17が丸瓦片，18～21は平瓦片である。焼成は，16・17・21がいぶし瓦で，18～20が土師質である。16の凹面には，切断痕と吊り紐痕が見られる。いぶし瓦を含むことと，第３層より新しいことを考慮すると，比較的新しい時期の遺構と考えられる。



第15図　ＳＫ０２平面・断面図（縮尺1/40）出土遺物実測図①（縮尺1/4）

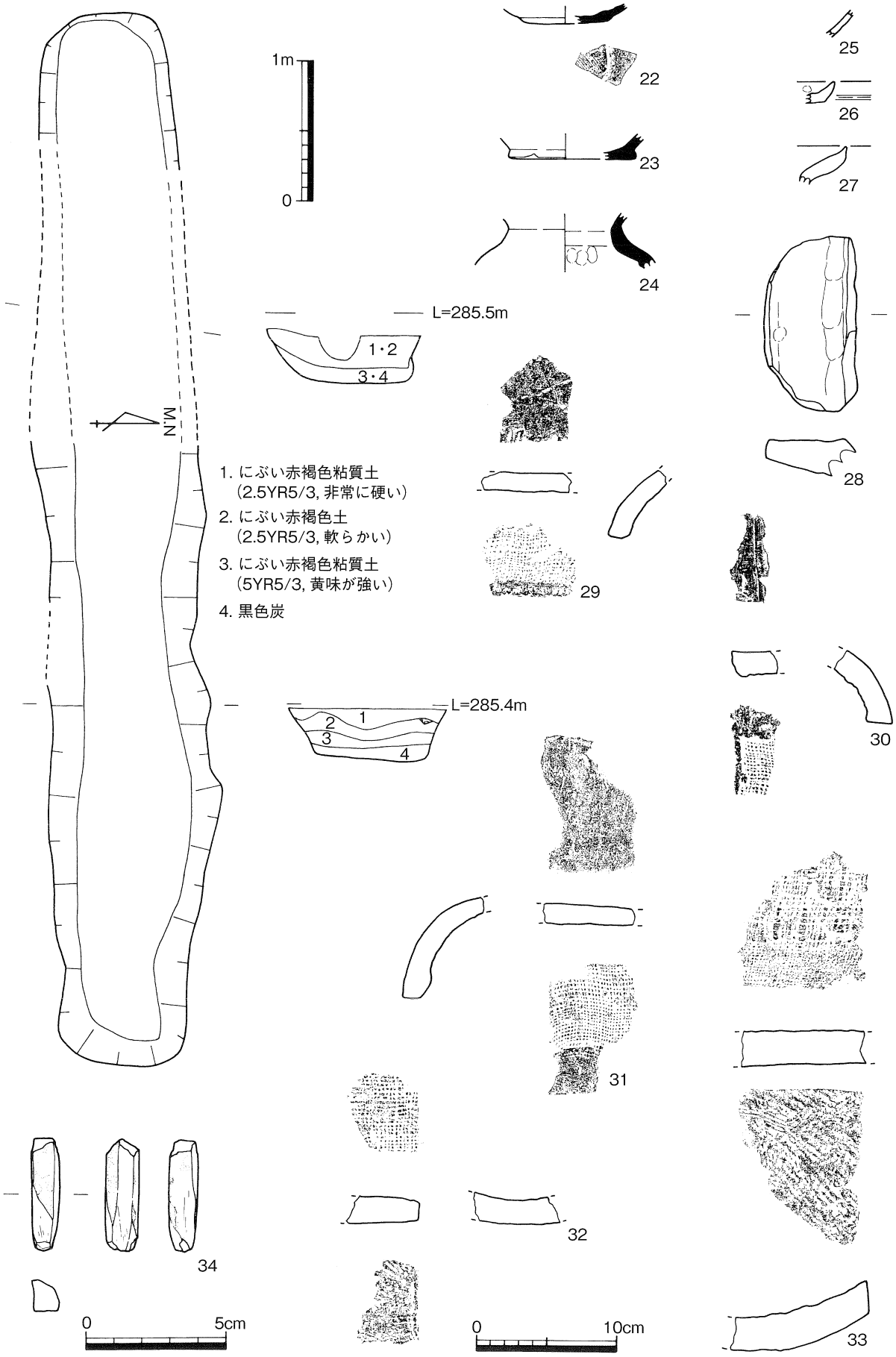


第16図　ＳＫ０２出土遺物実測図②（縮尺1/4）

ＳＫ０３（第17図）

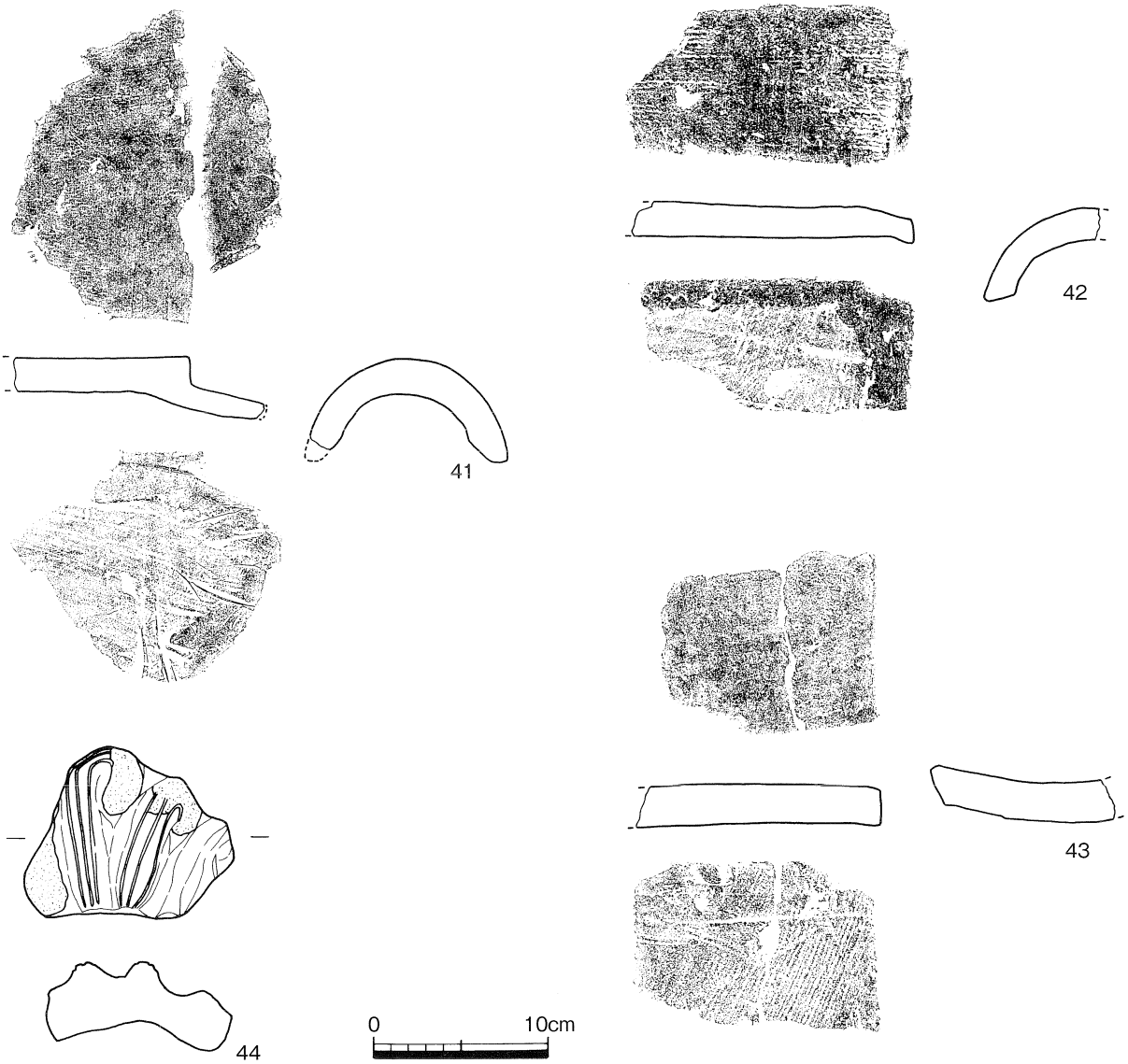
調査区南側中央に位置する土坑で，第５層を除去した第７層上面で検出した。平面形は，東西方向に溝状にのびることから，検出当初はSD03と呼称したが，全容が判明してからはSK03に呼称を改めた。長さ7.5 m，幅1.15m，深さ40cmを測り，断面は逆台形を呈するものの，側壁の立ち上がりが垂直に近い箇所も認められる。埋土は４層に分かれ，上層はにぶい赤褐色粘質土，中層はにぶい赤褐色土，下層はにぶい赤褐色粘質土で，最下層は厚さ約10cmの黒色炭が底全体を覆っている。側壁には焼けた痕跡が確認された。SK03の下部では，後述する第７層中の集石にあたるが，この集石の石をわざわざ除去してまでSK03が掘削されている。上層から下層にかけて遺物がやや多く出土し，最下層の黒色炭層からも遺物が若干出土している。遺物が一定量出土しているがあまり多くないこと，炭が均一に底面に見られること，平面や断面形も比較的整っていること，集石の石を除去してまで深く掘削していることを考慮すると，単なるごみ捨て場とは考えられない。寺院の境内地にあることから，宗教的儀礼に使用された可能性もあるが，現段階では用途は特定できない。

出土遺物は第17図22～34で，26・27が最下層出土，ほかは上層から下層出土である。22は須恵器杯，23は須恵器鉢，24は須恵器壺の細片である。25は瓦器椀，26は土師質土器皿，27は土師質土器鍋，28は土師器竈の細片である。29～31は土師質の丸瓦片で，凹面に布目が見られる。32・33は須恵質の平瓦片で，凹面に布目，凸面に縄叩き痕が残っている。34は弥生時代に属する扁平片刃石斧の破片である。これら出土遺物を概観すると，細片だが平安時代から鎌倉時代にかけてのものが見られる。しかしながら，このSK03が17世紀末～18世紀前半の第７層を切り込んで掘削されていることを考慮すると18世紀前半以降の年代となる。一方，SK03より上位に第３層と第５層という２層もの整地層があり，さらに第３層上面にある埋甕が19世紀頃のものであることから，SK03は18世紀前半に近い時期の可能性があり，18世紀の中に収まる年代観が考えられる。



第17図　ＳＫ０３平面・断面図（縮尺 1/40）出土遺物実測図（縮尺 1/4, 34 は 1/2）

第 18 図　溝状落ち込み (段) 平面・断面図（縮尺 1/40）出土遺物実測図①（縮尺 1/4）



第 19 図　溝状落ち込み (段) 出土遺物実測図②（縮尺 1/4）

ＳＫ０４（第７図，第９図壁面⑨⑩第 14・15 層）

調査区南東隅に位置する土坑で，第４層を除去した第７層上面で検出できたが，平面ではほとんど確認できず，調査区壁面でのみ確認できた。深さは約 40cmを測り，断面は浅いＵ字形を呈する。埋土は２層に分かれ，上層は焼土塊を含む灰褐色土，下層は SK03 同様に黒色炭である。出土遺物は，調査区内では確認できなかった。

溝状落ち込み（段）（第 18・19 図）

調査区北側の南寄りに位置し，第6層（いぶし瓦包含層）を除去した第 11 層（布目瓦包含層）上面で検出した。調査区内を東西方向にまっすぐ横断する溝状の落ち込みだが，両肩を比較すると北側が高く南側が低くなっていることから段を形成している。これは，北から南に傾く地形に影響された結果と考えられる。底面では2条の溝が重なり合いながら平行しているが，埋土の観察では切り合い関係は認められない。検出長は9.6 mを測り，幅は平面では約 1.2m しか確認できなかったが，調査区西壁面（第8図壁面②）では幅約 3.4 mを確認できる。断面は，深さ 30cmの浅いＵ字形を呈し，埋土はにぶい赤褐色粘質土の単一層である。

出土遺物は第 18・19 図 35 ～ 44 で，瓦片が多く出土した。35 ～ 39 は三巴文軒丸瓦で，すべていぶし瓦であるが，39 はいぶしが弱いのか須恵質の焼成になっている。37 は瓦当径が他のものより小さい小型品である。40 は三巴文鳥衾瓦で，表面はいぶしているが，胎土は精製されておらず土師質である。これら

35 ～ 40 の瓦当面剥離材は，砂または粘土粉と考えられる。41・42 は丸瓦で，41 はいぶし瓦だが凹面に布目が見られ，42 は須恵質で凹面に布目，凸面に縄叩き痕が残されている。43 は平瓦で，いぶし瓦である。44 は留蓋と考えられる瓦片で，いぶし瓦である。

これら出土遺物から年代を推測したいが，土器が出土していないことから，軒瓦を対象とする。屋島寺の近辺では，佐藤竜馬氏によって高松城跡出土軒瓦の編年が成されている(佐藤 2003)。溝状落ち込み（段）出土軒丸瓦の特徴は，巴文の尾が長いことが指摘でき，35 のように巴尾が連続して圏線となっているものや，37 のように巴文と圏線が別の可能性があることから古い要素が見られる一方，36・39・40 のように圏線がなく巴尾が分離している新しい要素も見られる。内区指数（内区径／外区径）は第1表のとおり 0.69 ～ 0.79 を示すことから，内区が占める割合が高いことが指摘できる。珠文数は復元で 16 個前後から 28 個前後と多く，珠文の直径も５～ 10㎜と小さめであるが，35 のように珠文数が 14 個前後とやや少なく，珠文直径も 12㎜と大きく新しい要素を含むものがある。胎土は砂粒を多く含んだ中世的なものが多いが，37 は精製されており近世的になっている。以上の特徴から，総体的に見れば佐藤編年の第６面・古（様相1）に相当するが，一部に第６面・新（様相２・３）に下る要素も見出せる。一方，軒丸瓦以外についてもほぼ同じ頃のものと推測できる。ただし，42 は平安時代頃の瓦で，混じったものである。第６面・古が 1588 年？～ 1610 年代と推測され，第６面･新が 1620 年代～ 1650 年代と推測されていることから，溝状落ち込み（段）の年代は 16 世紀末～ 17 世紀前半と考えられる。

さて，溝状落ち込み（段）の用途については，延長上に本堂（鎌倉時代末期）の軒先があり，また底面のレベルが西に行くほど低いことから，本堂の雨落ち水を西へ流す排水溝と調査時は考えた。しかしながら，幅が約 3.4 ｍも広いことを考慮すると排水溝とは考えにくく，区画溝や道路的な目的で掘削された溝の可能性もある。

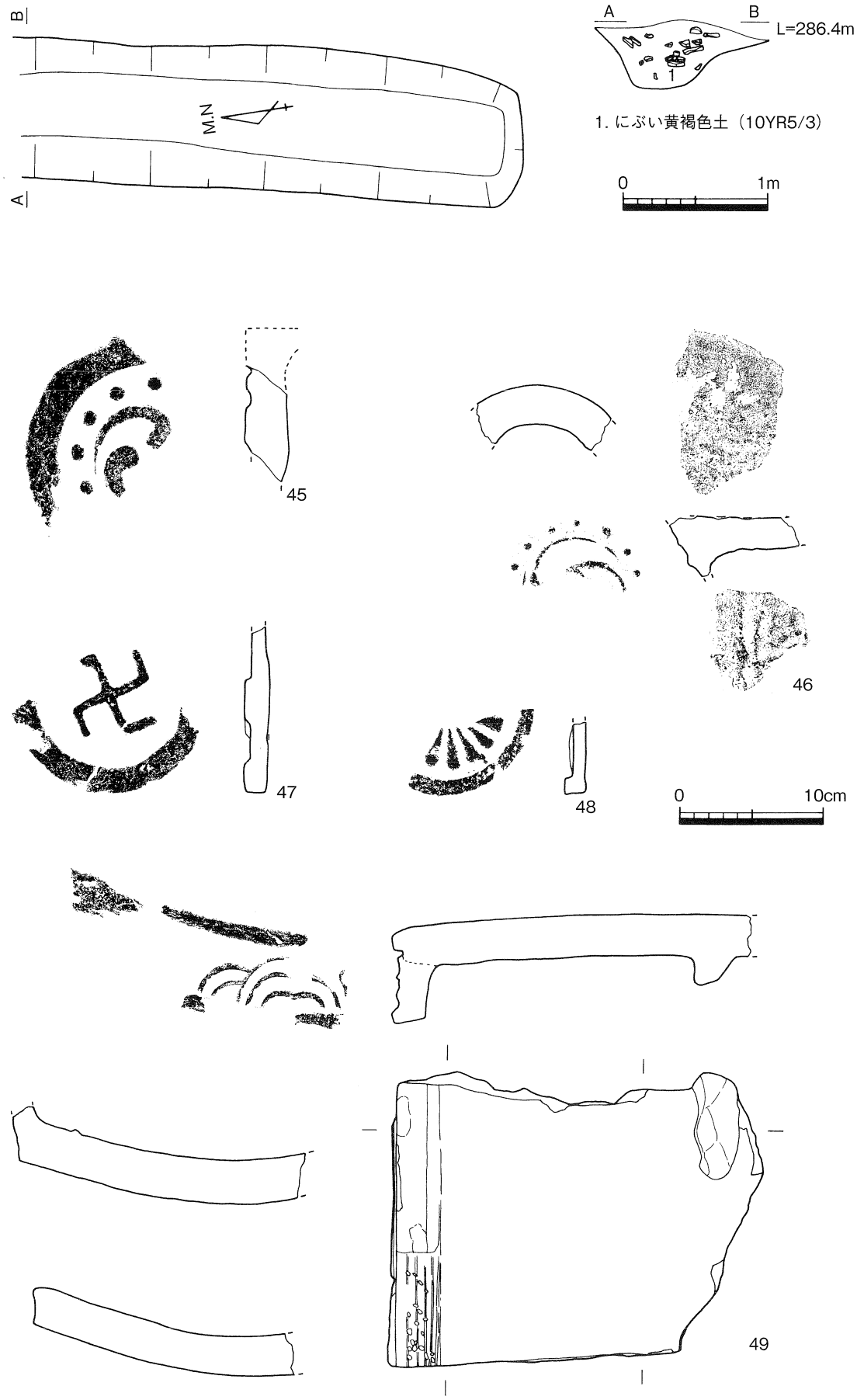
遺物番号	35	36	37	38	39	40
復元瓦当径	17.8㎝	16.8㎝	12.4㎝	14.6㎝	16.4㎝	
内区指数	0.7	0.75	0.69	0.79	0.74	
復元珠文数	14個前後	16個前後	16個前後	28個前後	20個前後	16個前後
珠文直径	12㎜	8㎜	6㎜	5㎜	10㎜	9㎜

第１表　溝状落ち込み（段）出土 三巴文軒丸瓦 計測値一覧表

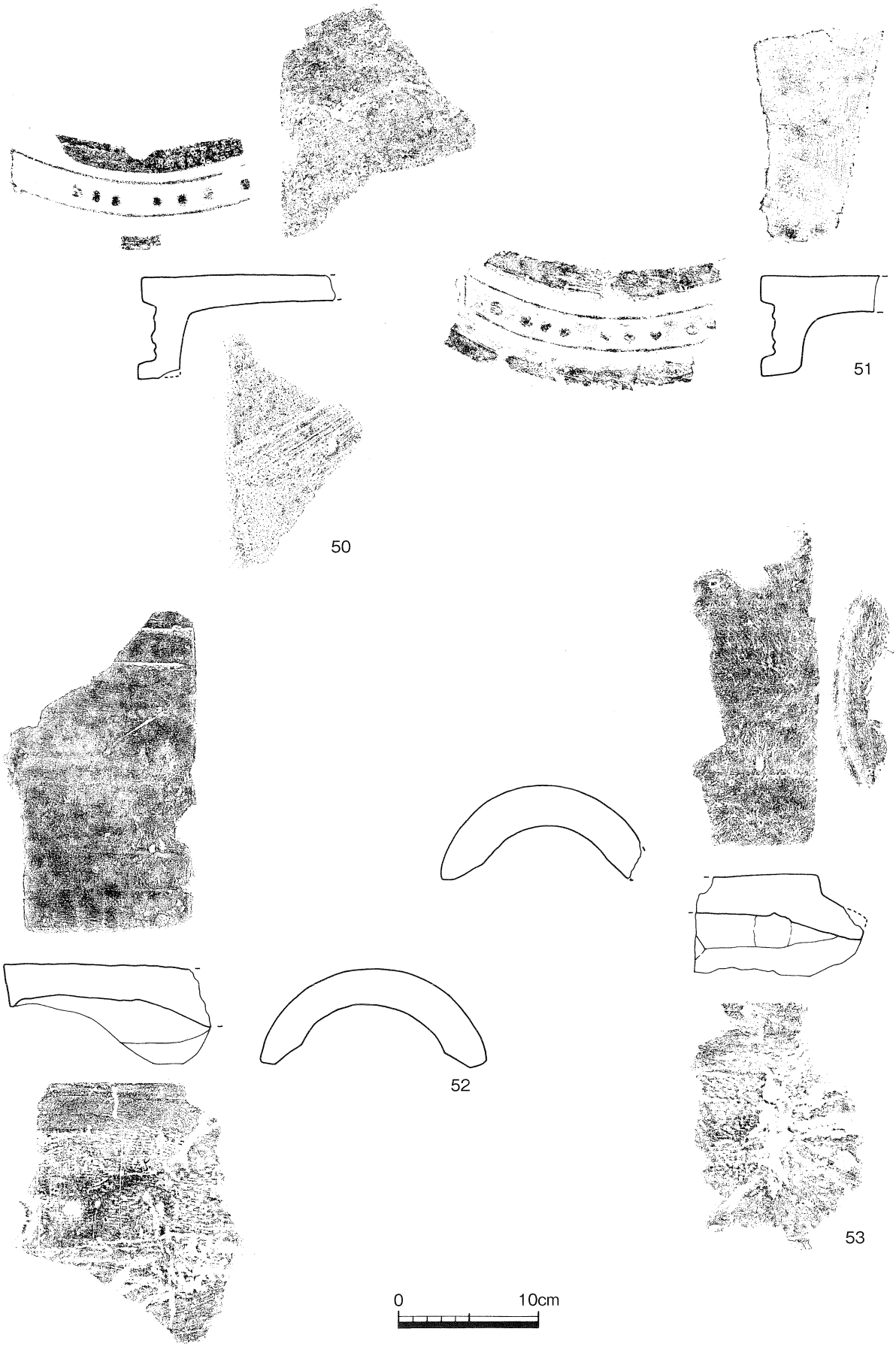
瓦溜め遺構（第 20 ～ 22 図）

調査区北西端に位置し，表土を除去した第 11 層（布目瓦包含層）と地山上面で検出した。南北方向（Ｎ 12° Ｅ）にまっすぐのびる細長い土坑で，南端は調査区内で終わっており，北側は調査区外にのびる。SD01，SX01・03 と重複しており，これらを切っている。検出長は約 3.5 ｍ，幅は約1ｍ，深さ約 30㎝を測り，断面は上が広がるＵ字形を呈し，埋土はにぶい黄褐色土の単一層である。遺構名が示すとおり，いぶし瓦片が多数出土した。

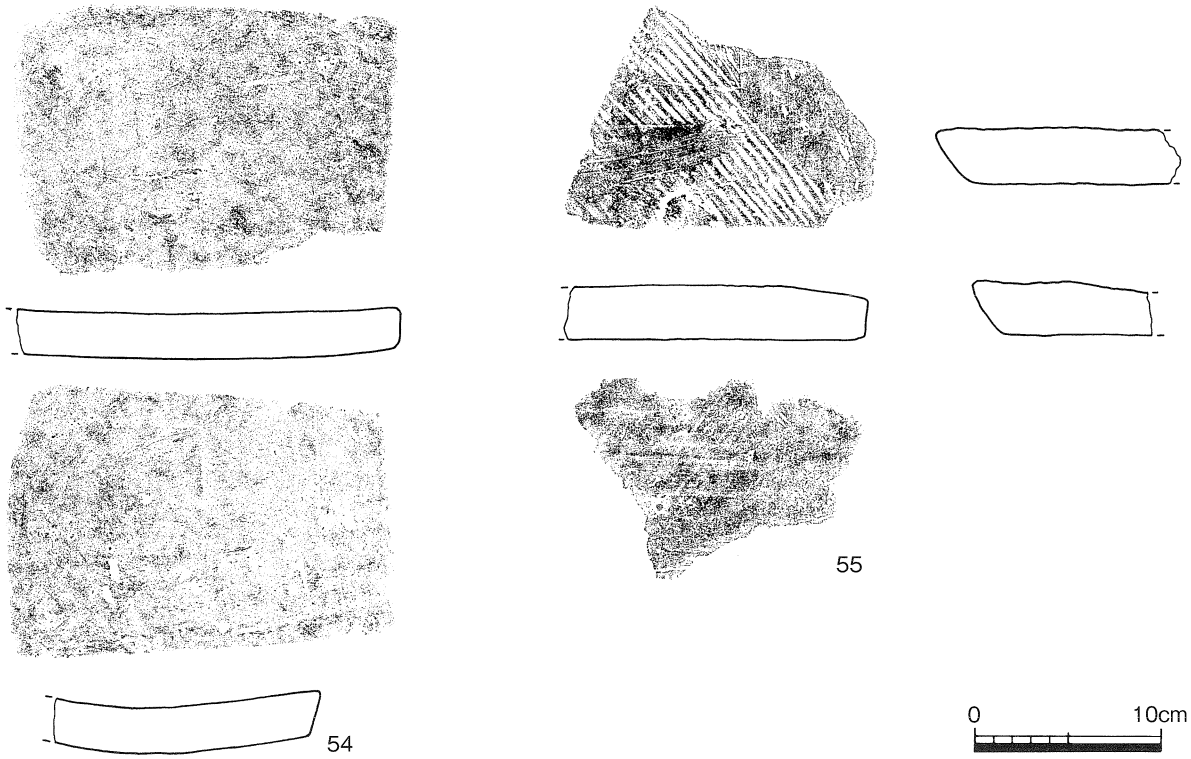
出土遺物は第 20 ～ 22 図 45 ～ 55 で，瓦のみである。45 は三巴文軒丸瓦で，復元瓦当径は 17.2㎝と大振りだが，復元珠文数は 12 個前後とやや少なく，巴文の尾も短い。瓦当面の剥離材は，摩滅のため確認できない。46 も三巴文軒丸瓦で，復元珠文数は 16 個前後と多く，拓本では不明瞭だが巴文の尾が連続して圏線状をなす。47 は卍文軒丸瓦で，薄手の作りで，いぶし瓦である。48 は菊丸瓦で，復元瓦当径は 12㎝と大きい部類に入り，瓦当径に比して周縁幅が狭い。46 ～ 48 は，どれも 45 同様に摩滅が著しい。49 は波状文軒平瓦で，凹面側縁前側に軒丸瓦滑り止め用の縦桟が約 16㎝の長さで取り付き，凸面中央後側にも滑り止め用の突起が付いている。波状文は中心部分しか残っていないが，左右相対する文様を断面方形の凸線で明確に表現している。また，拓本では表現できなかったが，脇区幅は５㎝と広く，瓦当上縁を面取りしている。いぶしが後側しか付着しておらず，焼成は土師質となっている。50・51 は連珠文軒平瓦で，どちらも珠文を３個一組とし２組以上配して圏線で囲っており，同笵品と考えられる。瓦当部の粘土接合方法は明確でない。顎後縁を面取りしている。凹面に布目，凸面に斜め方向の板ナデ調整が見られる。いぶしが部分的に付着しているだけで，50 は須恵質，51 は土師質の焼成となっている。52・53 は丸瓦で，どちらもいぶし瓦だが，52 には釘穴が穿たれている。54 は平瓦で，いぶし瓦である。55 は平瓦に似るが，側縁断面（拓本（上）の下端）が鋭角であり，端部上面（拓本（上）の右上）が斜めにカットされている。



第 20 図　瓦溜め遺構平面・断面図（縮尺 1/40）出土遺物実測図①（縮尺 1/4）



第 21 図　瓦溜め遺構出土遺物実測図②（縮尺 1/4）



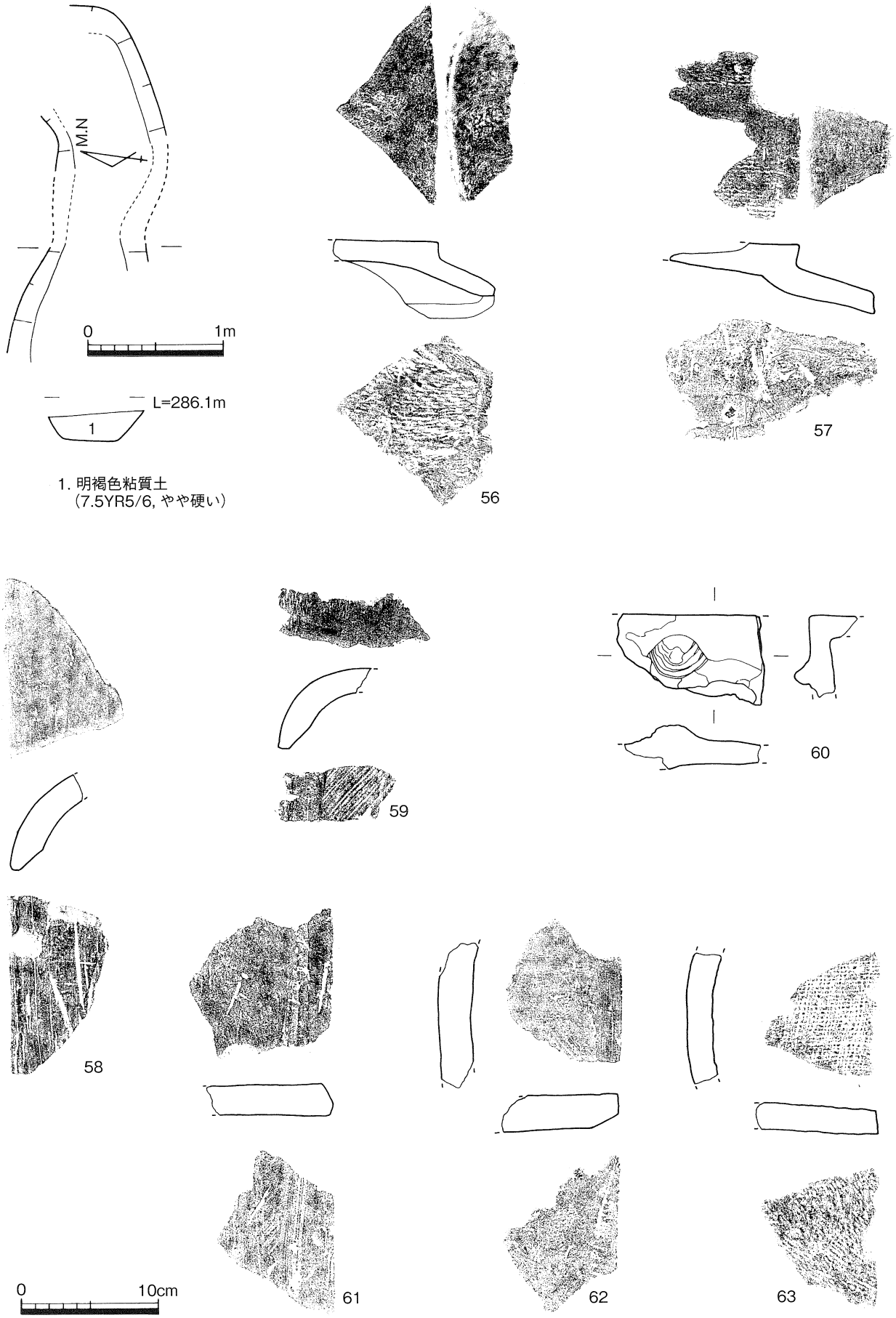
第22図　瓦溜め遺構出土遺物実測図③（縮尺1/4）

出土した軒瓦等の年代を推測したい。まず軒平瓦49～51は中世のものであるが，讃岐における中世瓦の研究は進んでおらず，他地域の研究成果として『法隆寺の至寶　瓦』(毛利光ほか1992)『中世瓦の研究』(山崎2000)を参照したい。49の波状文は15～16世紀に盛行する文様であり，近世には見られなくなる。近傍の類例として「野原濱村无量壽院　天文（?）　九月」銘の文字瓦が出土した高松城跡の無量壽院跡出土のものがあり，16世紀第3四半期頃のものと推測されている(中西2005)。近似した時期の可能性があるが，波状文の文様表出に違いもあることから，15～16世紀のものと捉えておきたい。なお，長岡京市勝龍寺跡出土のものや大阪市四天王寺出土のものにも類例が見られる。50・51の連珠文は中世前半（13～14世紀）に盛行する文様であるが，顎後縁の面取り技法が出現するのは南北朝期以降と推測されており，14世紀中頃～末のものと考えられる。以上の軒平瓦に対して，47の卍文軒丸瓦も中世後半のものと考えられるが，現況では特定できない。一方，江戸時代のものとして45･48の軒丸瓦･菊丸瓦がある。45は，瓦当径および珠文数から，高松城跡出土軒瓦編年に照らして，第5面（様相4）～第4面（様相5）に該当する可能性があり，17世紀後半～18世紀前半のものと考えられる。48も，瓦当径と周縁幅から45と同じ時期のものと考えられる。以上の出土瓦からは，瓦溜め遺構の年代については17世紀後半～18世紀前半と考えられるが，18世紀末～19世紀前半のいぶし瓦包含層との層位的な上下関係は不明であり，さらに下る可能性もある。

なお，留意すべき点は，調査時には存在した築地塀と同一方向で隣接していることである（第4図）。江戸時代末期に編まれた『讃岐國名勝圖會』の挿絵（第46図）によれば，同じ位置に築地塀が描かれており，しかも瓦溜め遺構の南端付近において直角に西へ折れている。絵図とは年代観に開きがあるが，築地塀に沿って掘削された可能性もあり，雨落ち水の暗渠排水等の可能性もある。なお，中世瓦を一定量含むことから，瓦葺き建物の修築または撤去に伴い掘削された土坑であるとも考えられる。

ＳＸ０１（第23図）

調査区北西端に位置し，表土および第6層（いぶし瓦包含層）を除去した第11層（布目瓦包含層）上面で検出した。東西方向に蛇行しながらのびる細長い溝状遺構で，東端は瓦溜め遺構に切られて調査区内で終わっており，西側は調査区外にのびる。一部を試掘トレンチや撹乱により壊されている一方，SX03を切っている。検出長は約2.6 m，幅は約80cm，深さ約20～30cmを測り，断面は逆台形を呈し，埋土は明褐色粘質土の単一層である。



第23図　ＳＸ０１平面・断面図（縮尺1/40）出土遺物実測図（縮尺1/4）

出土遺物は第23図56～63で，瓦のみである。56～59は丸瓦で，56・58はいぶし瓦，57・59は須恵質の焼成である。57～59の凹面には布目が見られ，57・59の凸面には縄叩き痕が残されている。60は用途不明瓦で，宝珠が表出されているいぶし瓦である。61～63は平瓦で，61がいぶし瓦，62・63は須恵質の焼成である。62・63の凹面には布目が見られ，61・62の凸面には板ナデ調整が施され，63には縄目叩き痕が残されている。

出土瓦は丸瓦・平瓦が主体であり，年代を決定する材料に乏しい。57・59・62・63のように古代から中世の遺物もみられるが，いぶし瓦が半数を占めることから，江戸時代と推測しておきたい。さらに，瓦溜め遺構に切られていることや，いぶし瓦包含層（第6層）に覆われていることから18世紀末以前となる。

ＳＸ０２（第24図）

調査区北東端に位置し，表土を除去して地山上面で検出した。遺構の西端を検出したのみで，北端は撹乱により不明瞭で，大部分は調査区外に位置するものと想定される。検出長は南北で約1.45ｍ，幅は約85cm，深さ約10cmを測り，断面は浅いＵ字形を呈する。

出土遺物は第24図64の丸瓦のみで，須恵質の焼成である。凹面に布目が見られる。土層や遺構の上下関係もないことから，遺構の所属時期は不明である。

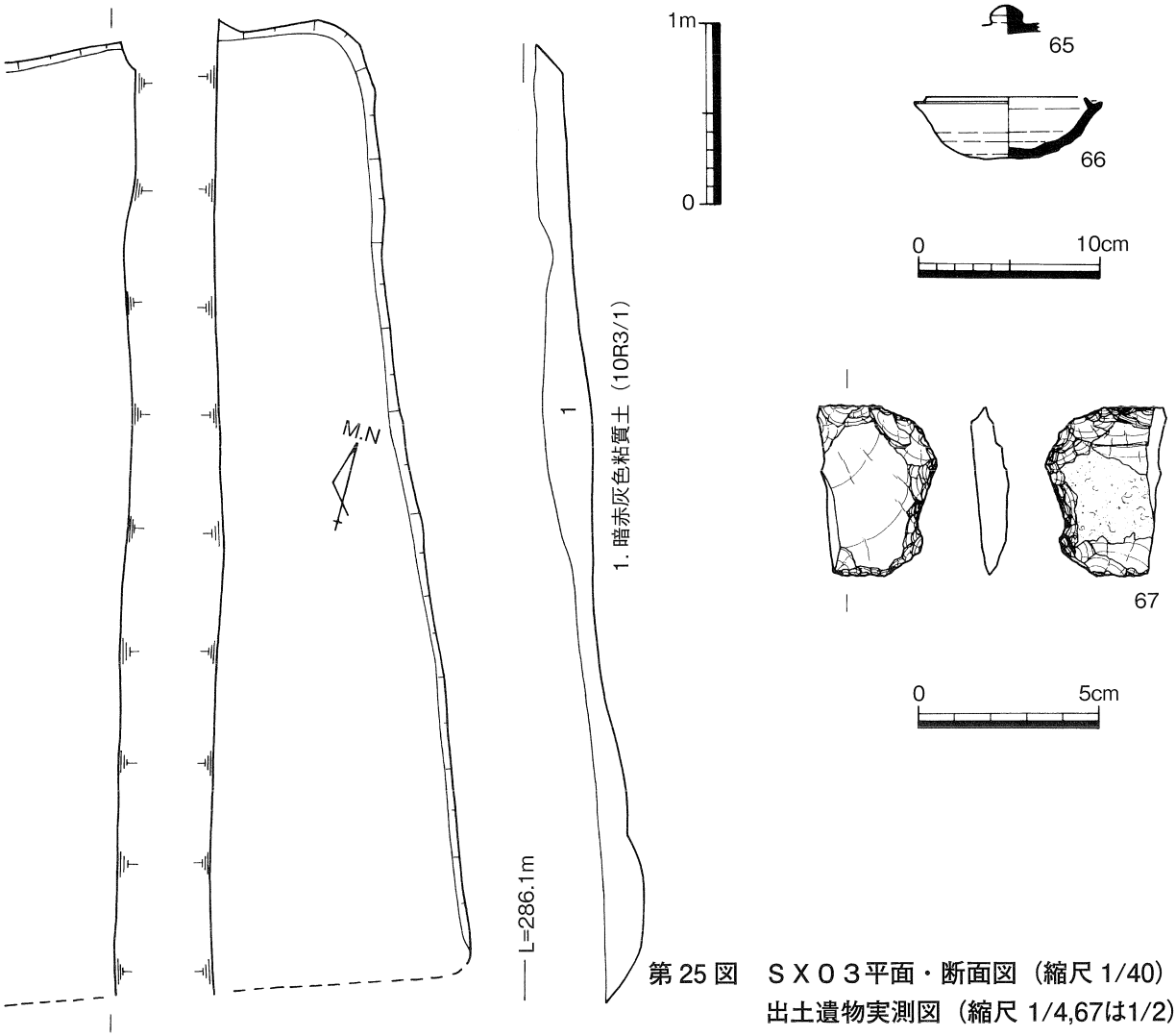
第24図　ＳＸ０２平面・断面図（縮尺1/40）出土遺物実測図（縮尺1/4）

ＳＸ０３（第25図）

調査区北西部に位置し，第11層（布目瓦包含層）を除去した第12層（弥生土器包含層）および地山上面で検出した。一部を試掘トレンチや瓦溜め遺構，SX01により壊されている。遺構の北端および東端を検出し，南端は平面では検出できなかったが，試掘調査時の土層断面から確認できた。遺構の東部分は調査区外にのびるが，一辺約5.2ｍを測る隅丸方形の平面プランに復元可能である。深さは約20cmが残り，床面は少しの凹凸が見られるが南に緩く傾斜した平坦面で，壁面は斜めに直線的に立ち上がる。埋土は暗赤灰色粘質土で，須恵器や石器が出土した。形状より竪穴住居跡の可能性も考えたが，柱穴がなく床面も傾斜していることから，住居跡とするには難しいと考えられる。

出土遺物は第25図65～67である。65は須恵器蓋で，頂部には高さがある宝珠摘みが付く。66は須恵器杯で，口縁部内側に短く内傾したかえりをもつタイプである。口径は8.9cmと非常に小さく，調整も回転ナデのみであることから，大阪府陶邑編年（田辺1981）のTK217型式に相当すると考えられる。67はサヌカイト製の打製石庖丁で，上辺部は敲打による背潰しが認められ，下辺部は両側からの調整により刃部を作り出している。

遺構の年代は，出土した須恵器から7世紀第2四半期頃と考えられる。なお，打製石庖丁は弥生時代のもので，混入品である。

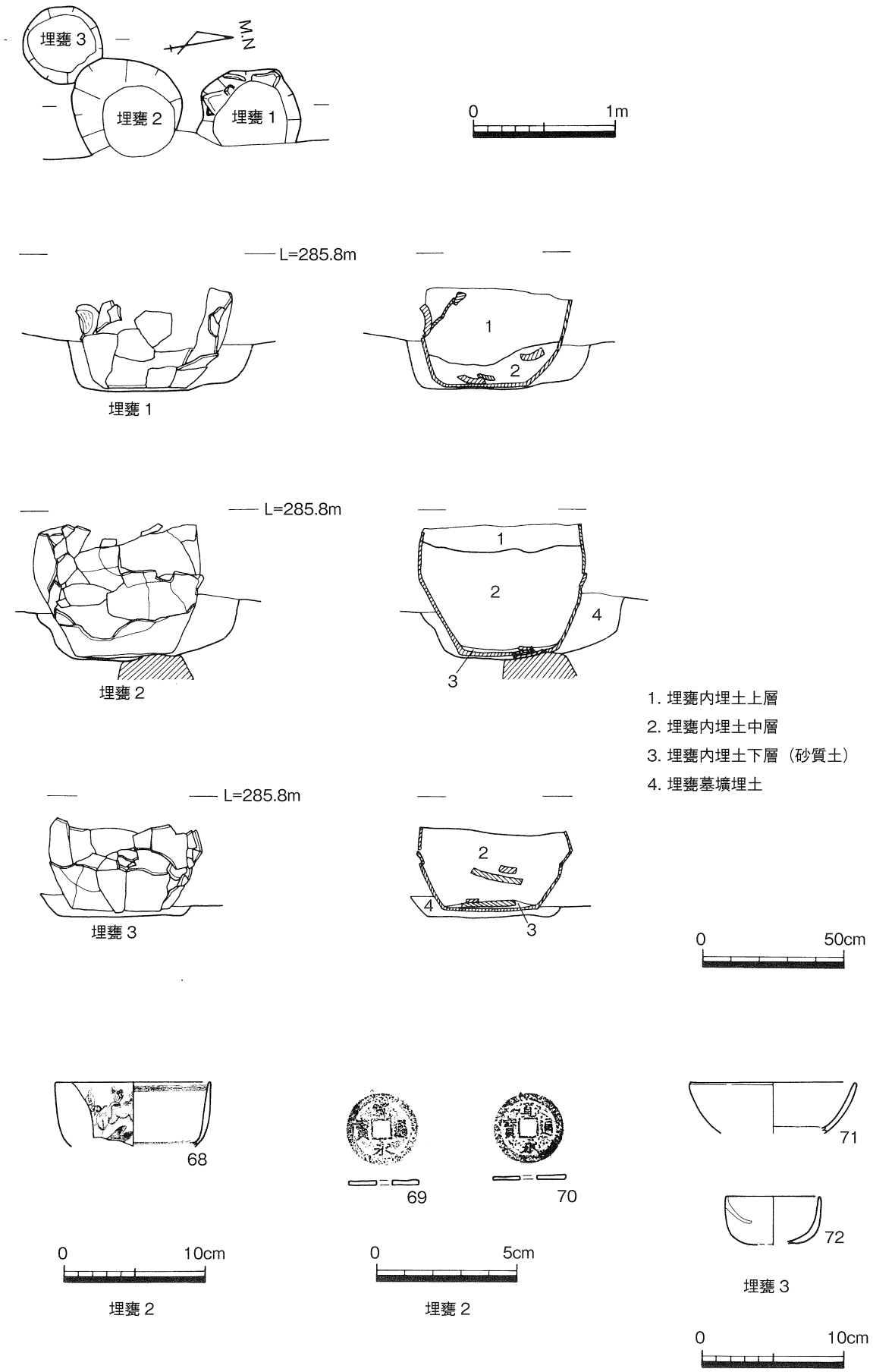


第25図　ＳＸ０３平面・断面図（縮尺 1/40）
出土遺物実測図（縮尺 1/4,67は1/2）

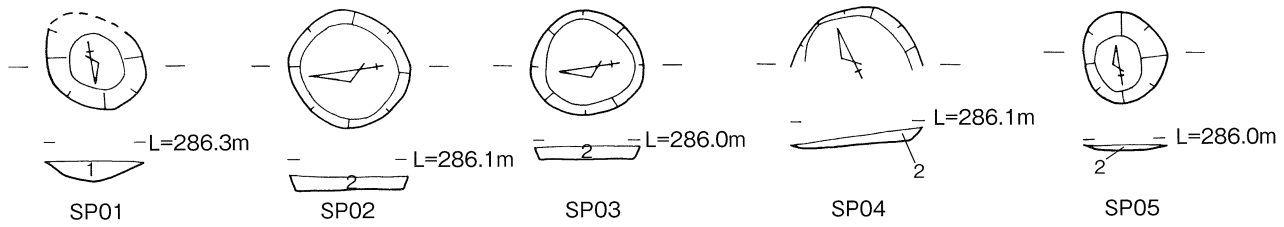
埋甕（第26図）

調査区南中央部に位置し，表土を除去した第３層（整地層）上面で検出したことになるが，実際は調査区南側に残した土層観察用畦畔を除去する際に検出している。一箇所にまとまって３基確認しており，北から順番に埋甕１～３と呼称したが，並び方には規則性は認められない。埋甕２の掘り方が埋甕３の掘り方を切っており，埋甕１・２の東側は試掘トレンチによって壊されている。また，埋甕の上部が失われており，旧宝物館建設時等によって壊されたと推定される。埋甕の墓壙は，やや歪な円形の平面プランで，直径60～80cmを測る。墓壙の深さは約50cmを測り，その断面下部は浅いＵ字形または逆台形を呈するが，上部は逆「ハ」の字形に開いている（第９図壁面⑪）。墓壙の底中央に直接埋甕を据え置いており，埋甕１・２には下の集石の石材が当たっている。埋甕は土師質土器で，上部が壊されており器種は不明であるが，一般的に甕であると想定される。埋甕の中は土が詰まっており，土層としては大きく２層に分かれるが，埋甕２・３の底には砂質土が薄く堆積していた。出土遺物は，埋甕内の埋土中に瓦片や陶磁器片が混じっていたが，土とともに後世に流入したものと考えられる一方，埋甕２の底からは寛永通宝が２枚出土しており，これは埋甕に副葬されたものと考えられる。

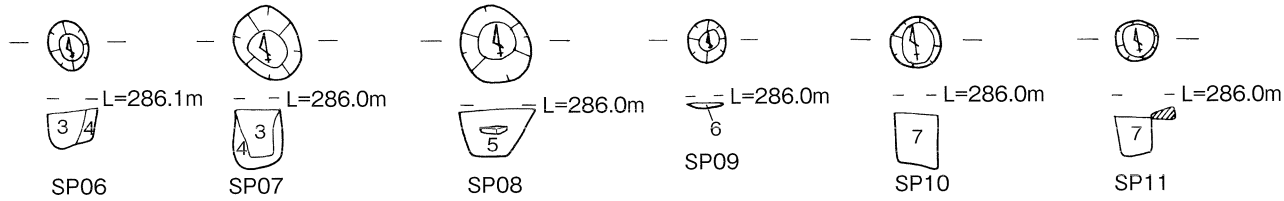
出土遺物は，第26図68～72で，68～70は埋甕２出土，71・72は埋甕３出土である。68は肥前系磁器の染付碗で，18世紀後半～19世紀前半のものである。69・70は寛永通宝である。71は肥前系青磁染付碗で18世紀後半，72は京信楽系陶器の色絵丸碗で18世紀後半～19世紀前半のものである。これら出土遺物を概観すると，18世紀後半～19世紀前半であるが混入品であることから，埋甕はこの年代以降のものである。さらに，寛永通宝を副葬していることを考慮すれば，19世紀末までに埋められたものと推測される。



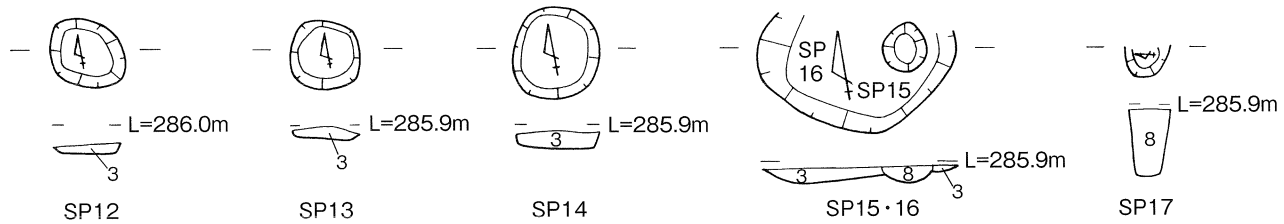
第 26 図　埋甕平面・立面・断面図（縮尺 1/40・1/20）出土遺物実測図（縮尺 1/4，69・70 は 1/2）



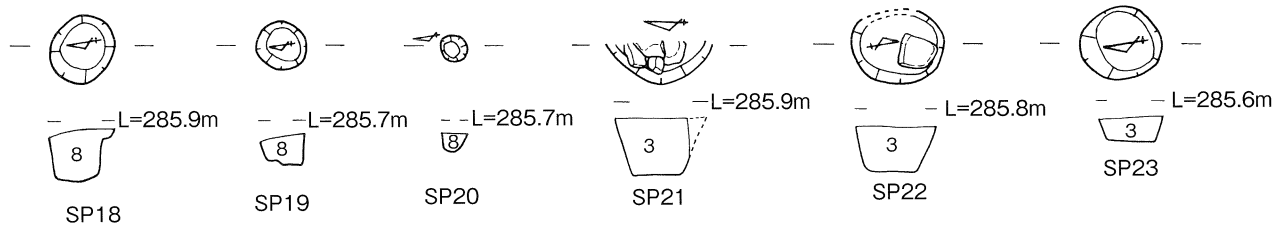
1. 黒色炭層　　2. 灰褐色土（5YR4/2）

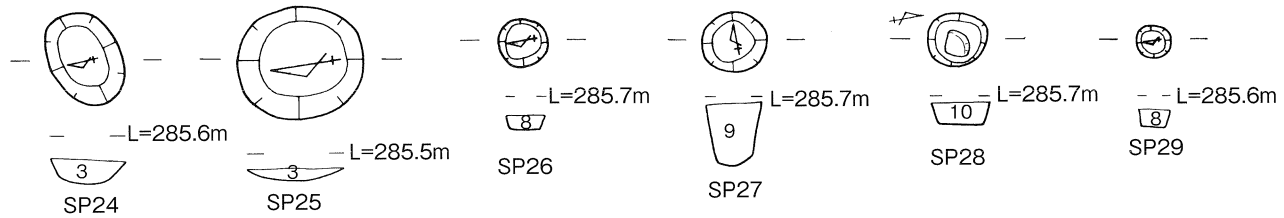


3. 灰赤色粘質土（10R5/2,粘質弱い）
4. 灰赤色粘質土（10R5/2,堅い,黄灰色ブロックを含む）
5. 黄褐土（2.5Y5/3,赤色粒を含む）
6. 赤褐色粘質土（10YR4/3）
7. にぶい黄褐色土（10YR5/3）

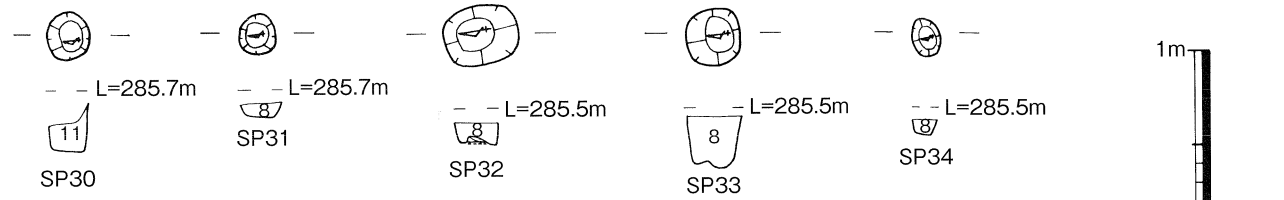


8. 灰赤色粘質土（10R5/2）

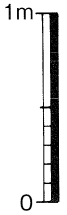




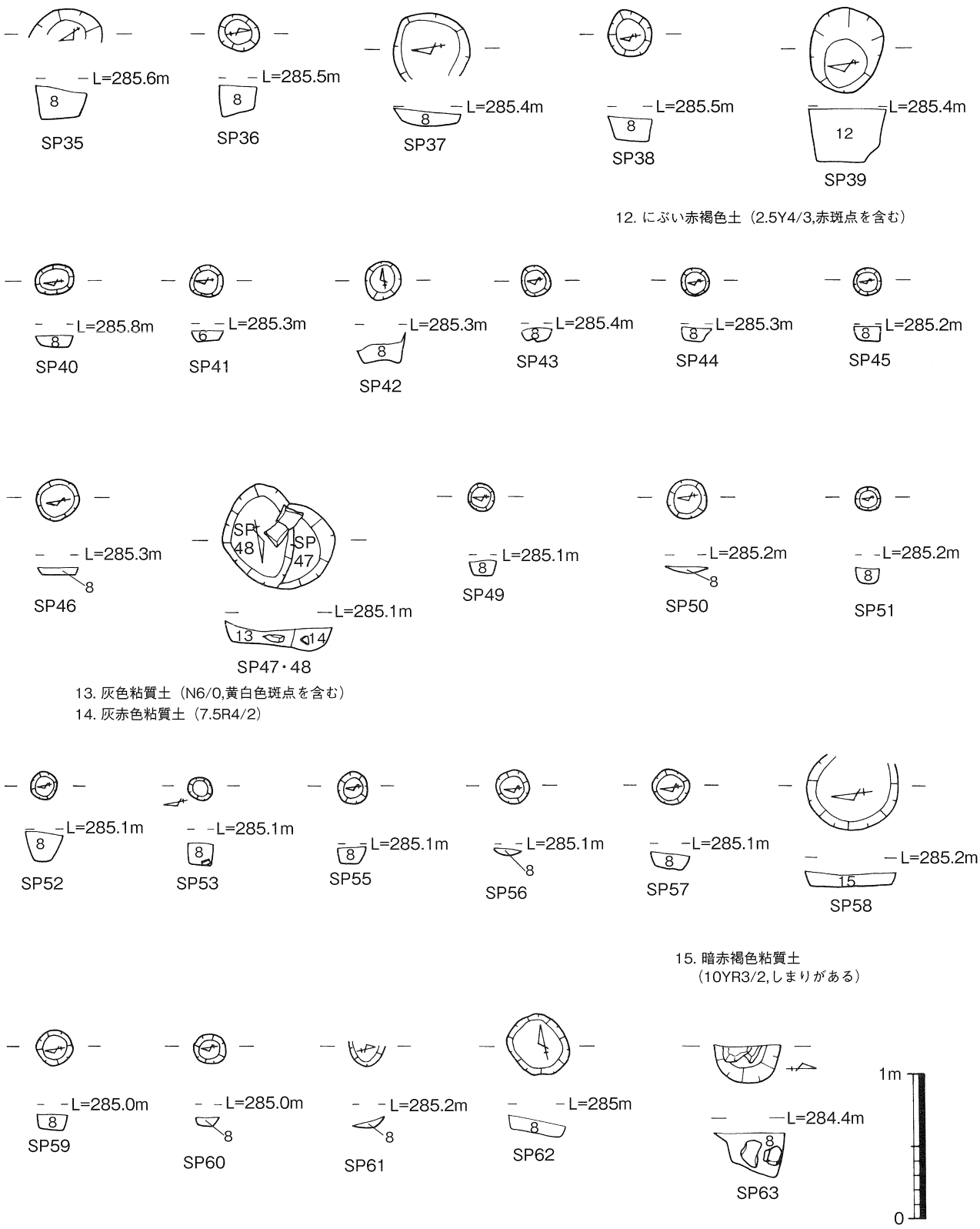
9. 黄灰色粘質土（2.5Y6/1,黄斑点を含む）
10. 黄褐色土（2.5Y5/3）



11. 明緑灰色粘質土（7.5GY7/1,第8層の変色か）



第 27 図　柱穴平面・断面図①（縮尺 1/40）



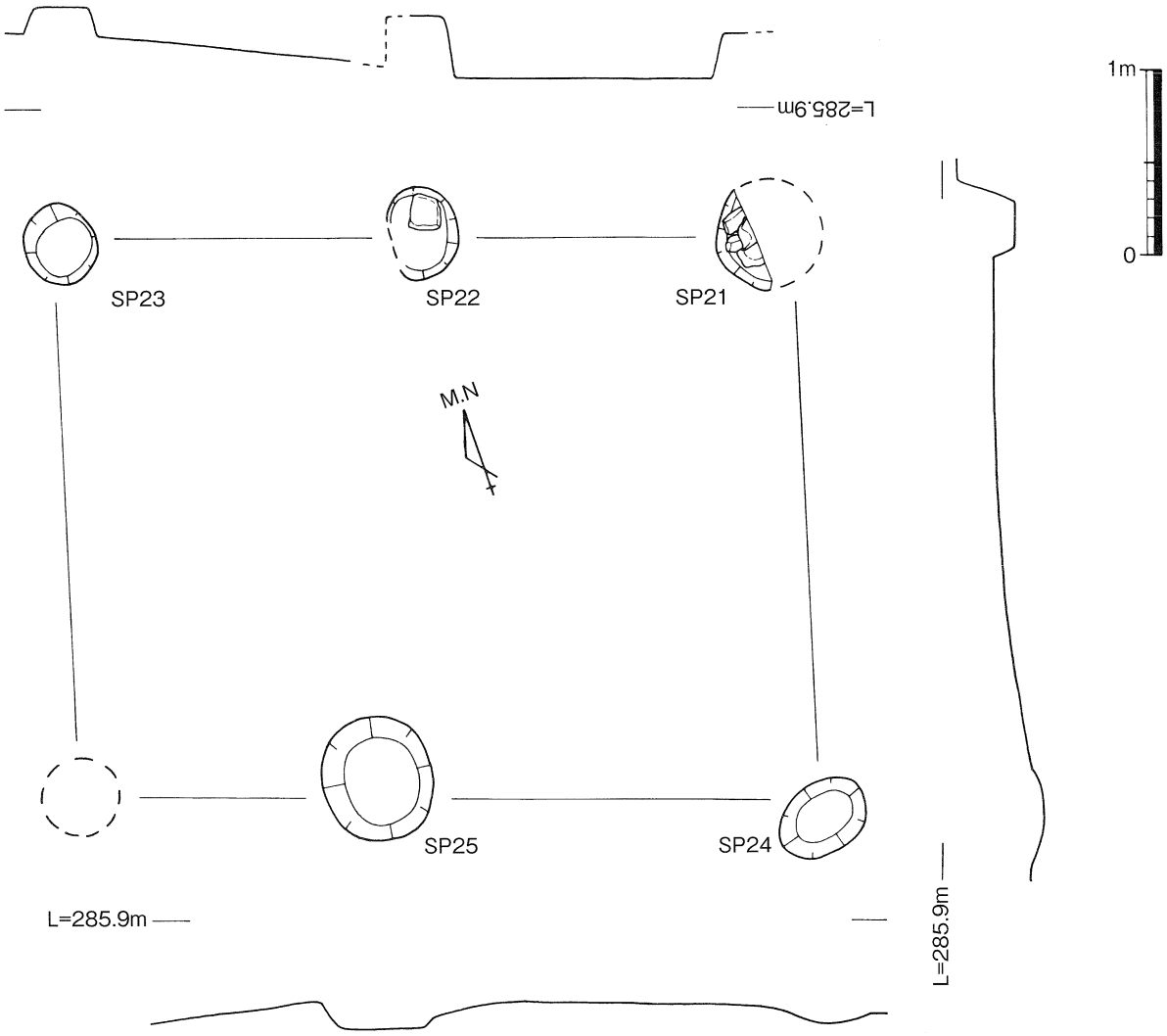
第 28 図　柱穴平面・断面図②（縮尺 1/40）

柱穴・掘立柱建物跡（第６・７・27～31図）

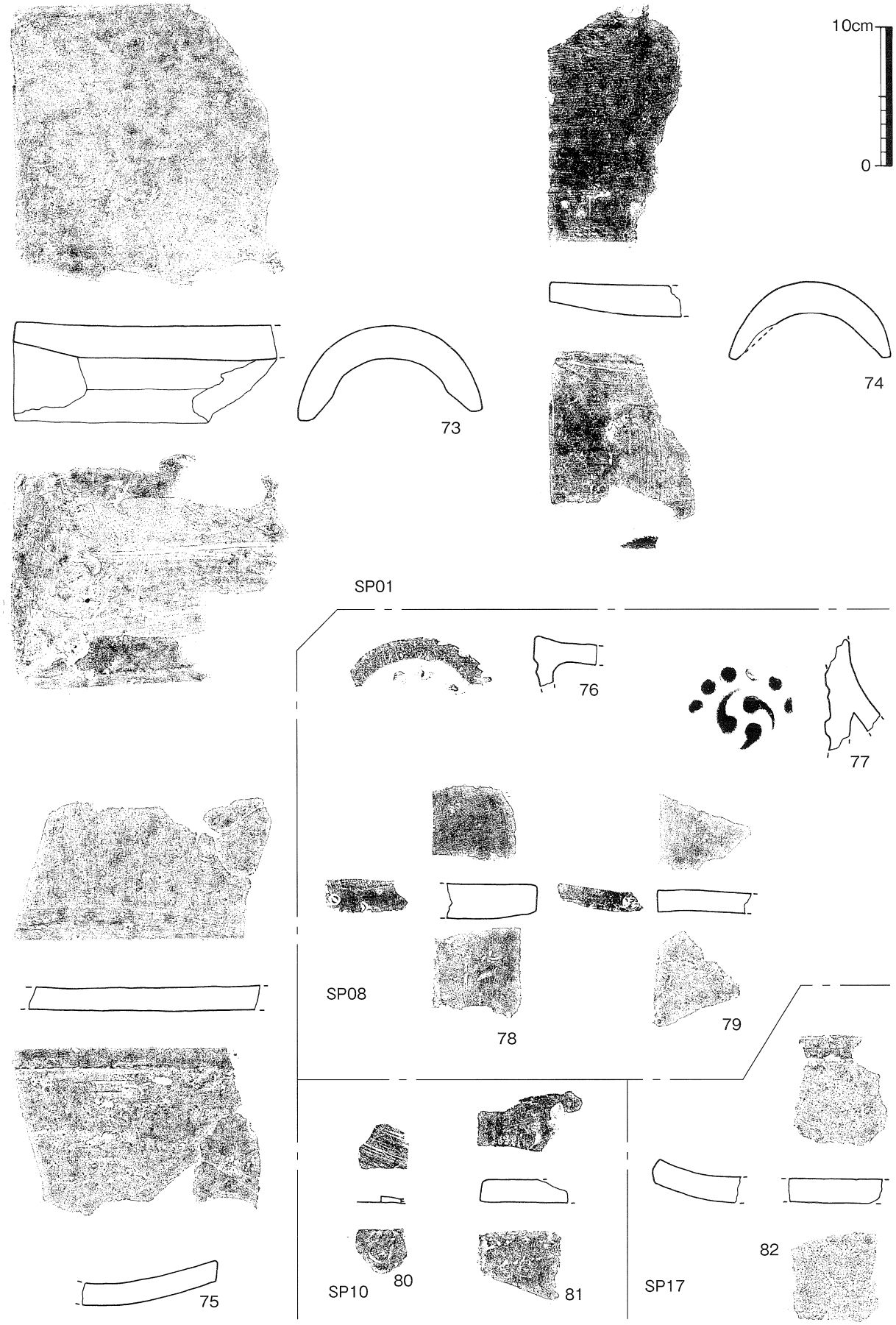
調査区全域において，柱穴62基（SP01～63，SP54は消去）を確認した。特に調査区北側の南東部分と調査区南側の東半分において，まとまって検出している。これは調査区より西は傾斜が強くなる地形によるものと考えられる。調査区北側では表土を除去した地山上面で検出したものが多いが，SP02～SP05は第11層を除去した地山上面で検出している。調査区南側の北東部分では表土または第２層を除去した地山上面で検出したが，北東部分以外では第４層や第７層を除去した地山上面で検出したものが多い。ただし，SP39・58は第７層より上位にある。

平面は不整なものを含めて円形ばかりで，直径約15cmのものから約70cmを測るものまである。直径20cm前後のものが最も多く，他は直径40～50cmのもの，60～70cmのものが見られる。SP16のみ直径約１ｍを測り，これは土坑に分類した方が適当かもしれない。断面は逆台形のものが多数を占めるが，底は平底以外に丸みを帯びたものや凹凸があるものも見られる。埋土は，全部で15種類に分けられる。

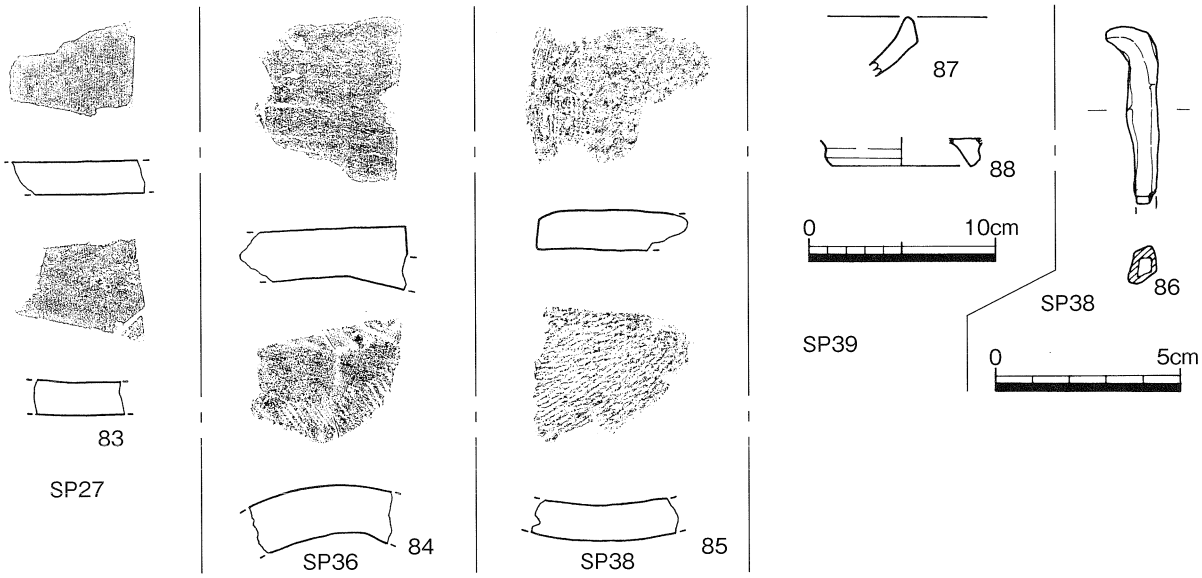
柱穴から掘立柱建物跡が復元可能なものは，SP21～25の１棟のみ（SB01）である。SB01は，南調査区の北東部分に位置し，２間×１間の東西方向の建物跡である。SP21～25の柱穴５基で構成されるが，南西隅の柱穴はSK02により消失したものと考えられる。桁にあたる北側柱穴の芯々間距離は約２ｍだが，南側柱穴の場合は約2.4ｍで広い。梁にあたる柱穴の芯々間距離は約３ｍを測る。床面は東に向かって緩く傾いている。ただし，本例も柱穴間の距離が一定でなく，床面が斜めであることを考慮すると，掘立柱建物跡を構成しないかもしれない。



第29図　ＳＢ０１平面・断面図（縮尺1/40）



第30図　SP01・08・10・17出土遺物実測図（縮尺1/4）



第 31 図　SP27・36・38・39 出土遺物実測図（縮尺 1/4，86 は 1/2）

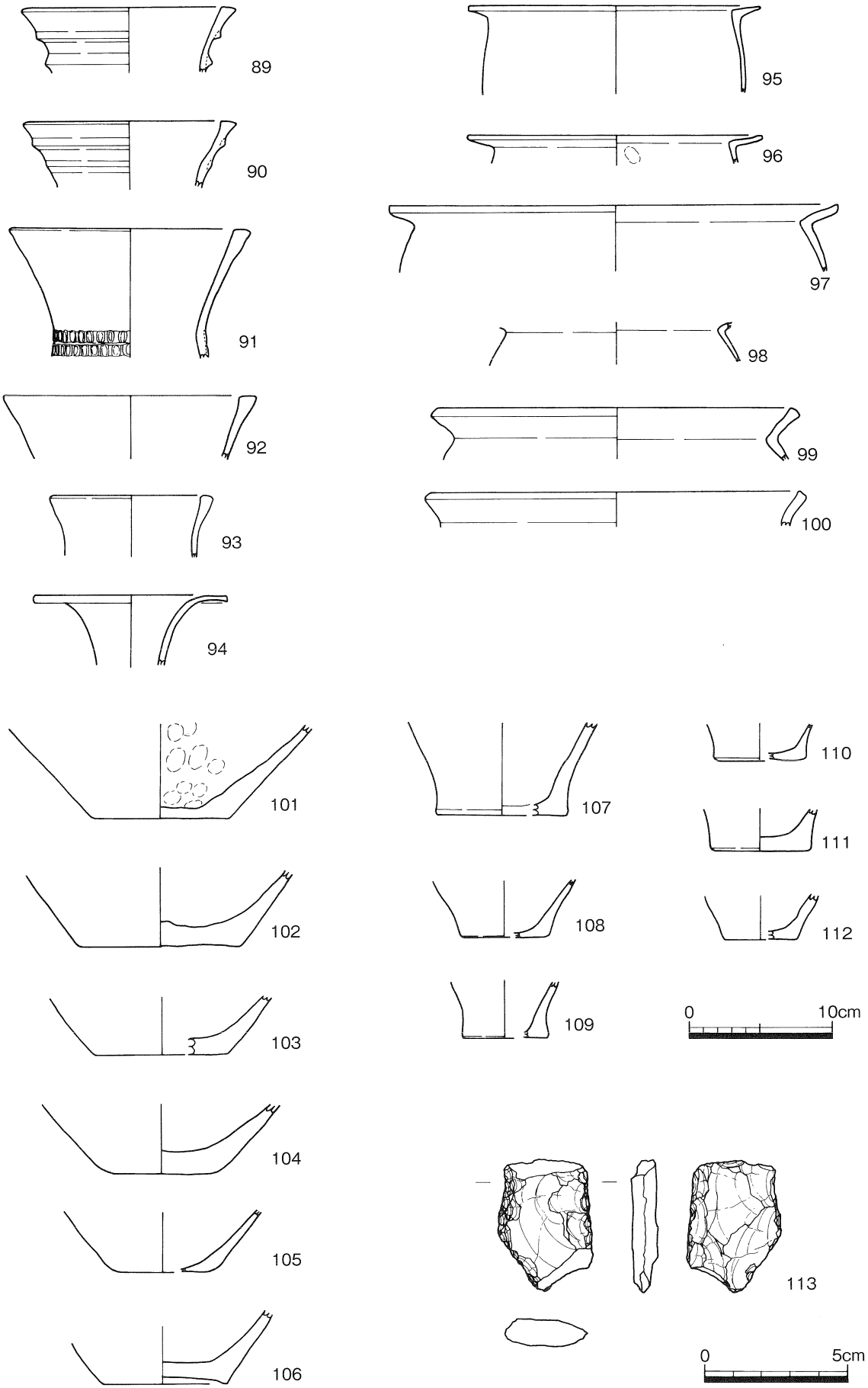
出土遺物は第 30・31 図 73 ～ 88 である。73 ～ 75 は SP01 出土のいぶし瓦で，73・74 は丸瓦で凹面に布目が残り，75 は平瓦であり，どれも江戸時代のものと考えられる。76 ～ 79 は SP08 出土のいぶし瓦で，76 は軒丸瓦，77 は三巴文軒丸瓦で，復元珠文数は 12 個前後で珠文も大きく，ともに表面にキラコが認められる。78・79 は平瓦で，端面に刻印が押されており，78 は○に－が，79 は○に判読不能な文字が見られる。76・77 ともにキラコを使用している特徴などから，SP08 出土瓦は江戸時代でも新しいものと考えられる。80・81 は SP10 出土のもので，80 は土師質土器杯，81 はいぶし瓦の平瓦で，81 の存在から SP10 は江戸時代のものと考えられる。82 は SP17 から出土した須恵質の丸瓦で，中世のものと考えられる。83 は SP27 から出土したいぶし瓦の平瓦で，江戸時代のものと考えられる。84 は SP36 から出土した須恵質の丸瓦で，古代から中世のものと考えられる。85 は SP38 から出土した須恵質の平瓦で，古代から中世のものと考えられる。86 は SP38 出土の鉄釘である。87・88 は SP39 出土のもので，87 は土師質土器鍋，88 は同椀である。これら遺物は中世のものであるが，SP39 が江戸時代の SK03 を切っていることから，SP39 は江戸時代以降のものと考えられる。

以上のように柱穴の概要を報告してきたが，層位が分かるもの，埋土の相違，出土遺物の年代等から，柱穴の年代を相対的に検討したい。層位が把握できているものは，SP02 ～ 05 が第 11 層より下にあり中世以前であり，SP39 ・58 は第７層より上にあり江戸時代以降である。出土遺物からは，SP01・08・10・27・39 が江戸時代以降のものである。この結果を埋土と合わせると，埋土番号1・5・7・9・12・15 のものが江戸時代以降のもので，主に黄色系のものが大半を占める。一方，埋土番号２の灰褐色や３・4・８の灰赤色系のものは，古代から中世に属する可能性がある。一概には断定できないが，可能性は高いと考えられる。

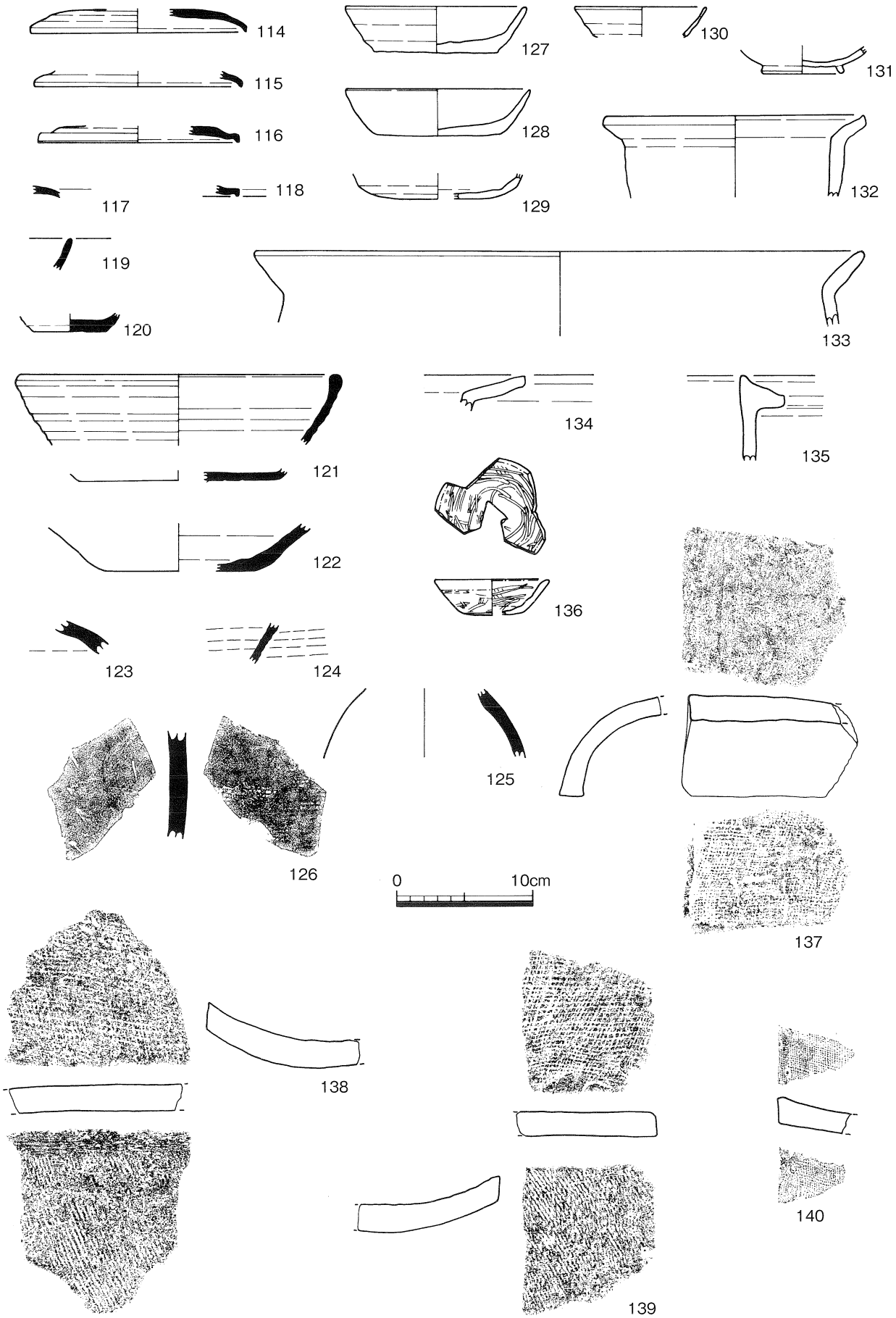
弥生土器包含層（第 12 層）（第８図壁面②・32 図）

北調査区中央部西半において部分的に確認した遺物包含層である。布目瓦包含層（第 11 層）と地山の間に挟まれた厚さ約 10cmの赤褐色粘質土である。出土遺物は，弥生土器と石器のみで時期的に限定されるが，どの破片も摩滅を受けていることから，斜面上から流れてきたものが２次堆積したと考えられる。

89 ～ 94 は弥生土器広口壺の口頸部で，89 ～ 93 は外反する口縁部の端部を肥厚させるもので，94 は口縁部がラッパ状に開く。89・90 は口縁部外面に断面三角形の貼付凸帯を２条めぐらし，91 の頸部には貼付押圧文が２条見られる。95 ～ 100 は弥生土器甕の口頸部で，頸部を「く」の字形に屈曲させる。95 ～ 97 のように口縁端部を肥厚させないものと，99・100 のように肥厚させるものとが見られる。101 ～ 112 は弥生土器底部である。113 はサヌカイト製の打製石槍で，両側辺には敲打による背潰しが認められる。弥生土器の時期は，壺口頸部の特徴から弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式）のものと考えられる。



第 32 図　弥生土器包含層 (第 12 層) 出土遺物実測図（縮尺 1/4, 113 は 1/2）



第 33 図　布目瓦包含層 (第 11 層) 出土遺物実測図（縮尺 1/4）

布目瓦包含層（第11層）（第8図壁面①～④・9図壁面⑫・33図）

北調査区のほぼ全域で確認した遺物包含層で，一部は南調査区の北西部まで広がる。いぶし瓦包含層(第6層）と地山の間に挟まれた厚さ約20cmを測る暗赤褐色粘質土で，一部において弥生土器包含層（第12層）がさらに下にある。出土遺物は，須恵器や土師器などとともに須恵質または土師質の瓦が出土している。調査時に布目瓦しか存在しなかったことから，布目瓦包含層の呼称を用いた。

114～126は須恵器である。114～118は杯蓋で，口縁端部を強弱の違いはあるが屈曲させており，頂部の摘みについては欠損しており不明である。9世紀前半頃のものと考えられる。119・120は杯で，119は口縁部，120は底部の破片である。121・122は須恵器こね鉢である。121は玉縁状になる口縁部と回転ヘラ切の底部をもち，口縁部の形態からは丹波篠窯産と想定されるが，底部は篠窯産の糸切と明らかに違う。口縁部と底部が別個体の可能性も考慮したが，焼成・態度とも酷似しており，本報告では同一個体としておく。篠窯の編年(石井1995)を援用すると，退化した口縁部から10世紀末～11世紀第1四半期のものと考えられる。123～126は須恵器壺の肩部および体部の破片である。

127～135は土師器または土師質土器である。127～130は杯で，127・128は形態等から13世紀中葉頃のものである。131は椀の底部で，いわゆる吉備系といわれるものである。132は甕で，体部は膨らまないで，口縁端部を上に摘み上げる。133も甕で，頸部がくの字形に折れる。134は鍋の口縁部，135は羽釜の口縁部である。

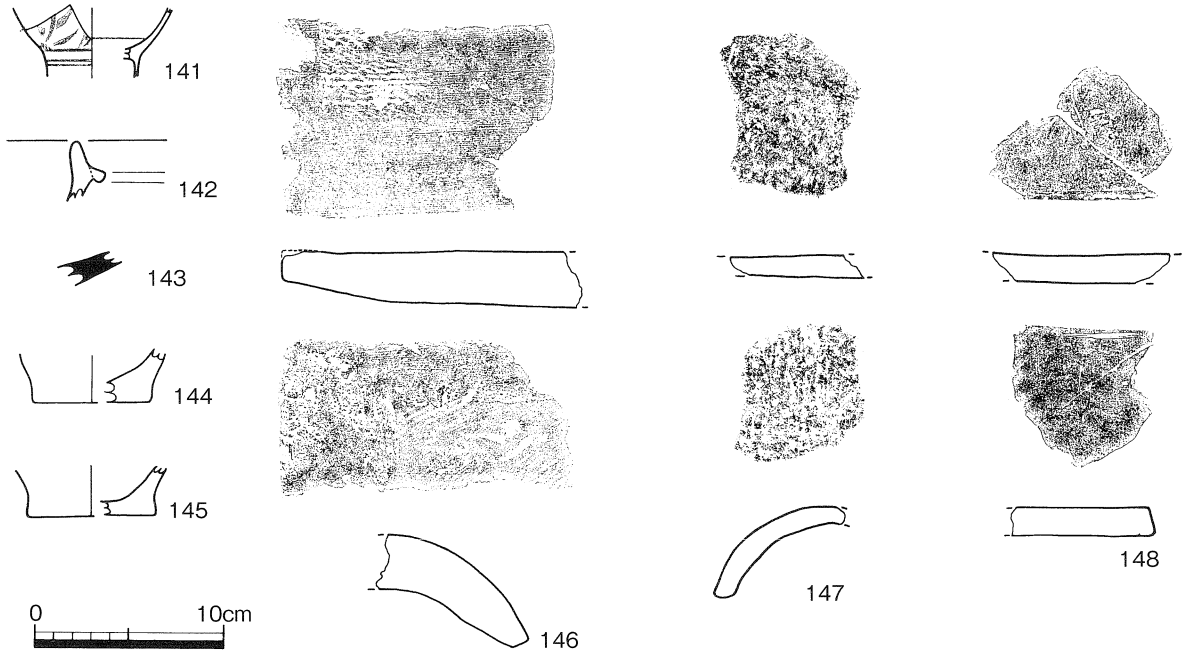
136は瓦器の小杯で，内面には箆状工具による暗文が施されている。形態等から，11世紀後半から12世紀前半と考えられる。137は土師質の丸瓦で，凹面に布目が残る。138～140は平瓦である。138・139が土師質で，凹面に布目，凸面に叩き痕が残る。140は須恵質で，凹凸両面に布目が見られる。

布目瓦包含層の年代については，もっとも新しいもので13世紀中頃の遺物を含むことから，13世紀頃と考えられる。また，この包含層上面に16世紀末～17世紀前半の溝状落ち込み（段）があることから，下っても16世紀までである。

いぶし瓦包含層（第6層）（第8図壁面①～③・9図壁面⑫・34図）

北調査区の西半分で確認した遺物包含層で，一部は南調査区の北西部まで広がる。表土（第1層）または近現代の整地層（第2層）と布目瓦包含層（第6層）の間に挟まれた厚さ約20cmを測る明褐色粘質土である。出土遺物は，弥生土器や須恵器そして須恵質または土師質の瓦に混じって，陶磁器やいぶし瓦が出土している。このため，調査時において，いぶし瓦包含層の呼称を用いた。

141は肥前系磁器の染付広東碗で，18世紀末～19世紀前半のものである。142は土師質土器羽釜の口縁部である。143は須恵器高杯の杯部である。144・145は弥生土器の底部である。146は須恵質の丸瓦，



第34図　いぶし瓦包含層（第6層）出土遺物実測図（縮尺1/4）

147は土師質の丸瓦で，ともに凹面に布目が残る。148はいぶし瓦の平瓦である。いぶし瓦包含層の年代が推測できる遺物は141の1点のみで，これより18世紀末から19世紀前半の年代が推測できるが断定はできない。

集石（第7層下部）（第35～38図）

調査区南側の南半分全域で検出したが，東側の一部では認められない箇所もあった。直径5～80cmの安山岩を不規則に配置しており，一部数段に積んでいる部分も見られるが，乱雑に置かれている。集石は，これを覆っている赤褐色土（第7層）の下部にあたり，赤褐色土（第7層）と集石とは同一の整地層である。旧地形が斜面であることを考慮すると，境内を整地および拡幅する際に捨石として置かれたものと推測される。土師質土器や須恵器，土師質・須恵質の瓦に混じって，陶器やいぶし瓦が出土している。

149はサヌカイト製石鏃で，凹基式である。150は土師質土器杯で，法量から13世紀末～14世紀初頭の時期と考えられる。151は土師質土器椀で，足高の高台が付いている。152は瓦器小杯で，形態等から11世紀後半～12世紀前半の時期が考えられる。153～155は須恵器で，153は杯，154は壺，155は甕の破片である。156は龍泉窯系青磁碗で，外面に鎬蓮弁が見られる。157は肥前系京焼風陶器碗で，外面に山水が描かれており，露胎の底面には刻印が認められる。17世紀末～18世紀前半のものである。158は備前焼陶器甕の破片である。

159は蓮華文軒丸瓦で，摩滅が著しく文様が判別しにくいが，ハート形に退化した蓮弁を4弁盛り上げて表している。同じく盛り上げて表現されている中房の周囲には，二重の圏線に挟まれて珠文が20個（現存18個）巡っている。周縁も凸形に盛り上がっており，その内側に一重の圏線が巡っている。なお，瓦当面には製作時に付けられた縄叩き痕が残されている。12世紀後半頃のものと推測される。160は唐草文軒平瓦で，内区の唐草文は中心飾りが判然としないが，唐草が交互に反転しながら延びている。外区には珠文が上下区および脇区にも配されているが，その間隔は約3.5cmと広い。なお，外区と内区を分ける圏線が，四角形を形成するだけでなく，突き出て周縁にまで延びている。凹面は粗い布目が残り，瓦当端を削り取っている。凸面では，縄目叩き痕が曲線顎を超えて瓦当端まで及んでいる。10～11世紀頃のものと推測される。161も軒平瓦であるが，瓦当面が剥離して文様は不明である。凹面に布目，凸面に縄叩き痕が残っている。

162～172は丸瓦の破片で，162・165・166・169・170が須恵質，163・164・167・168・171は土師質の焼成で，172のみがいぶし瓦である。ただし，172のいぶしは凹面のみに濃く見られ，不完全である。これら丸瓦の凹面にはすべて布目が残り，凸面は板ナデが施されている場合が多いが，162の凸面のみ縄叩き痕が残っている。瓦の厚さは，土師質のものが薄手で，須恵質は厚手と薄手があり，いぶし瓦は厚手である。173～184は平瓦の破片で，173～175・177～179・182・184は須恵質，176・180・181は土師質の焼成で，183のみがいぶし瓦である。ただし，183のいぶしは凸面のみに見られ，不完全である。これら平瓦の凹面にはほぼすべてに布目が残るが，凸面は173～179が縄叩き痕，180は格子目叩き痕が残り，181～183はナデが施されている。184のみが凸面にも布目が見られる。

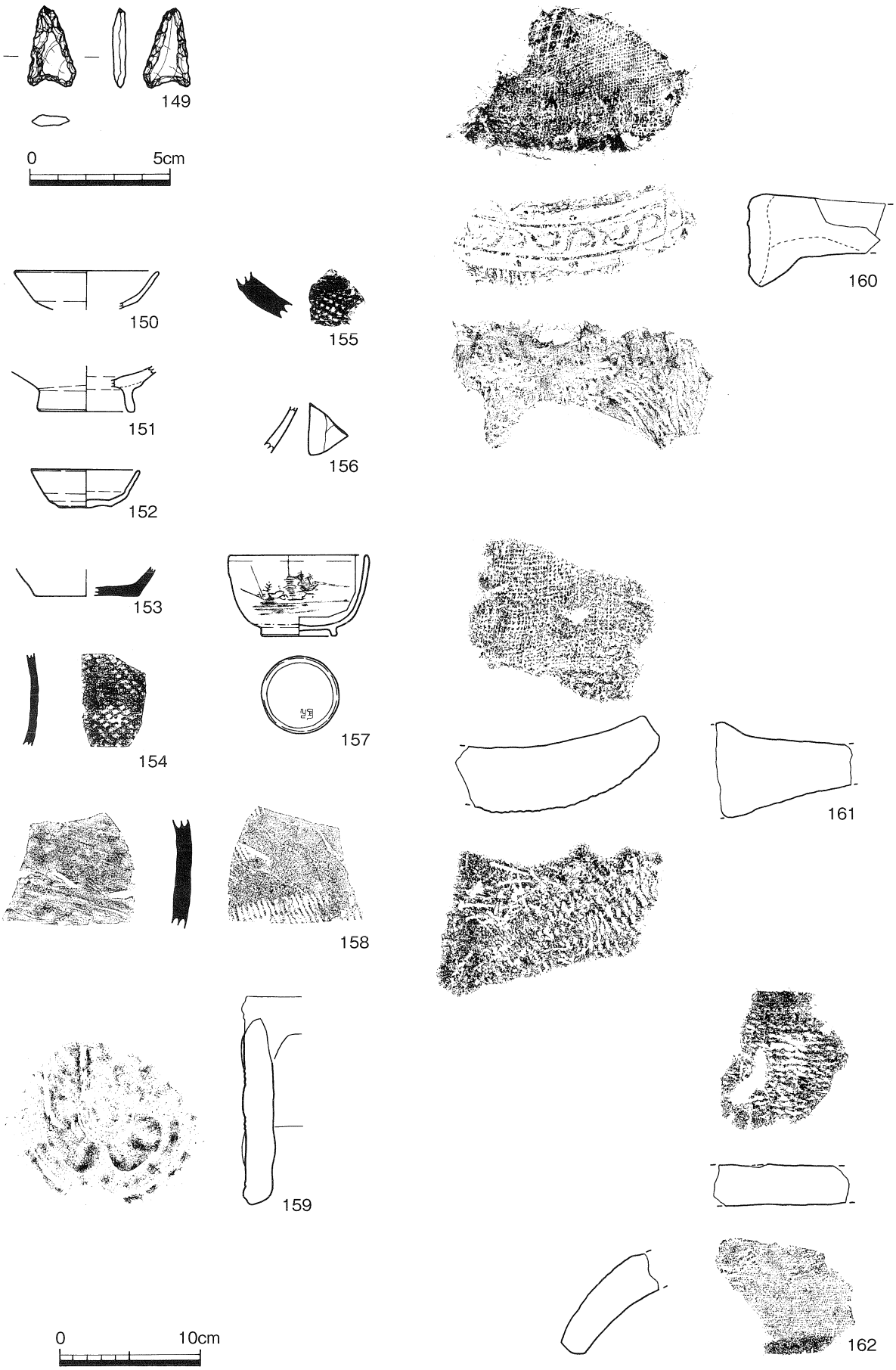
以上の出土遺物のうち，もっとも年代が新しいのは157の肥前系京焼風陶器で17世紀末～18世紀前半のものであり，他にいぶし瓦が出土しており江戸時代のものである。肥前系京焼風陶器については，石と石の間で地山近くから出土しており，集石の年代に近いものと想定される。このことから，集石は17世紀末～18世紀前半のものと考えられる。

集石覆土（第7層上部）（第8図壁面⑧・9図壁面⑨～⑫・39～41図）

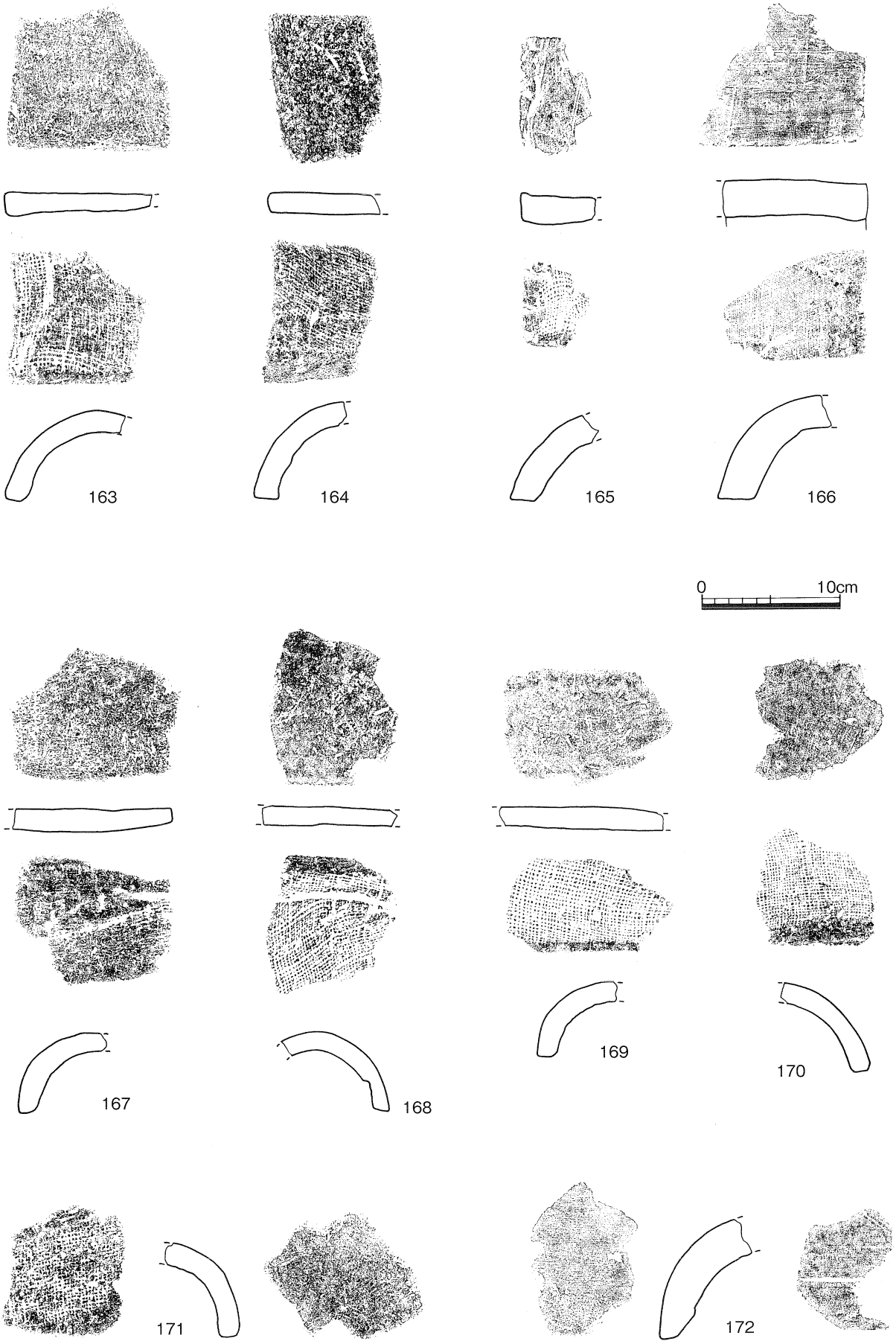
第7層は，南調査区のほぼ全域で確認した遺物包含層である。整地層（第2～5層）と地山（第19層）の間に挟まれた厚さ約50～80cmを測る赤褐色土である。下部に捨石としての集石がある整地層である。集石同様に第7層上部からも遺物が出土しており，調査時において遺物を第7層上部と下部に分けて取上げた。出土遺物は，須恵器や土師質土器，土師質・須恵質の瓦に混じって，磁器やいぶし瓦が見られるが，調査時の状況から上面から切り込む遺構の遺物が混じっている可能性もある。

185～187は須恵器で，185は椀，186は杯である。187は甕で，格子目の叩き痕の特徴等から亀山焼と考えられる。188～190は土師質土器杯の破片である。191・192は瓦器椀の破片で，192の底部に付く高台は断面逆台形であるが縮小しており，12世紀のものと考えられる。193・194は肥前磁器染付小皿と徳利で，18世紀のものと考えられる。

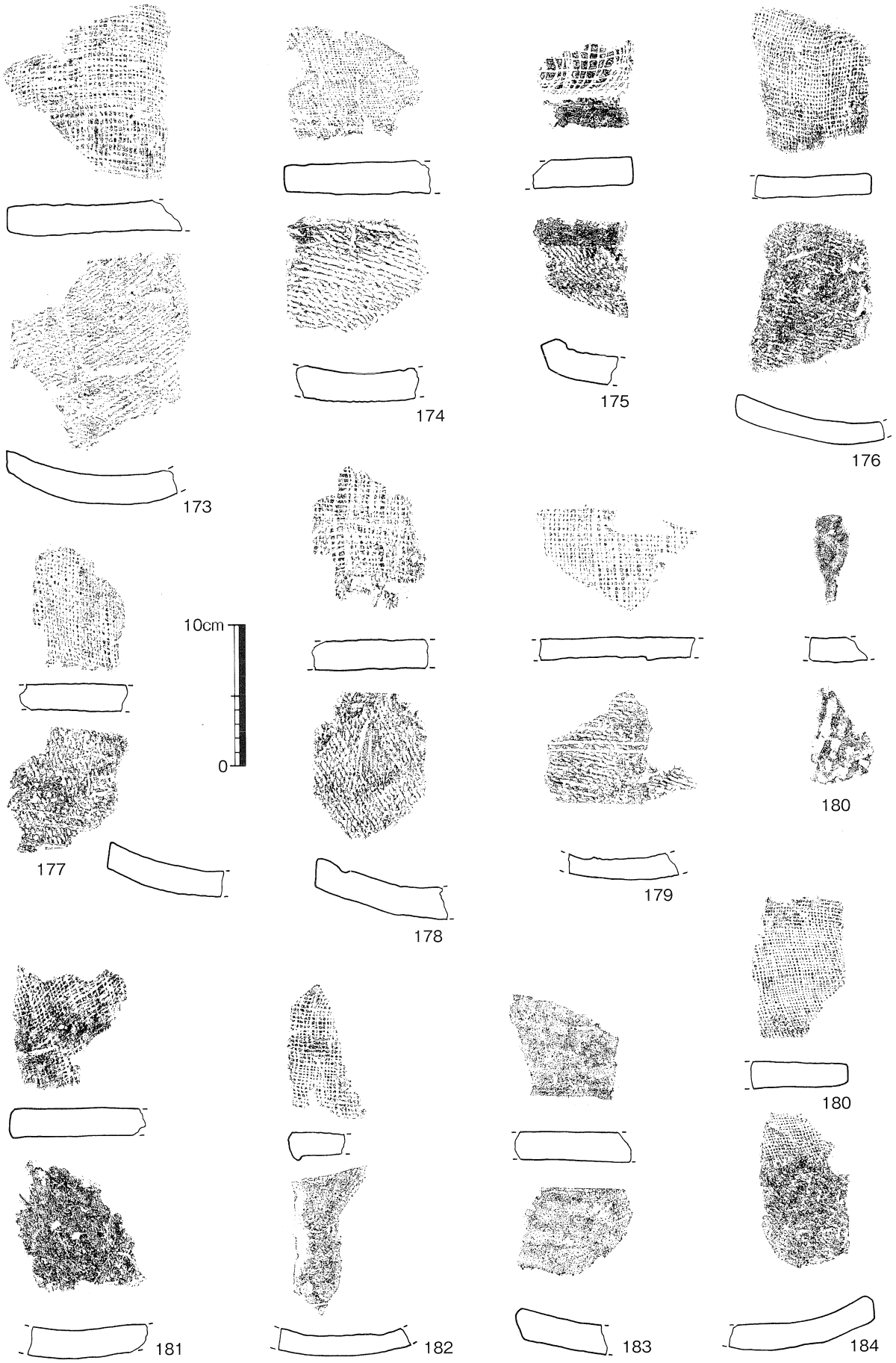
第 35 図　集石平面図（縮尺 1/60）



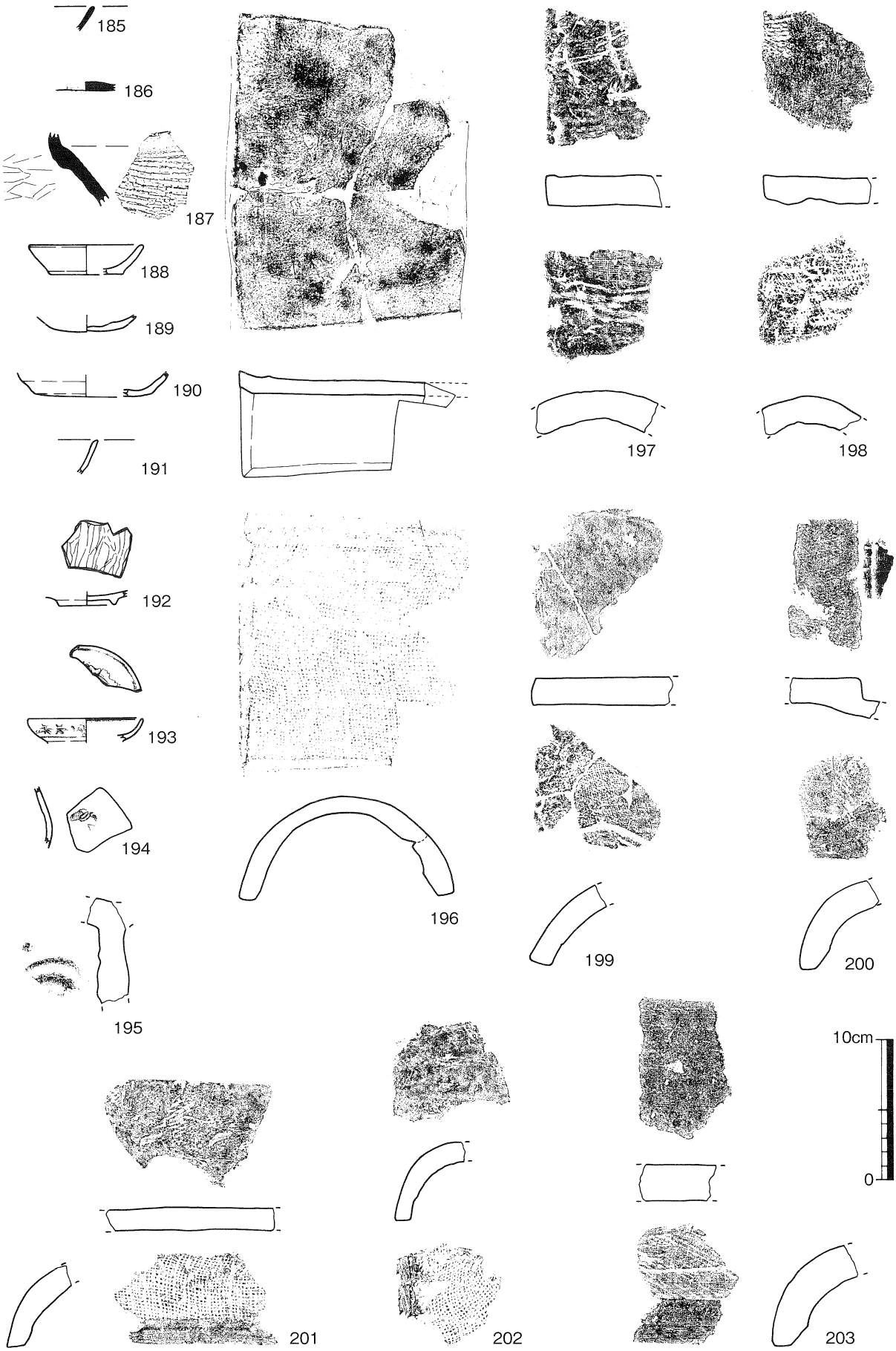
第36図　集石（第7層下部）出土遺物実測図①（縮尺 1/4，149 は 1/2）



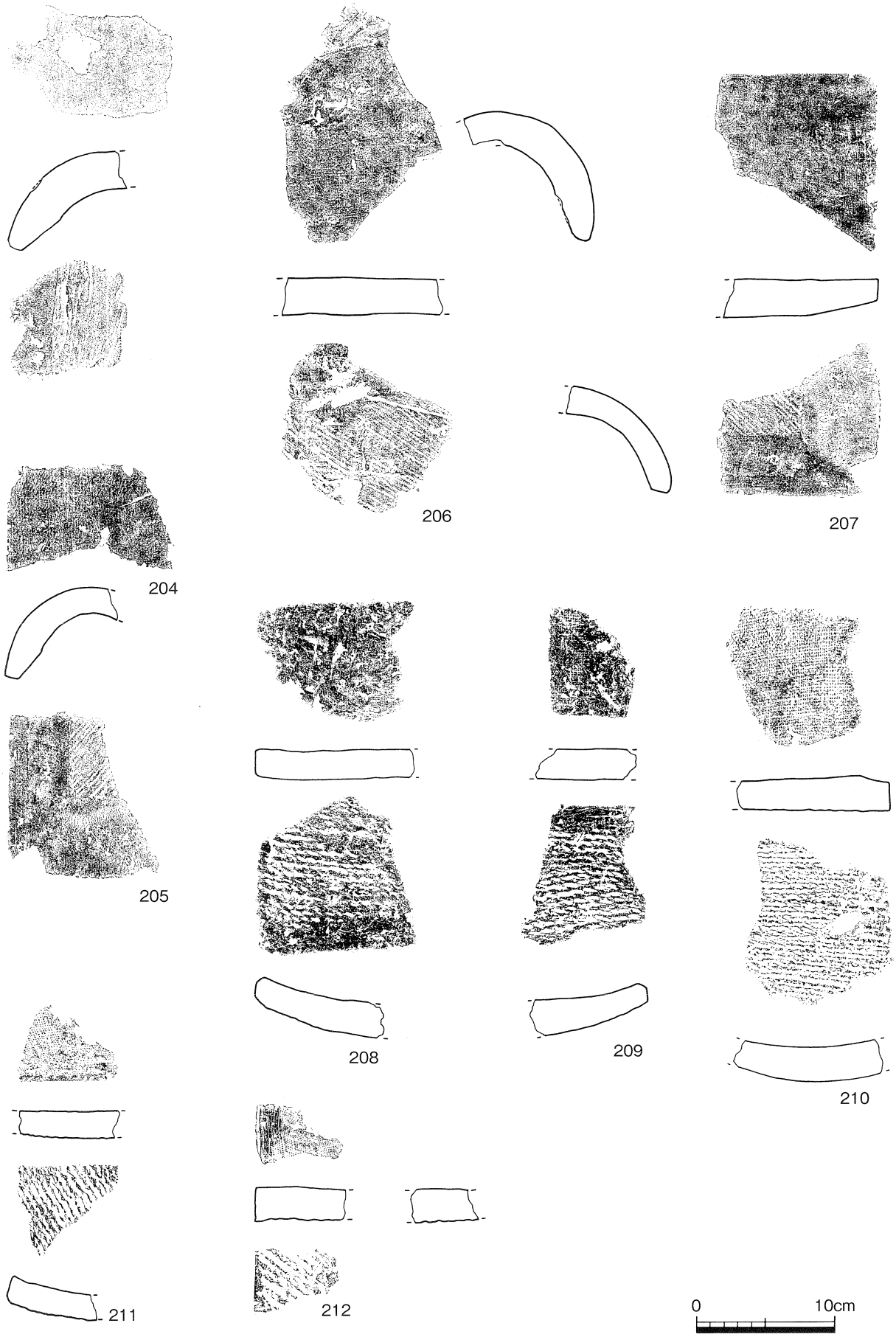
第 37 図　集石（第７層下部）出土遺物実測図②（縮尺 1/4）



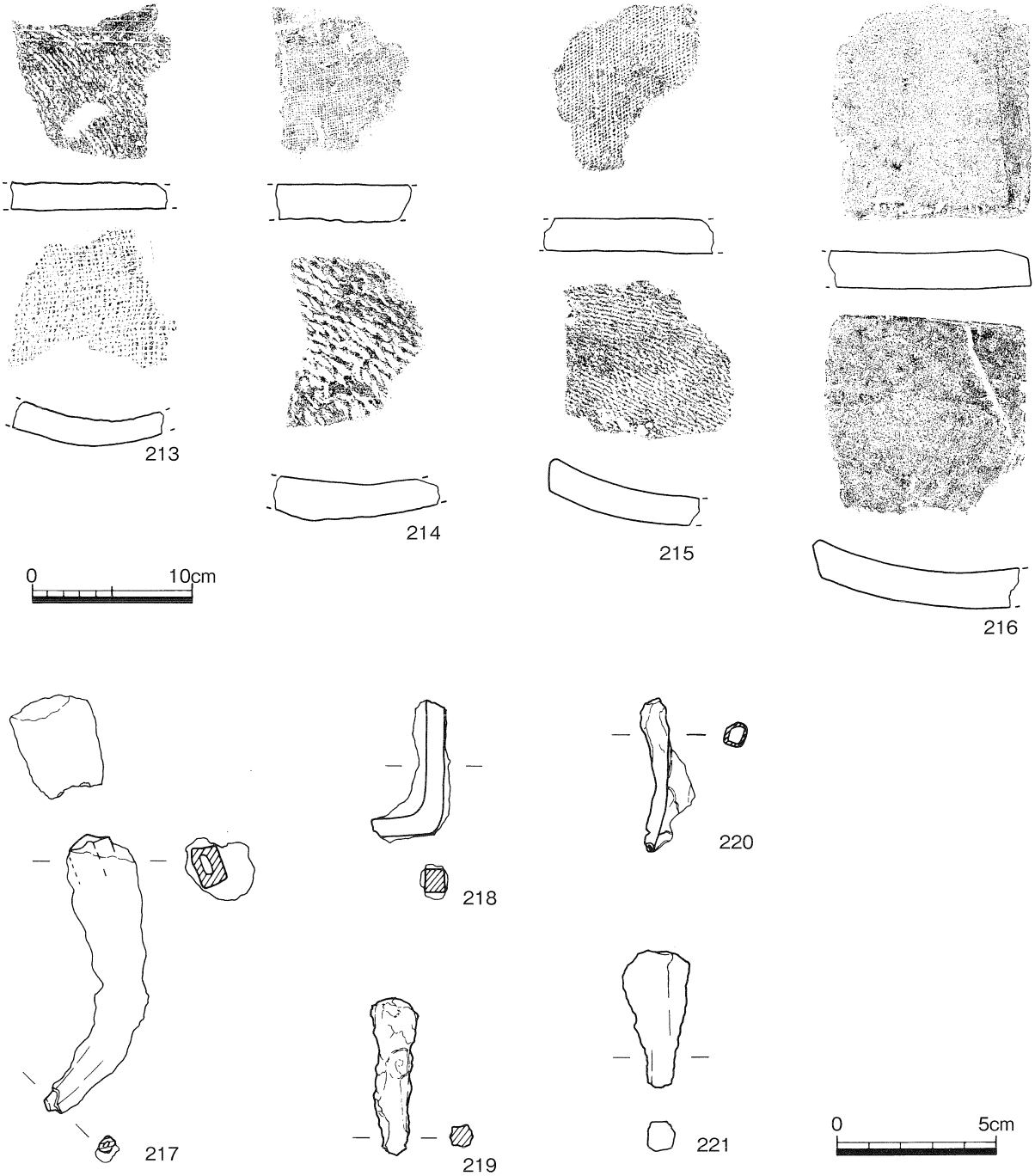
第38図　集石（第7層下部）出土遺物実測図③（縮尺1/4）



第 39 図　集石覆土（第７層上部）出土遺物実測図①（縮尺 1/4）



第40図　集石覆土（第７層上部）出土遺物実測図②（縮尺 1/4）



第41図　集石覆土（第7層上部）出土遺物実測図③（縮尺 1/4，217～221 は 1/2）

195は三巴文軒丸瓦で，復元瓦当径は15cm前後と小振りで，須恵質の焼成である。内区と外区を分ける圏線はなく，室町時代のものと推測される。196～207は丸瓦の破片で，196･201～203が須恵質，197～200･204は土師質の焼成で，205～207がいぶし瓦である。200･204は2次焼成を受けている。また，いぶし瓦のいぶしは不完全で全面には及んでいない。これら丸瓦の凹面にはすべて布目が残り，凸面は縄叩き痕または板ナデが認められる。208～216は平瓦の破片で，208・209は土師質，210～215は須恵質の焼成で，216のみがいぶし瓦である。いぶし瓦のいぶしは不完全である。これら平瓦は，いぶし瓦以外は凹面に布目，凸面に縄叩き痕が残る。217～221は鉄釘である。

以上の出土遺物のうち，もっとも年代が新しいのは193の肥前磁器染付小皿で，18世紀のものである。第7層下部の年代観より若干新しいが，混入の可能性も考慮に入れると，第7層下部と同じ17世紀末～18世紀前半と考えられる。

表土（第１層）（第８図壁面①～⑧・９図壁面⑨～⑫・42図）

表土（第１層）は，調査区全域で確認した土層であり，現代に近い整地または堆積層である。そのため，調査時においては重機で掘削した。出土遺物のうち，図化できたものを第42図に掲載した。

222～229は肥前系磁器で，222～226は染付碗，227は青磁染付碗，228・229は陶胎染付である。230・231は瀬戸美濃系陶器で，230は鉄釉灰釉掛分碗，231は呉須絵碗である。232・233は産地不明の陶器で，232は鉄絵陶器碗，233は鉢である。234は備前焼陶器皿である。235は須恵器壺の底部付近と考えられる。236は土師質土器羽釜である。

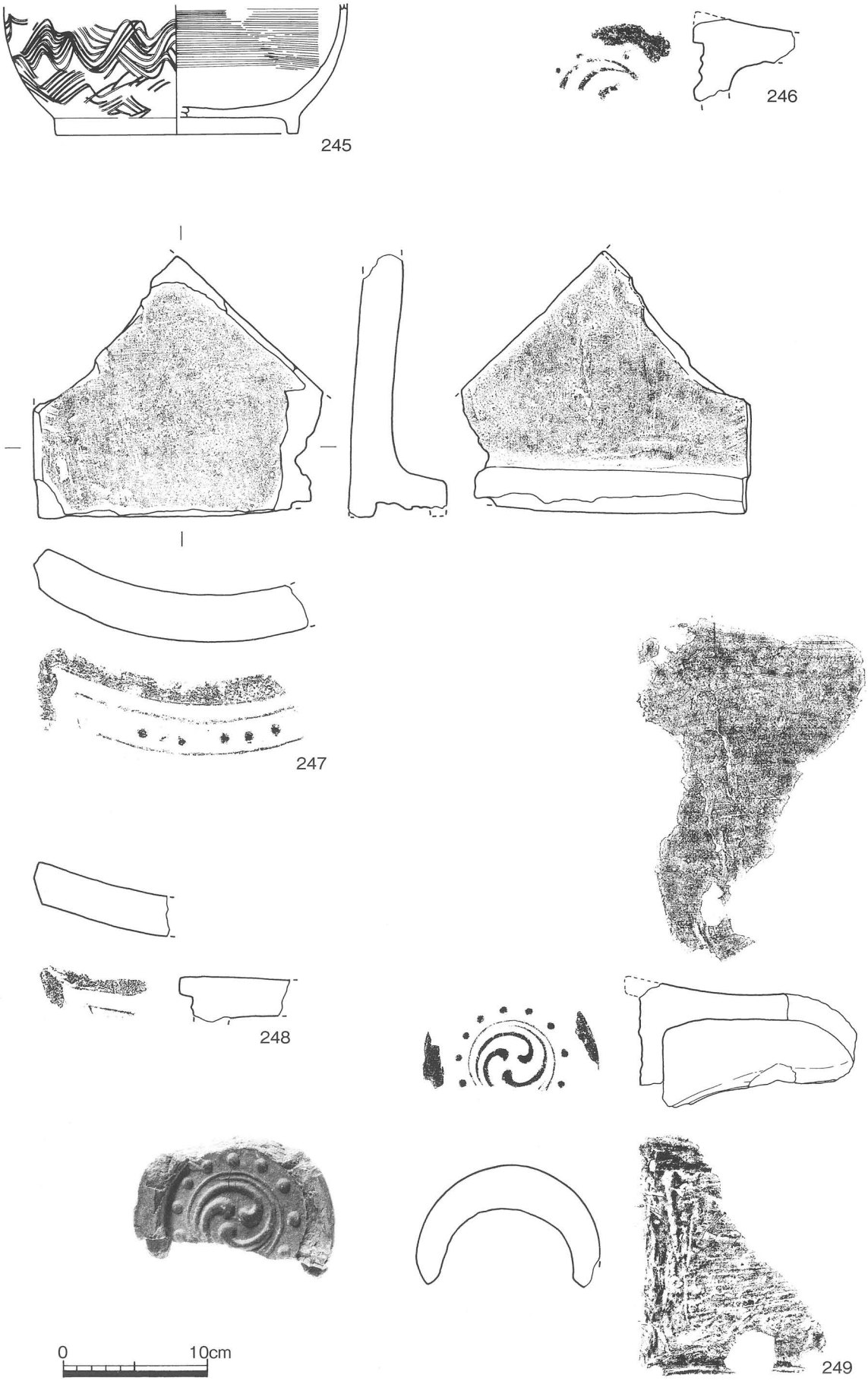
237は三巴文鳥衾瓦で，瓦当径は16.5cmと大振りで，巴文の尾は長いが圏線とはならず，珠文は18個前後に復元できる。佐藤編年の第６面・新（様相２・３）に相当し，1620年代～1650年代のものと推測される。238・239は梵字文軒丸瓦で，同笵品である。梵字「キリーク」を中心に，大振りの珠文が12個巡っており，幅広の周縁をもつ。焼成は須恵質であり，239は２次焼成を受けている。中世のものと想定されるが，細かい時期は不明である。240は三巴文軒丸瓦で，巴文は頭部が接するものの尾は短く，外区に珠文が復元で16～20個巡っている。周縁は幅広で，焼成は土師質である。中世のものと想定される。241も三巴文軒丸瓦で，やや長めの尾をもつ巴文に，復元で16個前後の珠文が巡っている。佐藤編年の第６面・新（様相２・３）に相当し，1620年代～1650年代のものと推測される。242は波状文軒平瓦で，波状文は断面方形の凸線で明確に表現されおり，脇区幅は３cmと広い。文様の重なる部分は僅かであるが，文様表出や法量，瓦当の形態や接合方法が同じであることから，49の波状文軒平瓦と同笵品である。ただし，49と違う点は，49にはなかった笵傷（拓本中央の左下）ができており，瓦当上縁の面取りを省略していることである。いぶしが瓦当面まで回っておらず，焼成は須恵質である。49と同じ15～16世紀のものである。243は寛永通宝である。244は瓦質の汽車で，細部まで表現されている。前面下部にはカウキャッチャー，同上部には前照灯，上面には前から順に煙突･スチームドーム･運転席･石炭および水タンク，下部には車輪が表現されている。

調査区周辺表採遺物（第43図）

調査区周辺で表採された遺物で，245・246は調査区東側の納経所南で，247・248は本堂東側の稲荷社東で，249は本堂北の竹林で採集されたものである。

245は瓦質土器鉢である。246は三巴文軒丸瓦で，復元で瓦当径が13cm前後の小型品である。巴文の尾が接して圏線をなしており，外区の珠文は16個前後と推測される。中世のものと想定される。247は連珠文軒平瓦で，珠文を３個一組とし２組以上配して圏線で囲っており，50・51と同笵品と考えられる。顎後縁を面取りしており，凹面に布目，凸面に縦方向の板ナデ調整が見られる。いぶしが部分的にまわっておらず，須恵質の焼成である。また，向かって右側の後方が斜めに切断されていることから，隅瓦であることが分かる。248も50・51・247と同笵品の可能性がある軒平瓦の破片で，内外区を分ける圏線の角の特徴が似ている。須恵質の焼成である。249は三巴文軒丸瓦で，瓦当径が12.6cmの小型品である。内区には尾が長い三巴文，外区には珠文が復元で14個前後巡り，内外区は圏線で区分されている。中世のものと想定される。

第 42 図　表土（第 1 層）出土遺物実測図（縮尺 1/4，243・244 は 1/2）



第 43 図　調査区周辺表採遺物実測図（縮尺 1/4）

※法量の()は，残存値を表す。

報告番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整	色調	胎土	備考
1	肥前系磁器 染付碗	9.8		(4.5)	外面:施釉 内面:施釉	釉:明緑灰10GY8/1 素地:灰白7.5Y8/1 模様:青	密	外面:「寺」 内面見込:2字
2	肥前系磁器 端反り碗	12.0		(2.6)	外面:施釉 内面:施釉	釉:青灰10BG6/1 素地:灰白N8/	密	
3	肥前系磁器 青磁染付碗	12.7		(4.4)	外面:施釉 内面:施釉	釉:灰オリーブ7.5Y6/2 素地:灰白7.5Y7/1 模様:青	密	内面:四方襷文
4	陶胎染付 呉須絵碗			(2.5)	外面:施釉(貫入) 内面:施釉(貫入)	素地:にぶい褐7.5YR5/3 釉:灰白5Y8/2 絵付釉:オリーブ灰	密	
5	肥前 京焼風陶器皿		4.7	(1.8)	外面:施釉(貫入) 内面:施釉(貫入，底部は露胎)，回転ヘラ削り	釉:浅黄2.5Y7/3 素地:灰白2.5Y8/2 模様:暗オリーブ灰	密	外面底部:「清水」刻印
6	瀬戸美農系陶器 腰錆茶碗	9.6		(4.7)	外面:施釉(貫入)，回転ナデ 内面:施釉(貫入)，回転ナデ	鉄釉:灰白7.5Y7/2 素地:にぶい橙7.5YR7/3	密	
7	土師質土器		13.4	(6.4)	外面:摩滅 内面:回転ナデ	外面:浅黄橙10YR8/3 内面:浅黄橙10YR8/3	やや密	
8	須恵器 壺			(4.8)	外面:ナデ 内面:回転ナデ	外面:黄灰2.5Y5/1 内面:褐灰2.5Y6/1	密	
9	須恵器 壺			(2.6)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白10YR7/1 内面:灰白10YR7/1	密	
10	土師器 壺			(1.7)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:にぶい橙7.5YR6/4 内面:にぶい黄橙10YR6/4	1mm以下の石英・長石を含む	
11	丸瓦	長さ (3.5)	幅 (7.2)	厚さ 1.9	凸面:ナデ 凹面:布目，面取	凸面:にぶい黄橙10YR7/3 凹面:灰白10YR7/1	密	須恵質
12	平瓦	長さ (6.2)	幅 (5.5)	厚さ 2.0	凹面:布目，面取 凸面:縄叩き痕	凹面:灰N4/ 凸面:暗灰N3/	密	須恵質
13	須恵器 椀			(2.6)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y7/1 内面:灰白5Y7/1	密	
14	京信楽系陶器 丸碗		3.0	(1.9)	外面:施釉(貫入) 内面:施釉(貫入)，回転ヘラ削り	釉:灰白5Y8/2 素地:灰白7.5YR8/2	密	
15	平瓦	長さ (9.9)	幅 (4.4)	厚さ 1.6	凹面:摩滅 凸面:板ナデ	凹面:灰白N7/ 凸面:灰N5/	密	いぶし瓦
16	丸瓦	長さ (21.5)	幅 (12.0)	厚さ 2.6	凸面:板ナデ 凹面:切断痕，吊り紐痕，面取	凸面:灰N6/ 凹面:灰N4/	粗	いぶし瓦
17	丸瓦	長さ (22.3)	幅 (11.3)	厚さ 2.4	凸面:板ナデ 凹面:摩滅	凸面:灰N6/ 凹面:灰黄2.5Y7/2	密	いぶし瓦
18	平瓦	長さ (20.7)	幅 (15.0)	厚さ 2.1	凹面:摩滅 凸面:摩滅	凹面:灰黄褐10YR5/2 凸面:にぶい橙7.5YR6/4	粗	土師質
19	平瓦	長さ (8.1)	幅 (9.7)	厚さ 2.6	凹面:板ナデ 凸面:ナデ	凹面:にぶい黄橙10YR7/3 凸面:にぶい黄橙10YR7/4	粗	土師質
20	平瓦	長さ (10.2)	幅 (8.4)	厚さ 2.2	凹面:摩滅 凸面:板ナデ	凹面:橙5YR6/8 凸面:橙5YR6/8	粗	土師質
21	平瓦	長さ (10.1)	幅 (5.5)	厚さ 2.15	凹面:摩滅 凸面:摩滅	凹面:灰黄2.5Y6/2 凸面:灰黄2.5Y6/2	やや密	いぶし瓦
22	須恵器 杯		6.2	(1.4)	外面:回転糸切り 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:褐灰10YR5/1	密	
23	須恵器 鉢		10.2	(1.8)	外面:回転ナデ，底面未調整 内面:回転ナデ	外面:褐灰10YR5/1 内面:灰黄褐10YR5/2	やや粗	
24	須恵器 壺			(4.0)	外面:回転ナデ 内面:ナデ，指頭圧痕	外面:灰N5/ 内面:灰N4/	密	
25	瓦器 椀			(2.0)	外面摩滅 内面:摩滅	外面:灰N6/ 内面:灰N4/	密	
26	土師質土器 皿			(1.5)	外面:摩滅 内面:指頭圧痕	外面:浅黄橙10YR8/4 内面:浅黄橙10YR8/4	1mm以下の石英・長石を含む	
27	土師質土器 鍋			(2.8)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:にぶい黄橙10YR6/3 内面:にぶい黄橙10YR6/3	1mm以下の石英・長石を含む	
28	土師器 竈	長さ 12.5			外面:ナデ，指頭圧痕 内面:	外面:にぶい橙7.5YR6/4 内面:にぶい橙7.5YR6/4	3mm以下の石英・長石を含む	
29	丸瓦	長さ (7.5)	幅 (4.2)	厚さ 1.4	凸面:ナデ 凹面:布目	凸面:にぶい黄橙10YR6/3 凹面:にぶい褐7.5YR6/3	密	土師質
30	丸瓦	長さ (3.9)	幅 (4.1)	厚さ 1.6	凸面:ナデ 凹面:布目	凸面:にぶい黄橙10YR7/2 凹面:にぶい黄橙10YR7.2	密	土師質
31	丸瓦	長さ (6.5)	幅 (8.3)	厚さ 1.4	凸面:摩滅 凹面:布目	凸面:にぶい黄橙10YR7/4 凹面:にぶい黄橙10YR7/4	密	土師質
32	平瓦	長さ (5.4)	幅 (6.25)	厚さ 1.8	凹面:布目 凸面:縄叩き痕後ナデ	凹面:灰白2.5Y8/1 凸面:灰白2.5Y8/1	密	須恵質
33	平瓦	長さ (9.0)	幅 (10.4)	厚さ 2.5	凹面:布目 凸面:縄叩き痕	凹面:にぶい褐7.5YR6/3 凸面:褐灰7.5YR5/1	密	須恵質
34	扁平片刃石斧	長さ (4.0)	幅 (1.0)	厚さ (1.1)	外面: 内面:	外面: 内面:	片岩	
35	三巴文軒丸瓦	直径 17.8		厚さ 3.0	瓦当裏面:横方向のナデ，顎周辺ナデ	凸面:灰白7.5Y8/2 凹面:灰白7.5Y8/2	粗	いぶし瓦
36	三巴文軒丸瓦	直径 16.8		厚さ 2.9	凸面:板ナデ 凹面:板ナデ 瓦当裏面:斜め方向のナデ	凸面:褐灰10YR5/1 凹面:	密	いぶし瓦
37	三巴文軒丸瓦	直径 12.4		厚さ 1.8	凸面:板ナデ 凹面:ナデ 瓦当裏面:横方向のナデ	凸面:灰N6/ 凹面:灰N5/	やや粗	いぶし瓦
38	三巴文軒丸瓦	直径 14.6			瓦当裏面:横方向のナデ，顎周辺ナデ	凸面:灰N5/ 凹面:	やや粗	いぶし瓦
39	三巴文軒丸瓦	直径 16.4		厚さ 2.9	瓦当裏面:横方向のナデ，顎周辺ナデ	凸面:灰N6/ 凹面:灰N4/	やや粗	いぶし瓦(須恵質)
40	三巴文鳥衾	縦 (9.6)	横 (11.5)	厚さ 2.0	凸面:摩滅 凹面:摩滅	凸面:灰N4/ 凹面:暗灰N3/	粗	いぶし瓦(土師質)
41	丸瓦	長さ (15.8)	幅 (11.8)	厚さ 2.1	凸面:板ナデ，ナデ 凹面:布目，面取	凸面:灰N6/ 凹面:灰N4/	やや粗	いぶし瓦
42	丸瓦	長さ (16.05)	幅 (8.1)	厚さ 1.8	凸面:縄叩き痕後ナデ 凹面:布目，面取	凸面:灰白N7/ 凹面:灰白N7/	やや粗	須恵質
43	平瓦	長さ (14.9)	幅 (10.5)	厚さ 2.3	凹面:板ナデ，面取 凸面:板ナデ	凹面:褐灰10YR6/1 凸面:褐灰10YR5/1	やや粗	いぶし瓦
44	留蓋	縦 (9.7)	横 (12.0)	厚さ 2.9	外面:ナデ 内面:摩滅	外面:灰N6/ 内面:灰白N7/	密	いぶし瓦
45	三巴文軒丸瓦	直径 17.2		厚さ 3.0	外面: 内面:	外面:灰N4/	密	いぶし瓦
46	三巴文軒丸瓦	縦 (9.0)	横 (9.2)	厚さ 2.7	凸面:板ナデ 凹面:ナデ	凸面:灰N4/ 凹面:灰N4/	粗	いぶし瓦
47	卍字文軒丸瓦	直径 13.8		厚さ 1.7	外面: 内面:	外面:灰10Y5/1	密	いぶし瓦
48	菊丸文棟飾り	縦 (5.0)	横 (10.0)	厚さ 1.5	凸面:摩滅 凹面:摩滅	凸面:灰N5/ 凹面:灰白2.5Y7/1	密	いぶし瓦，16弁か
49	波形文軒平瓦	長さ (25.9)	幅 (20.3)	厚さ 2.8	凹面:板ナデ，面取 凸面:ナデ，瓦当接合痕(筋目+刺突痕)	凹面:にぶい黄橙10YR 7/3	密	いぶし瓦(土師質)
50	蓮珠文軒平瓦	長さ (14.2)	幅 (19.5)	厚さ 1.8	凹面:布目 凸面:板ナデ	凹面:灰N4/ 凸面:灰N6/	やや粗	いぶし瓦(須恵質)
51	連珠文軒平瓦	長さ (9.0)	幅 (20.0)	厚さ 2.4	凹面:布目 凸面:板ナデ	凹面:灰白N7/ 凸面:灰N4/	やや粗	いぶし瓦(土師質)

第２表　屋島寺出土遺物観察表①

報告番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整	色調	胎土	備考
52	丸瓦	長さ (16.5)	幅 (16.1)	厚さ 2.6	凸面:板ナデ, 釘穴 凹面:板ナデ, 面取	凸面:灰N4/ 凹面:暗灰N3/	密	いぶし瓦
53	丸瓦	長さ (11.9)	幅 (13.4)	厚さ 2.8	凸面:摩滅 凹面:面取, 摩滅	凸面:灰N6/1 凹面:灰N6/1	密	いぶし瓦
54	平瓦	長さ (20.6)	幅 (14.5)	厚さ 2.3	凹面:摩滅 凸面:摩滅	凹面:灰N5/ 凸面:灰N5/	密	いぶし瓦
55	用途不明瓦	長さ (12.65)	幅 (16.0)	厚さ 2.9	上面:板ナデ, 面取 下面:ナデ	上面:黄灰2.5Y5/1 下面:黄灰2.5Y5/1	やや密	いぶし瓦
56	丸瓦	長さ (9.8)	幅 (12.5)	厚さ 1.7	凸面:摩滅 凹面:布目?	凸面:灰N6/ 凹面:灰N5/	密	いぶし瓦
57	丸瓦	長さ (15.5)	幅 (9.7)	厚さ 2.2	凸面:縄叩き痕後ナデ 凹面:布目, 面取	凸面:灰7.5YR6/1 凹面:灰7.5YR6/1	粗	須恵質
58	丸瓦	長さ (13.0)	幅 (8.0)	厚さ 2.1	凸面:板ナデ 凹面:布目, 板ナデ, 面取	凸面:灰N5/ 凹面:暗灰N3/	密	いぶし瓦
59	丸瓦	長さ (3.5)	幅 (6.8)	厚さ 1.8	凸面:叩き後板ナデ 凹面:切断痕, 布目, 面取り	凸面:灰白5Y7/1 凹面:灰N5/	粗	須恵質
60	用途不明瓦	長さ (6.0)	幅 (10.5)	厚さ 3.2	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:灰N6/	密	いぶし瓦
61	平瓦	長さ (13.0)	幅 (8.6)	厚さ 2.4	凹面:板ナデ 凸面:板ナデ	凹面:灰N5/ 凸面:	やや密	いぶし瓦
62	平瓦	長さ (8.6)	幅 (10.3)	厚さ 2.6	凹面:切断痕, 布目, ナデ, 面取 凸面:板ナデ	凹面:にぶい黄橙10YR7/2 凸面:	粗	須恵質
63	平瓦	長さ (9.1)	幅 (8.9)	厚さ 2.0	凹面:布目 凸面:縄叩き痕	凹面:灰白5Y8/1 凸面:	密	須恵質
64	丸瓦	長さ (8.1)	幅 (2.4)	厚さ (2.6)	凸面:摩滅 凹面:布目, 面取	凸面:灰白10YR8/2 凹面:灰白10YR8/1	密	須恵質
65	須恵器 蓋			(1.6)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	
66	須恵器 杯	8.9		3.5	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	やや粗	
67	打製石庖丁	長さ (3.4)	幅 (4.7)	厚さ 0.9	外面: 内面:	外面: 内面:	サヌカイト	
68	磁器 碗	11.0		(4.5)	外面:施釉, 回転ナデ 内面:施釉, 回転ナデ	釉:明緑灰7.5GY2/1 素地:灰白N8/	密	外面:草花文
69	寛永通宝	直径 2.6		厚さ 0.1	外面: 内面:	外面: 内面:	銅	
70	寛永通宝	直径 2.6		厚さ 0.1	外面: 内面:	外面: 内面:	銅	
71	肥前系磁器 青磁染付碗	11.8		(3.6)	外面:施釉, 回転ナデ 内面:施釉, 回転ナデ	外面:灰7.5Y6/1 内面:灰5Y6/1	密	
72	京信楽系陶器 色絵丸碗	6.6		(3.3)	外面:施釉(貫入), 回転ナデ 内面:施釉(貫入), 回転ナデ	釉:灰7.5Y6/1 素地:灰白10YR8/2	密	
73	丸瓦	長さ (19.0)	幅 13.6	厚さ 2.4	凸面:ナデ 凹面:布目, ナデ, 面取	凸面:灰N5/ 凹面:灰N5/	密	いぶし瓦
74	丸瓦	長さ (10.5)	幅 11.7	厚さ 2.1	凸面:ナデ 凹面:布目, 面取	凸面:灰N5/ 凹面:灰N4/	やや密	いぶし瓦
75	平瓦	長さ (16.8)	幅 (9.8)	厚さ 1.5	凹面:ナデ 凸面:板ナデ	凹面:灰N5/ 凸面:灰N4/	やや密	いぶし瓦
76	軒丸瓦	直径 12.6	長さ (4.5)	厚さ 1.3	凸面:ナデ 凹面:ナデ	凸面:灰白N7/ 凹面:灰N6/	密	いぶし瓦
77	三巴文鳥衾	縦 (8.0)	横 (7.4)		凸面:ナデ 凹面:ナデ	凸面:灰N4/ 凹面:灰N4/	密	いぶし瓦
78	平瓦	長さ (6.5)	幅 (6.5)	厚さ 2.6	凹面:ナデ 凸面:板ナデ	凹面:灰N4/ 凸面:灰N5/	密	いぶし瓦, 刻印
79	平瓦	長さ (6.9)	幅 (7.0)	厚さ 2.0	凹面:ナデ 凸面:ナデ	凹面:灰N4/ 凸面:暗灰N3/	密	いぶし瓦, 刻印
80	土師質土器 杯			(0.5)	外面:ヘラ切り, 板目 内面:回転ナデ	外面:浅黄橙10YR8/3 内面:浅黄橙10YR8/3	1mm以下の石英・長石を含む	
81	平瓦	長さ (5.3)	幅 (6.3)	厚さ 1.7	凹面:ナデ 凸面:板ナデ	凹面:灰N4/ 凸面:灰N4/	密	いぶし瓦
82	平瓦	長さ (6.6)	幅 (6.6)	厚さ 1.8	凹面:ナデ 凸面:ナデ	凹面:灰褐5YR5/2 凸面:灰褐5Y5/2	密	須恵質
83	平瓦	長さ (7.0)	幅 (4.8)	厚さ 1.8	凹面:ナデ 凸面:ナデ	凹面:灰N4/ 凸面:灰白2.5Y7/1	密	いぶし瓦
84	丸瓦	長さ (8.9)	幅 (7.7)	厚さ 2.6	凸面:ナデ 凹面:布目	凸面:黄灰2.5Y6/1 凹面:黄灰2.5Y6/1	密	須恵質
85	平瓦	長さ (8.2)	幅 (7.8)	厚さ 1.9	凹面:布目 凸面:縄叩き痕	凹面:灰白5Y8/1 凸面:灰白5Y8/1	密	須恵質
86	鉄釘	長さ (4.7)	幅 1.2	厚さ 0.9	外面: 内面:	外面: 内面:	鉄	
87	土師質土器 鍋			(3.1)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:橙7.5Y6/6 内面:橙7.5Y6/6	3mm以下の石英・長石を含む	
88	土師質土器 椀		7.5	(1.5)	外面:回転ナデ 内面:摩滅	外面:灰褐5YR4/2 内面:灰褐5YR4/2	1mm以下の石英・長石を含む	
89	弥生土器 壺	13.2		(4.5)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:浅黄橙10YR8/3 内面:浅黄橙10YR8/3	1～2mm以下の石英・長石を含む	貼付凸帯2条
90	弥生土器 壺	13.0		(4.6)	外面:ヨコナデ 内面:摩滅	外面:浅黄橙7.5YR8/3 内面:黄灰2.5Y5/1	1mm以下の石英・長石を含む	貼付凸帯2条
91	弥生土器 壺	16.9		(9.1)	外面:指頭圧痕 内面:摩滅	外面:にぶい黄橙10YR6/3 内面:黄灰2.5Y4/1	5mm以下の砂粒を含む	押圧凸帯2条
92	弥生土器 壺	17.8		(4.4)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:にぶい黄褐10YR6/4 内面:にぶい黄橙10YR7/2	0.5～5mm以下の石英・長石・角閃石を含む	内面:黒斑
93	弥生土器 壺	11.2		(4.3)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:にぶい黄橙10YR6/4 内面:褐灰10YR74/1	1～4mm以下の石英・長石を含む	内面:黒斑
94	弥生土器 壺	13.6		(4.8)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:にぶい黄橙10YR6/4 内面:にぶい黄橙10YR7/4	5mm以下の石英・長石を含む	
95	弥生土器 甕	20.6		(6.1)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:にぶい黄褐10YR5/3 内面:にぶい黄褐10YR5/3	4mm以下の砂粒を含む	
96	弥生土器 甕	20.8		(2.1)	外面:摩滅 内面:ナデ, 指頭圧痕	外面:にぶい黄橙10YR6/4 内面:にぶい黄褐10YR5/3	2mm以下の石英・長石を含む	
97	弥生土器 甕	31.8		(4.7)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:灰黄褐10YR5/2 内面:にぶい黄褐10YR5/4	5mm以下の石英・長石を含む	
98	弥生土器 甕			(2.8)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:にぶい黄橙10YR6/4 内面:にぶい黄橙10YR6/4	1mm以下の石英・長石を含む	
99	弥生土器 甕	25.2		(3.6)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:にぶい橙7.5YR7/3 内面:浅黄橙10YR8/4	1～3mm以下の石英・長石を含む	
100	弥生土器 甕	26.0		(2.5)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:にぶい赤褐5YR4/3 内面:褐7.5YR4/3	1～3mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
101	弥生土器 底部		9.4	(6.6)	外面:摩滅 内面:ナデ, 指頭圧痕	外面:にぶい黄橙10YR7/4 内面:褐灰10YR5/1	2mm以下の石英・長石を含む	
102	弥生土器 底部		11.4	(5.2)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:にぶい黄橙10YR7/4 内面:黒褐7.5YR3/1	5mm以下の石英・長石を含む	
103	弥生土器 底部		9.2	(4.0)	外面:ナデ 内面:摩滅	外面:浅黄2.5Y7/3 内面:黄灰2.5Y6/1	3mm以下の石英・長石を含む	
104	弥生土器 底部		7.0	(4.8)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:灰黄褐10YR4/2 内面:黒褐10YR3/1	5mm以下の石英・長石を含む	
105	弥生土器 底部		6.0	(4.3)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:橙7.5YR7/6 内面:浅黄橙10YR8/4	3mm以下の石英・長石を含む	

第3表　屋島寺出土遺物観察表②

報告番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整	色調	胎土	備考
106	弥生土器 底部		8.7	(4.0)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:灰黄褐10YR5/2 内面:浅黄2.5Y7/4	4mm以下の砂粒を多量に含む	
107	弥生土器 底部		8.9	(6.5)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:にぶい橙7.5YR6/4 内面:にぶい黄橙10YR7/4	5mm以下の石英・長石を含む	
108	弥生土器 底部		6.2	(4.0)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:にぶい橙7.5YR7/4 内面:にぶい黄橙10YR7/4	1mm以下の石英・長石を含む	
109	弥生土器 底部		5.8	(3.9)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:にぶい褐7.5YR5/4 内面:明褐7.5YR5/6	1～3mm以下の石英・長石・角閃石を	
110	弥生土器 底部		6.0	(2.6)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:にぶい黄橙10YR5/4 内面:にぶい黄橙10YR4/3	3mm以下の石英・長石を含む	
111	弥生土器 底部		6.6	(2.9)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:褐灰10YR4/1 内面:褐灰10YR4/1	3mm以下の石英・長石を含む	
112	弥生土器 底部		5.2	(3.1)	外面:ナデ 内面:指頭圧痕	外面:にぶい黄褐10YR5/4 内面:にぶい黄褐10YR5/3	2～3mm以下の石英・長石を含む	
113	打製石槍	長さ (4.6)	幅 3.4	厚さ 1.0	外面: 内面:	外面: 内面:	サヌカイト	
114	須恵器 杯蓋	16.0		(1.7)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	やや密	
115	須恵器 杯蓋	15.4		(1.1)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:青灰10BG6/1 内面:青灰10BG7/1	密	
116	須恵器 杯蓋	14.8		(1.2)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰7.5Y5/1 内面:灰7.5Y5/1	密	
117	須恵器 杯			(0.8)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:にぶい赤褐5YR5/3 内面:灰白N7/	密	
118	須恵器 杯			(1.4)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N4/	密	
119	須恵器 杯			(2.3)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:青灰5BG6/1 内面:明青灰10BG7/1	密	
120	須恵器 杯		5.4	(1.4)	外面:回転ナデ,回転ヘラ切り 内面:回転ナデ	外面:灰7.5Y5/1 内面:灰7.5Y5/1	やや粗	
121	須恵器 こね鉢	23.0	15.0	(5.0) (0.5)	外面:回転ナデ底部ヘラ切り 内面:回転ナデ	外面:灰白10YR8/1 内面:灰白10YR8/1	やや密	
122	須恵器 こね鉢		11.0	(3.5)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰7.5Y5/1 内面:灰7.5Y5/1	密	
123	須恵器 壺			(2.4)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:黄灰2.5Y6/ 内面:灰N6/	2mm以下の石英・長石を含む	
124	須恵器 壺			(3.0)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白10YR7/1 内面:灰白10YR7/1	密	
125	須恵器 壺			(6.2)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:黄灰2.5Y5/1 内面:灰白10YR7/1	密	外面体部:自然釉付着
126	須恵器 壺			(7.9)	外面:格子目叩き痕,回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰黄褐10YR6/2 内面:にぶい黄褐10YR7/3	1mm以下の石英・長石を含む	
127	土師質土器 坏	13.5	9.3	3.4	外面: 内面:	外面: 内面:		
128	土師質土器 坏	13.8	9.4	3.5	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:灰白10YR8/2 内面:灰白10YR8/2	1～2mm以下の石英・長石を含む	内面底部:黒斑
129	土師質土器 坏		10.2	(1.9)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:浅黄橙10YR8/3 内面:浅黄橙10YR8/3	1～3.5mmの石英・長石を含む	
130	土師質土器 坏	9.8		(2.2)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:浅黄橙10YR8/4 内面:浅黄橙10YR8/4	1mm以下の石英・長石を含む	
131	土師質土器 椀		5.8	(2.0)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:灰白10YR8/2	1mm以下の石英・長石を含む	
132	土師器 甕	19.2		(6.0)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:にぶい赤褐5YR4/4 内面:にぶい赤褐5YR4/4	3mm以下の石英・長石を含む	
133	土師質土器 甕	45.0		(5.5)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:明赤褐2.5YR5/8 内面:明赤褐5YR5/8	5mm以下の石英・長石を含む	
134	土師質土器 鍋			(2.6)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:暗赤褐5YR3/4 内面:暗赤褐5YR3/4	1～2mm以下の石英・長石を含む	
135	土師質土器 羽釜			(6.2)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:にぶい黄橙10YR7/3 内面:にぶい黄橙10YR7/3	1～2mm以下の石英・長石を含む	
136	瓦器 小杯	8.6	4.6	2.6	外面:ヘラミガキ,暗文 内面:ヘラミガキ,暗文	瓦質:灰7.5Y5/1 素地:灰白7.5Y7/1	密	
137	丸瓦	長さ (11.3)	幅 (15.0)	厚さ 1.8	外面:摩滅 内面:布目	外面:明黄褐10YR7/6 内面:明黄褐10YR7/6	密	土師質
138	平瓦	長さ (11.75)	幅 (12.85)	厚さ 1.9	凹面:布目 凸面:縄叩き痕	凹面:明黄褐10YR6/6 凸面:明黄褐10YR6/6	密	土師質
139	平瓦	長さ (10.95)	幅 (10.4)	厚さ 1.8	凹面:布目 凸面:叩き痕	凹面:にぶい黄橙10YR7/4 凸面:にぶい黄橙10YR7/4	やや密	土師質
140	平瓦	長さ (4.7)	幅 (4.0)	厚さ 1.7	凹面:布目 凸面:布目	凹面:褐灰7.5YR5/1 凸面:褐灰7.5YR5/1	密	須恵質
141	肥前系磁器 広東染付碗		5.3	(3.7)	外面:施釉,回転ナデ 内面:施釉,回転ナデ	釉:透明 素地:灰白N8/ 模様:青	密	外面:圏線3条,草花文 内面:圏線1条
142	土師質土器 鍋			(3.2)	外面口縁部:ヨコナデ 内面口縁部:ヨコナデ	外面:にぶい黄橙10YR6/3 内面:にぶい黄橙10YR6/4	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	
143	須恵器 高杯			(1.5)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	
144	弥生土器 底部		6.3	(2.8)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:にぶい褐7.5YR5/3 内面:黒褐10YR3/1	1～3mm以下の石英・長石・角閃石を	
145	弥生土器 底部		7.0	(2.6)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:にぶい褐7.5YR5/4 内面:灰黄褐10YR4/2	1～3mm以下の石英・長石・雲母を含	
146	丸瓦	長さ (16.2)	幅 (8.2)	厚さ 2.8	凸面:縄叩き痕,板ナデ 凹面:布目,面取	外面:灰白2.5Y7/1 内面:灰白2.5Y7/1	粗	須恵質
147	丸瓦	長さ (7.1)	幅 (7.4)	厚さ 1.2	凸面:摩滅 凹面:布目	凸面:明黄褐10YR7/6 凹面:明黄褐10YR7/6	密	土師質
148	平瓦	長さ (9.5)	幅 (7.7)	厚さ 1.5	凹面:板ナデ 凸面:ナデ	凹面:暗青灰5B4/1 凸面:暗青灰5B4/1	密	いぶし瓦
149	打製石鏃	長さ 2.8	幅 1.7	厚さ 0.5	外面: 内面:	外面: 内面:	サヌカイト	重量:1.8g
150	土師質土器 坏	13.4	7.4	(1.6)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:灰白10YR8/2	1mm以下の石英・長石を含む	
151	土師質土器 椀		6.6	(3.2)	外面:摩滅 内面:摩滅	外面:橙5YR6/8 内面:橙5YR6/8	1～5mm以下の石英・長石を含む	
152	瓦質土器 小杯	7.8	3.6	2.7	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰7.5Y5/1 内面:灰7.5Y5/1	密	
153	須恵器 杯		7.4	(2.1)	外面:回転ナデ,回転ヘラ切り 内面:回転ナデ	外面:灰白10Y8/1 内面:灰白10Y7/1	密	
154	須恵器 壺			(6.5)	外面:格子目叩き痕 内面:回転ナデ	外面:褐灰10YR4/1 内面:褐灰10YR5/1	密	
155	須恵器 甕			(3.5)	外面:格子目叩き痕,回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N4/	密	
156	龍泉窯系 青磁 碗			(2.4)	外面:施釉 内面:施釉	釉:明オリーブ2.5GY7/1 素地:灰白N8/	密	外面:鎬蓮弁
157	肥前系京焼風 陶器 碗	9.7	5.2	5.7	外面:回転ナデ,施釉 内面:施釉	釉:淡黄2.5Y8/4 素地:灰白2.5Y8/2	密	底面:刻印
158	備前焼 陶器 甕			(7.7)	外面:平行目叩き痕 内面:ナデ,指頭圧痕	素地:灰褐5YR5/2 褐灰7.5YR4/1 釉:灰オリーブ7.5Y5/3	やや密	
159	蓮華文軒丸瓦	直径 14.8		厚さ 2.3	瓦当面:縄叩き痕 瓦当裏面:摩滅	両面:淡黄2.5Y8/3	やや密	土師質

第4表　屋島寺出土遺物観察表③

報告番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整	色調	胎土	備考
160	唐草文軒平瓦	長さ (9.9)	幅 (18.5)	厚さ 6.3	凹面:布目 凸面:縄叩き痕	凹面:青N4/ 凸面:青N4/	やや密	須恵質
161	軒平瓦	長さ (11.7)	幅 (15.5)	厚さ 6.5	凹面:布目 凸面:縄叩き痕	凹面:灰白10YR8/2 凸面:灰白10YR8/2	密	須恵質 瓦当面剥離
162	丸瓦	長さ (9.5)	幅 (7.0)	厚さ 2.9	凸面:縄叩き痕 凹面:布目, 面取	凸面:にぶい褐7.5YR5/4 凹面:にぶい褐7.5YR5/3	密	須恵質
163	丸瓦	長さ (10.7)	幅 (8.8)	厚さ 1.6	凸面:摩滅 凹面:布目	凸面:橙7.5YR7/6 凹面:橙7.5YR7/6	密	土師質
164	丸瓦	長さ (8.0)	幅 (6.8)	厚さ 1.7	凸面:板ナデ 凹面:布目, 面取, 接合痕	凸面:にぶい黄橙10YR7/4 凹面:にぶい黄橙10YR6/4	密	土師質
165	丸瓦	長さ (5.5)	幅 (6.5)	厚さ 2.1	凸面:板ナデ 凹面:布目, 面取	凸面:灰白5Y7/1 凹面:灰白5Y7/1	密	須恵質
166	丸瓦	長さ (10.8)	幅 (8.3)	厚さ 2.8	凸面:板ナデ 凹面:布目	凸面:浅黄橙10YR8/3 凹面:にぶい赤褐	密	須恵質
167	丸瓦	長さ (11.5)	幅 (6.5)	厚さ 1.7	凸面:摩滅 凹面:布目	凸面:橙7.5YR6/6 凹面:橙7.5YR6/6	密	土師質
168	丸瓦	長さ (9.6)	幅 (7.8)	厚さ 1.3	凸面:板ナデ 凹面:布目(合わせ目), 接合痕	凸面:にぶい黄橙10YR7/4 凹面:にぶい黄橙10YR6/4	密	土師質
169	丸瓦	長さ (12.8)	幅 (5.7)	厚さ 1.6	凸面:板ナデ 凹面:布目	凸面:灰黄褐10YR6/2 凹面:灰黄褐10YR6/2	やや粗	須恵質
170	丸瓦	長さ (9.9)	幅 (6.4)	厚さ 1.3	凸面:板ナデ 凹面:布目	凸面:灰白5Y8/1 凹面:にぶい黄褐10YR4/3	密	須恵質
171	丸瓦	長さ (11.9)	幅 (5.4)	厚さ 1.55	凸面:板ナデ 凹面:布面	凸面:にぶい橙7.5YR7/4 凹面:にぶい橙7.5YR7/4	密	土師質
172	丸瓦	長さ (8.1)	幅 (6.6)	厚さ 2.8	凸面:板ナデ 凹面:布目, 面取	凸面:灰N6/ 凹面:暗灰N3/	粗	いぶし瓦
173	平瓦	長さ (12.5)	幅 (12.2)	厚さ 2.0	凹面:布目 凸面:縄叩き痕	凹面:灰黄褐10YR6/2 凸面:灰黄褐10YR6/2	密	須恵質
174	平瓦	長さ (10.5)	幅 (8.7)	厚さ 2.1	凹面:布目 凸面:縄叩き痕	凹面:褐灰10YR6/1 凸面:褐灰10YR6/1	密	須恵質
175	平瓦	長さ (7.2)	幅 (5.5)	厚さ 2.0	凹面:布目 凸面:縄叩き痕	凹面:灰黄褐10YR6/2 凸面:灰黄褐10YR6/2	やや粗	須恵質
176	平瓦	長さ (9.0)	幅 (10.7)	厚さ 1.6	凹面:布目 凸面:縄叩き痕	凹面:橙7.5YR6/6 凸面:にぶい赤褐5YR5/3	密	土師質
177	平瓦	長さ (8.3)	幅 (8.4)	厚さ 1.8	凹面:布目 凸面:縄叩き痕	凹面:にぶい褐7.5YR6/3 凸面:にぶい橙7.5YR7/3	密	須恵質
178	平瓦	長さ (8.3)	幅 (9.4)	厚さ 2.1	凹面:布目 凸面:縄叩き痕	凹面:にぶい黄橙10YR7/3 凸面:にぶい黄橙10YR7/3	密	須恵質
179	平瓦	長さ (11.2)	幅 (8.0)	厚さ 11.2	凹面:布目 凸面:縄叩き痕	凹面:灰褐7.5YR6/2 凸面:灰褐7.5YR6/2	密	須恵質
180	平瓦	長さ (7.0)	幅 (4.2)	厚さ 1.8	凹面:摩滅 凸面:格子目叩き痕	凹面:橙7.5YR7/6 凸面:橙7.5YR7/6	密	土師質
181	平瓦	長さ (9.8)	幅 (8.6)	厚さ 2.0	凹面:布目 凸面:ナデ	凹面:橙2.5YR6/6 凸面:にぶい橙5YR6/4	密	土師質
182	平瓦	長さ (6.0)	幅 (9.5)	厚さ 1.5	凹面:布目 凸面:板ナデ	凹面:灰褐7.5YR6/2 凸面:灰褐7.5YR6/2	密	須恵質
183	平瓦	長さ (8.5)	幅 (6.7)	厚さ 2.0	凹面:布目, 面取 凸面:ナデ	凹面:灰白10YR7/1 凸面:黄灰2.5Y6/1	やや粗	いぶし瓦
184	平瓦	長さ (6.8)	幅 (10.5)	厚さ 1.8	凹面:布目 凸面:布目, ナデ	凹面:にぶい赤褐5YR5/4 凸面:にぶい赤褐5YR5/4	密	須恵質
185	須恵器 椀			(1.7)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N4/ 内面:灰N4/	密	
186	須恵器 杯			(0.5)	外面:回転ヘラ切り, ゴザ目 内面:回転ナデ	外面:灰白2.5Y8/2 内面:灰白2.5Y8/2	やや密	
187	須恵器 甕			(5.4)	外面体部:格子目叩き痕 内面体部:ケズリ後ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N6/	密	亀山焼
188	土師質土器 杯	8.2	5.4	2.1	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	1mm以下の石英・長石を含む	
189	土師質土器 杯		5.4	(1.2)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/6 内面:浅黄橙7.5YR8/6	2mm以下の石英・長石を含む	
190	土師質土器 杯		9.6	(1.9)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:灰白10YR8/2	3mm以下の石英・長石を含む	
191	瓦器 椀			(2.4)	外面:ナデ, 指頭圧痕 内面:ナデ	外面:灰5Y4/1 内面:灰5Y4/1	密	
192	瓦器 椀		4.0	(1.0)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	
193	染付 小皿	8.4		(1.7)	外面:施釉 内面:施釉	釉:明緑灰10YR8/1 素地:灰白N8/ 絵付釉:具須	密	外面:草花文, 圏線2条 内面:圏線2条
194	染付 徳利			(4.5)	外面:施釉 内面:一部施釉, 回転ナデ	素地:灰白N7/ 釉:明緑灰10GY8/1 絵付釉:具須 内面:にぶい黄橙10YR7/3	密	外面:草花文
195	三巴文軒丸瓦	縦 (7.5)	横 (8.0)	厚さ 2.3	瓦当裏面:ナデ	凸面:灰褐7.5YR5/2 凹面:にぶい黄褐10YR7/2	粗	須恵質
196	丸瓦	長さ (16.6)	幅 15.4	厚さ 1.9	凸面:ナデ 凹面:布目	外面:にぶい黄橙10YR7/2 内面:にぶい黄橙10YR7/2	密	須恵質
197	丸瓦	長さ (9.8)	幅 (8.6)	厚さ 2.2	凸面:摩滅 凹面:布目	凸面:明赤褐2.5YR5/6 凹面:明赤褐2.5YR6/6	やや粗	土師質
198	丸瓦	長さ (9.0)	幅 (7.2)	厚さ 2.1	凸面:縄叩き痕後板ナデ 凹面:布目	凸面:橙7.5YR7/6 凹面:橙7.5YR6/6	やや粗	土師質
199	丸瓦	長さ (10.2)	幅 (5.5)	厚さ 1.9	凸面:板ナデ 凹面:布目	凸面:にぶい黄橙10YR7/3 凹面:灰白2.5Y8/2	密	土師質
200	丸瓦	長さ (6.5)	幅 (5.7)	厚さ 2.1	凸面:板ナデ 凹面:ナデ, 面取	凸面:橙5YR6/6 凹面:橙5YR6/6	やや粗	土師質, 2次焼成
201	丸瓦	長さ (12.6)	幅 (4.7)	厚さ 1.8	凸面:縄叩き痕後ナデ 凹面:布目, 面取	凸面:灰白2.5Y7/1 凹面:灰白2.5Y7/1	密	須恵質
202	丸瓦	長さ (7.7)	幅 (5.1)	厚さ 1.6	凸面:摩滅 凹面:布目	凸面:灰黄2.5Y7/2 凹面:灰白2.5Y7/1	密	須恵質
203	丸瓦	長さ (7.8)	幅 (6.2)	厚さ 2.5	凸面:板ナデ 凹面:布目, 面取	凸面:灰白2.5Y7/1 凹面:灰白2.5Y7/1	密	須恵質
204	丸瓦	長さ (8.2)	幅 (8.7)	厚さ 3.0	凸面:ナデ 凹面:布目, 面取	凸面:にぶい橙7.5YR7/4 凹面:橙5YR7/6	密	土師質, 2次焼成
205	丸瓦	長さ (7.5)	幅 (8.1)	厚さ 2.2	凸面:ナデ 凹面:布目, 面取	凸面:灰N4/ 凹面:灰N5/	粗	いぶし瓦
206	丸瓦	長さ (11.6)	幅 (9.0)	厚さ 2.2	凸面:板ナデ 凹面:切断痕, 布目, 面取	外面:黄灰2.5Y5/1 内面:灰N5/	やや粗	いぶし瓦
207	丸瓦	長さ (11.8)	幅 (8.6)	厚さ 2.2	凸面:板ナデ 凹面:切断痕, 布目, 面取	凸面:灰N5/ 凹面:灰N5/	密	いぶし瓦
208	平瓦	長さ (11.5)	幅 (9.4)	厚さ 2.1	凹面:布目 凸面:縄叩き痕	凹面:橙7.5YR6/8 凸面:橙7.5YR6/8	やや粗	土師質
209	平瓦	長さ (9.8)	幅 (8.5)	厚さ 2.6	凹面:布目, 面取 凸面:縄叩き痕	凹面:にぶい橙5YR6/4 凸面:にぶい橙5YR6/4	やや粗	土師質
210	平瓦	長さ (11.3)	幅 (10.8)	厚さ 2.6	凹面:布目, 面取 凸面:縄叩き痕	凹面:黒褐7.5YR3/1 凸面:褐灰7.5YR4/1	粗	須恵質
211	平瓦	長さ (7.8)	幅 (6.4)	厚さ 1.8	凹面:布目 凸面:縄叩き痕	凹面:浅黄橙10YR8/3 凸面:浅黄橙10YR8/3	密	須恵質
212	平瓦	長さ (6.6)	幅 (4.8)	厚さ 2.3	凹面:布目, 面取 凸面:縄叩き痕	凹面:灰白5Y7/1 凸面:灰白5Y7/1	密	須恵質
213	平瓦	長さ (9.9)	幅 (9.5)	厚さ 1.5	凹面:布目 凸面:縄叩き痕, 板ナデ	凹面:灰5Y6/1 凸面:灰5Y6/1	やや粗	須恵質

第5表　屋島寺出土遺物観察表④

報告番号	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	調整	色調	胎土	備考
214	平瓦	長さ (8.4)	幅 (10.3)	厚さ 2.5	凹面:布目 凸面:縄叩き痕	凹面:にぶい褐7.5YR5/3 凸面:にぶい褐7.5YR5/3	やや粗	須恵質
215	平瓦	長さ (10.6)	幅 (9.4)	厚さ 2.0	凹面:布目 凸面:縄叩き痕	凹面:灰白2.5Y7/1 凸面:灰黄2.5Y7/2	粗	須恵質
216	平瓦	長さ (12.6)	幅 (13.0)	厚さ 2.1	凹面:板ナデ, 面取り 凸面:ナデ	凹面:灰N5/ 凸面:灰N5/	粗	いぶし瓦
217	鉄釘	長さ (3.0) (8.8)	幅 1.3 1.3		外面: 内面:	外面: 内面:	鉄	
218	鉄釘	長さ (4.2)	幅 0.7		外面: 内面:	外面: 内面:	鉄	
219	鉄釘	長さ (4.9)	幅 0.7		外面: 内面:	外面: 内面:	鉄	
220	鉄釘	長さ (4.7)	幅 0.8		外面: 内面:	外面: 内面:	鉄	
221	鉄釘	長さ (4.2)	幅 0.8		外面: 内面:	外面: 内面:	鉄	
222	肥前系磁器 染付碗	10.2	4.0	4.9	外面:施釉 内面:蛇の目釉ハギ, 施釉	素地:灰白7.5Y8/1 釉:灰白10Y7/1 絵付釉:暗オリーブ灰5GY4/1	密	外面:草花文, 圏線
223	肥前系磁器 染付碗	11.3	4.6	5.0	外面:施釉 内面:蛇の目釉ハギ, 施釉	釉:灰白5GY8/1 素地:灰白5Y8/1 模様:青灰5B5/1	密	外面:草花文, 三重圏線
224	肥前系磁器 染付碗	9.9	3.7	4.4	外面:回転ナデ, 施釉 内面:施釉	素地:灰白2.5Y7/1 模様:オリーブ黒10Y3/1 釉:灰白10Y7/1	密	外面:草花文, 三重圏線
225	肥前系磁器 染付碗	8.2		(3.9)	外面:回転ナデ, 施釉 内面:施釉	外面:明緑灰7.5GY8/1 内面:灰白7.5Y8/1	密	呉須 外面:草花文 内面:四方擧文
226	肥前系磁器 染付碗			(3.9)	外面:施釉 内面:施釉	素地:灰白N8/ 釉:水色 絵付釉:呉須	密	外面:草花文 内面:四方擧文
227	肥前系磁器 青磁染付碗	11.6	4.8	7.9	外面:施釉(高台畳付露胎) 内面:施釉	外面:オリーブ灰5GY7/1 素地:灰白N8/	密	内面:四方襷文, 二重圏線
228	肥前系 陶胎染付碗	11.4		(4.7)	外面:施釉 内面:施釉	釉:灰オリーブ7.5Y5/2 素地:灰10Y5/1	密	外面:圏線
229	肥前系 陶胎染付碗	10.6		(4.1)	外面:施釉(貫入) 内面:施釉(貫入)	素地:灰5Y6/1 釉:灰10Y6/1 絵付釉:呉須	密	外面:草花文, 二重圏線
230	瀬戸美農系 鉄釉灰釉掛分碗	9.8	4.4	5.5	外面:施釉(高台畳付露胎), 回転ナデ 内面:施釉(貫入)	釉:黒褐5YR2/2 釉:灰白10Y7/1 素地:にぶい黄橙10YR7/2	密	
231	瀬戸美農系 呉須絵碗	9.2		(4.2)	外面:回転ナデ, 施釉(貫入) 内面:回転ナデ, 施釉(貫入)	素地:にぶい黄褐10YR5/4 釉:灰白10YR7/1 絵付釉:呉須	密	
232	鉄絵陶器 碗	9.4		(4.7)	外面:回転ナデ, 施釉(貫入, 底部露胎) 内面:回転ナデ, 施釉(貫入)	素地:灰白10YR8/2 釉:灰白7.5Y7/1 絵付釉:灰オリーブ5Y4/2	密	外面:若松文
233	陶器 鉢	13.3		(4.0)	外面:回転ナデ, 施釉 内面:回転ナデ, 施釉	素地:にぶい黄橙10YR6/4 釉:透明	密	
234	備前焼 陶器 皿	9.0	5.9	1.4	外面:回転ナデ, 施釉(口縁部のみ) 内面:回転ナデ, 施釉	素地:にぶい赤褐2.5YR4/3	密	
235	須恵器 壺			(4.2)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:褐灰10YR5/1 内面:灰N6/	密	
236	土師質土器 釜	23.0		(4.5)	外面:指頭圧痕, 板ナデ, 接合痕 内面:ナデ, ヘラ削り	外面:にぶい赤褐5YR5/4 内面:にぶい赤褐5YR5/4	1～2mm以下の石英・長石を含む	
237	三巴文鳥衾瓦	直径 16.5	長さ (15.1)	厚さ 3.6	凸面:板ナデ 凹面:ナデ	凸面:灰N5/ 凹面:褐灰10YR6/1	密	いぶし瓦
238	梵字文軒丸瓦	直径 16.8		厚さ 2.8	瓦当裏面:不定方向のナデ	両面:浅黄橙7.5YR8/4	粗	須恵質
239	梵字文軒丸瓦			厚さ 2.6	瓦当裏面:ナデ	両面:にぶい橙7.5YR7/3	粗	須恵質
240	三巴文軒丸瓦	直径 14.4		厚さ 2.0	瓦当裏面:不定方向のナデ	両面:にぶい橙7.5YR7/4	密	土師質
241	三巴文軒丸瓦	直径 15.2		厚さ 2.5	瓦当裏面:ヨコナデ	両面:灰5Y6/1	粗	いぶし瓦
242	波状文軒平瓦		長さ (3.9)	厚さ 2.75	凹面:板ナデ 凸面:摩滅	凹面:灰白2.5Y8/2 凸面:灰白2.5Y8/2	やや粗	いぶし瓦(須恵質)
243	寛永通宝	直径 2.3		厚さ 0.1	外面: 内面:	外面: 内面:	銅	
244	瓦質土器 汽車	長さ 5.8	幅 2.6	厚さ 0.2～0.3	外面: 内面:	外面:黒10YR2/1 内面:灰白2.5Y8/1	密	
245	瓦質土器 鉢		17.0	(9.0)	外面:ナデ 内面:ハケ目, ナデ	外面:黄灰2.5Y4/1 内面:黄灰2.5Y4/1	密	外面:波状文
246	軒丸瓦		長さ (7.3)	厚さ 4.9	凸面:ナデ 凹面:ナデ	凸面:灰黄2.5Y7/2 凹面:灰黄2.5Y7/2	粗	須恵質
247	連珠文軒平瓦	長さ (18.0)	瓦当高 6.9	厚さ 2.8	凹面:布目, ナデ, 面取 凸面:板ナデ 瓦当裏面:ヨコナデ	凹面:灰白N4/ 凸面:暗灰N3/	粗	隅瓦, いぶし瓦(須恵質)
248	軒平瓦		長さ (8.9)	厚さ 2.6	凹面:ナデ 凸面:板ナデ	凹面:褐灰10YR6/1 凸面:褐灰10YR6/1	粗	いぶし瓦
249	三巴文軒丸瓦	直径 12.6	長さ (16.2)	厚さ 1.8	凸面:板ナデ 凹面:布目, 板ナデ, 面取 瓦当裏面:不定方向のナデ	凸面:黒N2/ 凹面:灰N4/	密	いぶし瓦
250	肥前系磁器 染付鉢		8.9	(3.3)	外面:施釉 内面:施釉	釉:透明 素地:灰白N8/	密	外面:圏線 内面:草花文
251	肥前系磁器 染付碗	11.0		(4.9)	外面:施釉 内面:施釉	釉:透明 素地:灰白N8/	密	外面:圏線 内面:圏線
252	肥前系磁器 染付仏飯器		(4.0)	(4.9)	外面:施釉 内面:施釉	釉:透明 素地:灰白N8/	密	外面:圏線
253	京信楽系陶器 灯明皿	11.2		(2.1)	外面:施釉(口縁部のみ, 貫入) 内面:施釉(貫入)	釉:灰白2.5Y8/2 素地:灰白2.5Y7/1	密	
254	土師質土器 火鉢		18.0	(7.3)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい褐7.5YR6/3 内面:にぶい褐7.5YR6/3	1～2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	

第6表　屋島寺出土遺物観察表⑤

第4章 まとめ

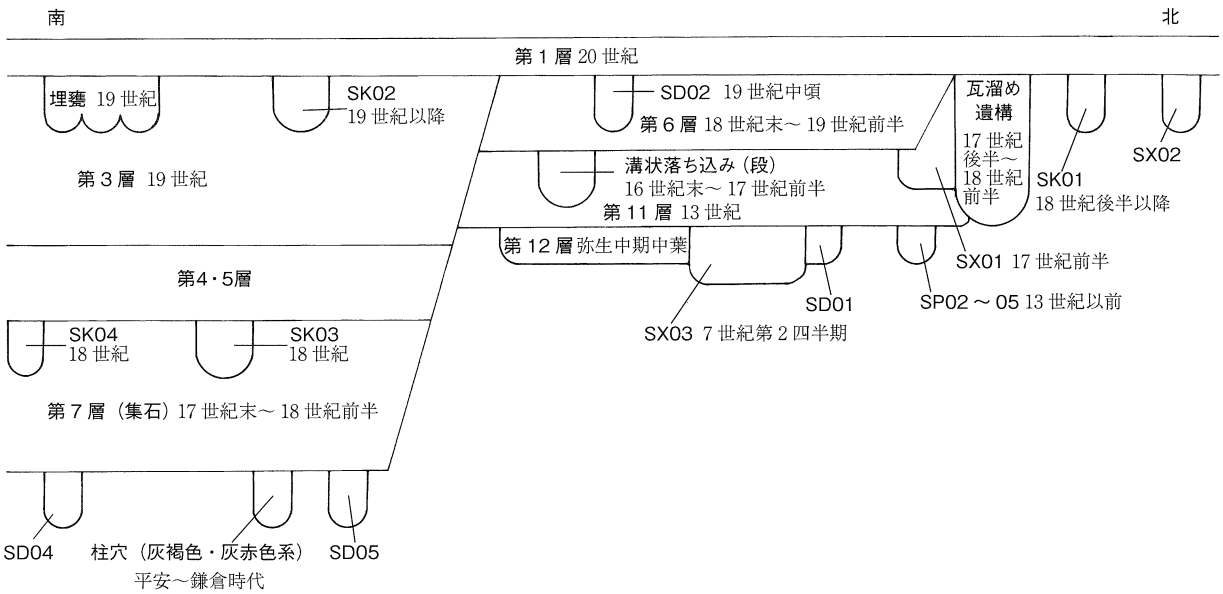
第1節 遺構および包含層（整地層）の変遷

第3章では各遺構および包含層について報告してきたので，次に調査区内での遺構および整地層の変遷を検討したい。ただし，出土遺物から年代が特定できる遺構・整地層は少なく，詳細な変遷を追うことは困難である。このため，大まかな年代観で捉えることになる。まず，年代が特定できる遺構や整地層を鍵として，これに各遺構と整地層の上下関係を絡めて検討していく。

出土遺物から年代が特定できる遺構は，SX03が7世紀第2四半期，溝状落ち込み（段）が16世紀末～17世紀前半，SK01が18世紀後半以降，SD02が19世紀中頃，埋甕が19世紀である。同様に整地層は，弥生土器包含層（第12層）が弥生時代中期，布目瓦包含層（第11層）が13世紀頃，いぶし瓦包含層（第6層）が18世紀末～19世紀前半の間，集石を含む第7層が17世紀末～18世紀前半である。次いで，層位の上下関係から類推できるものを列挙する。SD01はSX03に切られており，7世紀第2四半期以前となる。SD04・05は縄叩き痕をもつ布目瓦を含み，第7層より下位にあることから，平安～室町時代のものと考えられる。SK03は，第7層上面にあり，19世紀の第3層だけでなく，第5層にも覆われていることから，18世紀と考えられる。SK04も第7層上面にあり，SK03と同じ頃と想定される。SX01は，出土遺物から江戸時代と推測され，第6層より下位にあることから17～18世紀のもの，さらに瓦溜め遺構に切られていることから，17世紀前半の可能性がある。瓦溜め遺構は，出土遺物からは17世紀後半～18世紀前半と推定されるが，第6層との上下関係が不明であり，さらに下る可能性もある。SK02は埋甕と同じ第3層上面にあり，19世紀以降と考えられる。柱穴については，SP02～05が第11層より下位にあり13世紀以前のもので，報告で述べたとおり，埋土が黄色系のものが江戸時代以降，灰褐色や灰赤色系のものが平安～室町時代に属する可能性がある。SB01の柱穴は，灰赤色系の埋土をもつことから平安～室町時代の可能性がある。以上のことをまとめて，土層模式図にしたのが第44図である。これらを踏まえて，時代順に遺構および整地層の変遷を追っていく。

弥生時代中期中葉

北調査区中央部西半において，部分的に弥生時代中期中葉の遺物包含層（第12層）を確認した。斜面上から流れてきて2次堆積したものである。この時期の遺構は確認していないが，調査区付近に弥生の遺構があった可能性を指摘できる。



第44図 調査区土層模式図

飛鳥時代（７世紀第２四半期）

北調査区の竪穴状遺構 SX03 が，この時期唯一の遺構である。用途等は不明である。屋島には 667 年に築城された古代山城屋嶋城跡が存在し，当調査区も城内に含まれるが，SX03 とは僅かながら時期差が存在する。

平安～室町時代

北調査区全域に広がる布目瓦包含層（第 11 層）が 13 世紀頃のものであり，この時期に整地がなされた可能性がある。南調査区の緩斜面にある溝 SD04・05 は平安～鎌倉時代の間と推定されるが，用途等は明らかでない。柱穴の一部や SB01 も当該期に属する可能性がある。なお，遺構は存在しないが，第７層下部の集石からは平安時代の軒瓦が，瓦溜め遺構や表土からは中世の軒瓦が出土しており，これらの時期に堂宇の建築または改修が行なわれた可能性を指摘できる。

江戸時代 １期（17 世紀）

北調査区の溝状落ち込み（段）が該当し，出土した軒瓦から 16 世紀末～ 17 世紀前半と推定される。幅 3.4 m と広いことから，用途等は区画溝や通路とも想定されるが断定はできない。

江戸時代 ２期（17 世紀末～ 18 世紀前半）

南調査区の第７層が該当し，出土した陶磁器から 17 世紀末～ 18 世紀前半と推定される。第７層下部には捨石としての集石があり，緩斜面を平地にするための入念な整地層であることが分かる。ただし，完全には平地となっておらず，平地化は 19 世紀の整地を待つことになる。北調査区の瓦溜め遺構も当該期と考えられる。

江戸時代 ３期（18 世紀）

南調査区の SK03･04 が該当し，北調査区の SX01 は 17 ～ 18 世紀のものと推定される。SK03 は長さ 7.5 m，幅 1.15m，深さ 40cm の土坑で，最下層に厚さ約 10cm の炭層が均一にあること等から，宗教的儀礼に伴う土坑の可能性がある。SK04 も同じ様に炭層を含む土坑であるが，調査区南東隅で検出したのみで，全容は不明である。

江戸時代 ４期（19 世紀）

北調査区のいぶし瓦包含層（第６層）が 18 世紀末～ 19 世紀前半であり，これを一部覆う南調査区の第３層が上面の埋甕から 19 世紀と推定される。第３層の下にある第４・５層も近い時期と推定される。19 世紀に北および南調査区において，数度にわたる整地が断続的になされたと想定される。これらの整地により，調査区周辺は緩斜面から平地となっており，江戸時代末期の『讃岐國名勝圖會』挿絵（第 46 図）の状態になったものと考えられる。第３・６層上面において確認した埋甕と SD02 は 19 世紀のものであり，SK02 も 19 世紀のものと考えられる。

第２節　調査の結果

今回の調査は，屋島寺境内で行なわれた唯一の本格的な発掘調査であり，屋島寺のみならず様々な時代の遺構・遺物を確認するとともに，屋島寺の時期的変遷を推測できる資料を得ることができた点で評価できる。評価できる調査結果を箇条書きにすると，次のようになる。

① 弥生時代中期中葉の遺物が一定量存在することから，標高約 300 m の屋島南嶺山上に高地性集落が存在した可能性を指摘できる。旧詫間町（三豊市）の紫雲出遺跡や，旧庵治・牟礼町（高松市）のダンベラ遺跡や源氏ヶ峯遺跡も，屋島同様に瀬戸内海に突き出た半島の山上にあり，注目できる。

② SX03 から７世紀第２四半期の須恵器が出土したが，これは 667 年に築城された古代山城屋嶋城跡と近い時期のものである。ただし，僅かながら時期差が存在し，両者の関係は明白でない。

③ 平安時代後期の軒丸瓦や軒平瓦，さらに丸瓦や平瓦が出土したことにより，屋島南嶺における屋島寺の造寺活動が平安時代後期にまで遡れることが明らかになった。その後に実施された屋島基礎調査事業で，屋島寺の造寺活動はより明らかになっており，10 世紀前半頃には北嶺で仏堂が建立され，11 世紀には南嶺へ寺院を移しているようである。なお，北嶺から南嶺への移転は屋島寺の寺伝にも記されており，寺伝では空海が移転したとされ移転時期はずれるが，寺伝と符号している。

④　北調査区の布目瓦包含層（第 11 層）は 13 世紀の遺物を含み，13 世紀に極めて近い時期の整地層である。本堂が鎌倉時代末期（14 世紀前葉）建立と考えられており，本堂建立時期と近い。布目瓦包含層が本堂西側で隣接していることを考慮すると，この包含層が本堂建立に伴う整地層の可能性が高い。また，13 世紀代の遺物が比較的多く見られ，屋島寺の活発な活動がうかがえる。

⑤　主に南調査区で確認した整地層から，江戸時代において旧地形の斜面を平地にする造成工事が繰り返し行なわれていたことが明らかとなった。最初は，17 世紀末～ 18 世紀前半の第７層で，下部に捨石である集石が存在している。SK03･04 の存在から，しばらくの空白期間があったと想定され，次いで第4･5層の整地層がある。18 世紀末～ 19 世紀前半には北調査区でも第６層（いぶし瓦包含層）の整地層があり，次いで 19 世紀の第３層がある。この造成工事は，屋島寺境内の拡張工事であり，屋島寺の経済的発展の現れと見ることが可能であろう。

⑥　江戸時代に属する遺構から屋島寺の活動の一端をうかがい知ることができる。まず 16 世紀末～ 17 世紀前半の溝状落ち込み（段）は，本堂軒先の延長上にありその関係が注目されるが，区画溝や通路とも考えられる。18 世紀の SK03・04 は宗教的儀礼に伴う可能性があり，屋島寺の宗教活動の一端を示している。19 世紀の埋甕３基は，この時期境内が一時的だが墓地として利用されていたことを表している。また，17 世紀後半～ 18 世紀前半の瓦溜め遺構も，年代的に開きがあり更なる検証を要するが，江戸時代末期に描かれ最近まで残っていた築地塀に沿って掘削されており注目できる。築地塀に沿っていることから，塀からの雨落ち水を流す暗渠排水の可能性もあり，この場合は SX01 と同一の遺構となる可能性が出てくるが，現時点では断定できない。

⑦　調査区の旧地形は，北東から南西に傾斜する斜面であり，後述する本堂北東における試掘調査では西から東への傾斜が確認されている。これらのことから，地形図から読み取れるとおり，本堂は北から南にのびる尾根を削平して建てられたと想定される。

第３節　屋島寺の変遷

屋島寺は，四国霊場第八十四番札所として有名であり，南面山千光院と号す真言宗御室派に属する名刹である。今回の調査結果を踏まえながら，屋島寺の変遷を検討してみる。最近では，山元敏裕氏により「北嶺（千間堂）から南嶺（屋島寺）への変遷について」(山元 2003) で試みられているが，今回報告する本調査の内容が未整理だったため，本堂東側で判明した事実について触れることができなかった。本稿では，その欠を補いたい。

【屋島寺の創建と伝承】

屋島寺の創建に関わる伝承は，江戸時代の文書に散見される。もっとも古いのは慶長 16 年（1611）の『屋嶋寺龍嚴勸進帳』であり，次いで承応２年（1653）の澄禅『四国遍路日記』，弘化４年（1847）の『金毘羅参詣名所圖會』，嘉永７年（1854）に著されたが屋島寺の伝承部分は治安元年（1021）の記録を基にしたという『讃岐國名勝圖會』があり，その内容を抜粋･集約して一覧にしたのが第７表である。細部では異なるが，大筋では，唐僧鑑真が来朝の時に屋島を霊地と見て山に登って伽藍を建てるとともに普賢菩薩を安置し，弘法大師が千光院を建てて千手観音を作ったとされている。今でも，屋島を北嶺と南嶺に分ける西側の谷は，鑑真が登った「鑑真谷」として地名が残されている。ここで注目したいのは，現在南嶺にある屋島寺がかつては北嶺にあったという伝承である。『讃岐國名勝圖會』では弘法大師が北嶺に千光院を建てたと伝え，『四国遍路日記』では鑑真が北嶺に寺を建て 42 坊を数えるまでに栄えたが，その後衰退したので弘法大師が人里に近い南嶺に千光院を建てたとされている。つまり伝承では，屋島寺は創建当初は北嶺にあったというのである。

それでは，南嶺における屋島寺が建立された上限を，文化財サイドから見てみたい。これまで南嶺で実施された発掘調査では，10 ～ 11 世紀の軒瓦が１点のみ存在するが，一定量出土するのは 11 世紀以降の軒瓦である。土器等は，一部に９世紀のものが存在するが，11 世紀後半以降のものが比較的多く見られる。一方，屋島寺に残された文化財では，本堂は鎌倉末期の建造であり，本尊の木造千手観音坐像は 10 世紀の作と推定されている。軒瓦や仏像が再利用や移動されることを考慮すると，遺物が量的に安定する 11 世紀後半以降に屋島寺が南嶺に建立された上限である可能性を指摘できる。

書名 刊行年	屋嶋寺龍厳勸進帳 慶長16年(1611)	四国遍路日記 承応2年(1653)	金毘羅参詣名所圖會 弘化4年(1847)	讃岐國名勝圖會 嘉永7年(1854)
年代	孝謙天皇在位の天平年中(749～758年)		天平勝宝6年(754)	天平宝字6年(762)10月
内容	鑑真和尚が来朝の時，山頂に登った。その時，老翁が現れ，ここは七仏説法の場であり，天仙が集まる場であると言って消えた。そこで，和尚は一宇の伽藍を建て，普賢菩薩像を安置した。	鑑真和尚が来朝の時，屋島に異気を感じて登ったところ，寺院を建立すべき霊地として**北峰**に寺を建てて南面山と号した。その後，鑑真は南都に赴いた。	鑑真和尚が来朝の時，船中において屋島から瑞光がたつのを見て山に登った。その時，一人の老翁が出現し，この山で仏法を興隆せよと言って姿を消した。鑑真は喜んで，鉢を山に残して印とし，都に上った。	鑑真和尚が来朝の時，船中より屋島を霊地と見て登り，五十七日ののち作礼して去り，仏舎利三粒・菩提子の念珠等を寺に送った。
年代				天平年中(729～767年)
内容		寺には鑑真の衣鉢が残されたが，鉢は空に昇って沖を漕行する舟に斎料を請うたので，舟人は驚いて米穀を入れると鉢は寺へ帰っていった。このため崇拝を集め，屋島は繁盛して42坊を構えるまでになった。しかし，ある時，舟人が魚類を鉢に入れると，鉢は壊れて舟も沈んでしまった。そうして，寺も衰退してしまったが，その時の本尊は釈迦像で今も残されている。	後に鑑真は天皇より屋島を授かったので，弟子空鉢恵海律師に開基させ，普賢菩薩の像などを置いた。この時，二聖二天十羅刹女が出現して，種々の霊異をあらわし，五十七日を経て去った。招提寺を創始し，仏舎利三粒と菩提樹の数珠を送った。	座禅得道の上人が**北峰**にいて，一鉢を飛ばして南海往来の船に食を求めていたが，後に登仙した。
年代	弘仁元年(810)			弘仁年中(810～824年)
内容	弘法大師が千光院を建て，自ら千手御本尊を彫り，さらに両部大曼荼羅堂や一切経蔵，多宝塔を造った。	弘法大師が寺を再興する時に，**北峰**は人里から遠いので，**南峰**に嵯峨天皇の勅願寺として建てた。南面山屋島寺千光院と号し，千手観音を作って本堂に安置した。	弘法大師が空鉢に入門し戒を受けた。屋島に来て，千手千眼の大悲の像を作って安置し，寺を千光院と称した。	弘法大師が**北峰**に千光院を建立して，蓑山明神を鎮護の神とした。
年代				天暦年中(947～957年)
内容				明達師が来て，四天王堂を建立してその像を安置し，一夏九旬の間五大明法の秘法を勧行する。
備考				以上のことは，屋島寺住職性純が，治安元年(1021)3月9日に記録したものであると注記されている。

出典：　屋嶋寺龍厳勸進帳　　香川県1972『香川叢書』第一巻　㈱名著出版
　　四国遍路日記　　宮崎忍勝解説校注1977『澄禅「四国遍路日記」』㈱大東出版社
　　金毘羅参詣名所図会　　松原秀明編集1981『日本名所風俗図会』14四国の巻　㈱角川書店
　　讃岐国名勝図会　　松原秀明編集1981『日本名所風俗図会』14四国の巻　㈱角川書店

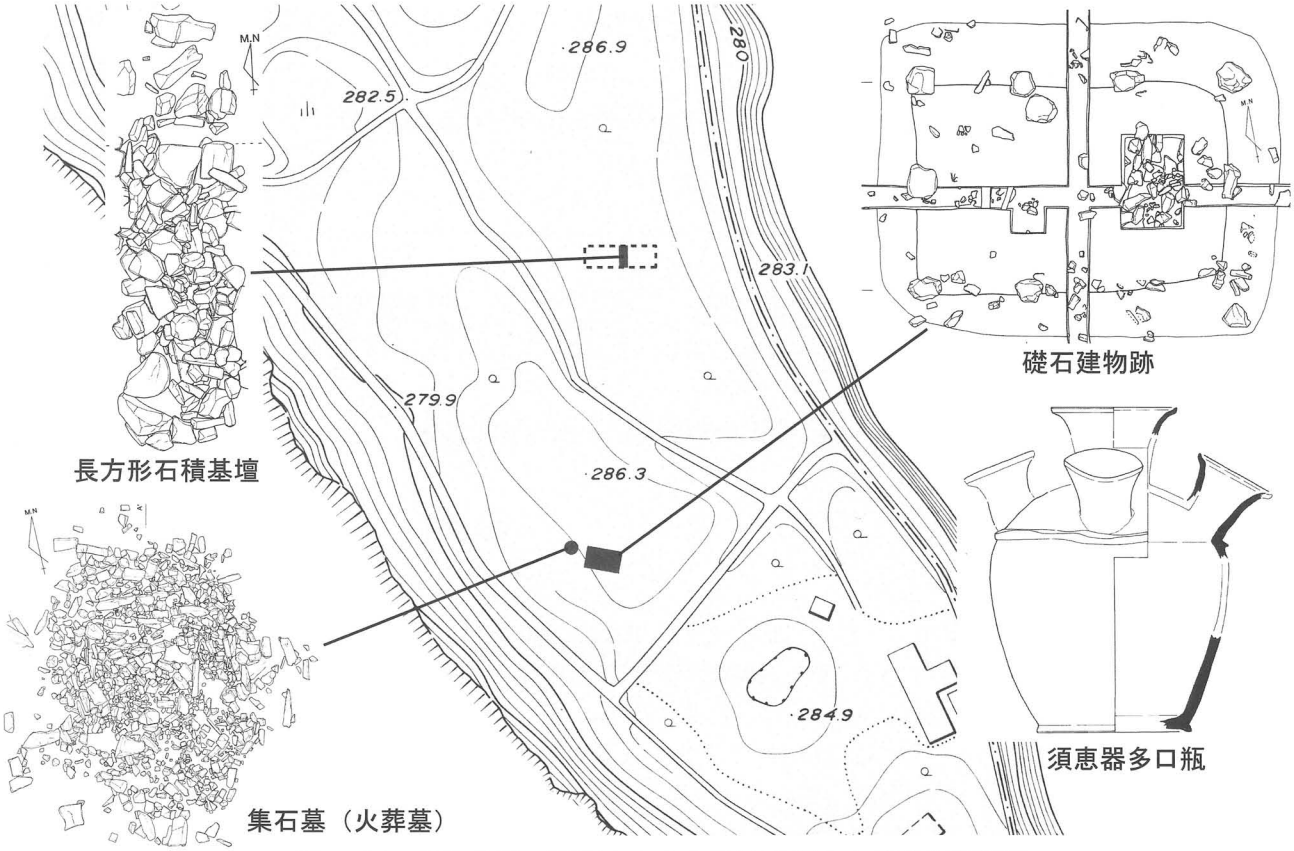
第７表　屋島寺創建に関わる伝説一覧表

【屋島北嶺の調査】

北嶺には「千間堂跡」または「千軒堂跡」という地名が現在も残されており，かつて寺院が存在したことを伺わせる。江戸時代では，高松藩の需員である奥村景武が永享２年（1745）に著した『屋島記』（『讃岐國名勝圖會』に所収）によれば，北嶺には「かつて坊舎を築くこと一千，遺跡がいまだ残っている。」と紹介している。『四国遍路日記』に著されている北嶺にあった四十二坊も，実際の数というより多くの坊があったことを示していると推測される。このことより，現在の地名は「千間堂跡」が一般的だが，本来は「千軒堂跡」が適当であろう。

さて，この北嶺において平成10～12年度に実施された屋島基礎調査事業によって，寺院跡の存在が明らかになった。確認された遺構は，土壇をもつ礎石建物跡，集石墓，長方形石積基壇，掘立柱建物跡２棟などである。礎石建物跡は，東西8.5ｍ・南北6.6ｍ・高さ約40cmの土壇の上に，東西３間×南北２間に礎石を並べたものであり，土壇中から仏具である須恵器多口瓶が４個体分出土したことから，仏堂跡と推測されている。もっとも新しい多口瓶から10世紀前半の年代が考えられる。また，1/2にまで復元できる平瓦が出土していることから，熨斗瓦を使用していたと考えられる。長方形石積基壇は，礎石建物跡から北へ約90m離れたところにある長さ10ｍ・幅２ｍ・高さ40cm以上の石積で，寺域北限を示す可能性が推測されており，10世紀の遺物が出土している。掘立柱建物跡は，礎石建物跡の北隣接地で確認されたもので，東西２間×南北１間と東西１間×南北１間以上のものである。出土遺物はないが，礎石建物跡と隣接して方位をほぼ同じくすることから，同時並存していた可能性が高い。集石墓は，礎石建物跡の西に隣接してあり，南北７ｍ・東西８ｍの範囲に安山岩板石の集石が認められ，中央には約２ｍ四方の区画があり，区画の中には土坑が存在する。出土遺物から12世紀末～13世紀初頭の年代が考えられ，礎石建物跡より新しい。類例より火葬墓の可能性が推測されている。なお，礎石建物跡周辺で出土する遺物は，９世紀後半の緑釉陶器なども認められるが，10～11世紀のものが圧倒的に多く，それ以降は減少する傾向にある。

以上のことから，北嶺における寺院活動を推測すると，その始まりは９世紀後半に遡る可能性があり，本格的に整備されたのは仏堂（礎石建物跡）を建立した10世紀前半であり，仏堂を中心に掘立柱建物が建てられていったと考えられる。トレンチ調査であることを考慮すると，掘立柱建物跡の数は確実にもっと増えるであろう。その盛期は，出土遺物より10～11世紀である。そして，その姿は江戸時代の文献に著された「かつて坊舎を築くこと一千」「四十二坊」に近いものであったであろう。また，注意すべき点は南嶺でも９世紀代の遺物がある程度出土していることである。このことは，９世紀には南嶺にも寺院が存在した可能性を示唆するが，仏具等はいまだ出土していないため不明である。南嶺では10～11世紀代の遺物が乏しいことを考えると，10世紀前半の北嶺の仏堂建立により寺院機能が北嶺に集約された可能性があるが，今後の調査成果によりたい。



第45図　屋島北嶺で確認された寺院跡遺構および遺物実測図

【屋島北嶺から南嶺へ】

屋島北嶺で確認できる遺物は，10～11世紀がもっとも多く，11世紀代を境に減少する。代わって南嶺ではこの時期から遺物量が増加することから，11世紀末から12世紀初頭に北嶺から南嶺に寺院が移ったと考えられ，その理由として，この頃から四国霊場八十八箇所巡りが始まり，参拝に不便な北嶺（修験の場）から平野に近い南嶺に移した結果と位置づけられている(山元2003)。『四国遍路日記』でも「北峰の寺が廃れたので人里近い南峰へ移した」とほぼ同じ理由を挙げている。四国霊場八十八箇所巡りの開始時期についてはまだまだ議論すべきであろうが，修験の場から世俗に近い場所へ移動したという考えは支持できる。また，12世紀は讃岐国内において山岳寺院が再び造営または再整備される時期でもあり，それとの関連性も指摘されている(渡部2006)。屋島北嶺から南嶺への寺院移動は，そういった状況の中で選択されたものと考えられる。ただし，12世紀末～13世紀初頭の集石墓が北嶺に築かれていることから，南嶺に寺院が移ったとしても，墓地としてなど別の目的で利用されていたと考えられる。

【古代末から中世の屋島寺－盛衰の中で－】

11世紀末から12世紀初頭に北嶺から南嶺に移るとともに，屋島寺は造寺活動を盛んに行なっていったと推測される。それは，本調査（宝物館）において10～11世紀の軒平瓦や12世紀の軒丸瓦が出土し，屋島寺東側にあった池埋立地のトレンチ調査においても11世紀の軒丸瓦がまとまって出土していることや，讃岐国住人蓮阿弥陀仏の勧進によって鋳造された貞応2年（1223）銘の梵鐘（国指定重要文化財）からも知ることができる。

しかしながら，その後に屋島寺は火災にあったようである。それは，先ほどの池埋立地トレンチ調査の第6層から，火を受けた軒丸瓦や木材そして焼土や炭が出土したことから推測することができる。一緒に出土した土器から，これら火災の廃材等を池に投棄したのは13世紀中頃以降とされており，その後に鎌倉時代末期（14世紀前葉）の本堂が建てられたとされている(山元2003)。本調査においても，本堂西隣接地に広がる布目瓦包含層（第11層）が13世紀頃の整地層であることが確認されており，13世紀中頃に本堂が火災を受けて間もなく再建された可能性は高いと考えられる。

14世紀以降の屋島寺については，明徳2年（1391）の『大和國西大寺諸國末寺帳』に「屋嶋普賢寺」とあり，永享8年（1436）の『大和國西大寺坊々寄宿諸末寺帳』に「讃岐國 屋嶋寺」とあることから，14世紀末から15世紀前半においては，真言律宗の寺となっていたことが分かる。また，14世紀中頃～末と推測される連珠文軒平瓦が本堂周辺で4点も出土または表採されていることや，本堂北側にある土塀が15世紀初頭に築造されていること（平成8年度基礎調査）から，14世紀後半～15世紀前半においても造寺活動を盛んに行なっていたと考えられる。

このように，再び屋島寺は勢いを取り戻したようであるが，大永4年（1524）に先の梵鐘が善通寺市金倉寺に一時的に移されていること(角川1985)や，『屋嶋寺龍厳勧進帳』に記述された荒廃ぶりを信頼するなら，16世紀頃には屋島寺は衰退していたと推測される。発掘調査においても15～16世紀の遺物は少なく，古文書と一致する。

【近世の屋島寺－再興と発展－】

江戸時代になると屋島寺は勢いを盛り返す。それは先の龍厳の勧進活動等によるところが大きいと思われる。寛永11年（1634）書写になる『讃岐國中寺社領高書上寫』によると讃岐に封じられた生駒氏から寺領43石3斗余の加増をうけ，年代は不明であるが屋島寺所蔵の『生駒一正寄進状』によると米・人・資材等の提供を受けている。また天保4年（1833）高松藩士香西義賢の書写になる『寺社記』によると松平氏からも千体仏堂の施入，54石3斗余の安堵等を受けている。江戸時代前期の17世紀頃に屋島寺の復興が急速に進んだことを伺うことができる。

今回の調査結果では，調査区南側で確認された集石をはじめとする整地層があり，年代的には集石下部から出土した陶器から17世紀末～18世紀前半とみてよく，この地業が文献史料から読み取れる17世紀頃の復興と関係があるのかもしれない。そして江戸時代後期の『讃岐國名勝圖會』『金毘羅参詣名所圖會』によれば，ほぼ現在の屋島寺に近い配置になっている。圖會には調査該当地区に，南北

に長い「茶堂」と呼ばれる建物が描かれているが，残念ながら今回の調査ではそれに伴う柱穴等は検出できなかった。

第46図　『讃岐國名勝圖會』（黒枠の範囲が調査地）

第4節　屋島における寺院造営の起因

屋島に古代の山岳寺院が造営された起因について，少し考えてみたい。従来，平安時代の山岳寺院については，天台・真言宗の平安新仏教が隆盛させたという考えが一般的であった。これに対して，最近は平安以前の飛鳥・奈良時代から山岳寺院が存在することや，「僧尼令」に定める山居の許可手続きの存在から，山岳寺院が平安新仏教に限らないことが指摘されている（上原2000・2002）。さらに，山岳寺院を平地寺院の修業の場としてとらえ，両寺院のネットワークが形成されており，奈良時代になると東大寺をはじめ各国分寺も山岳寺院を抱えネットワークを形成し始めるとされている。山岳寺院との距離は20km近くにもなるという。それでは，屋島寺の場合はどうなのであろうか。

屋島寺は，高松平野北東部にあたり，海に突き出た島状の山の上に立地する。一方，讃岐国分寺は高松平野西部にあたり，高松平野とは小丘陵によって隔離された盆地状の小平野に立地する。この小平野は，西では綾北平野にも続いており，綾北平野には讃岐国府が所在していた。古代の行政区画では，屋島寺は高松平野東半分にあたる山田郡に属し，国分寺は国府と同じ阿野郡に属する。両郡の間には高松平野西半分を占めていた香川郡が所在する。屋島寺と国分寺との直線距離は約16kmを測る。

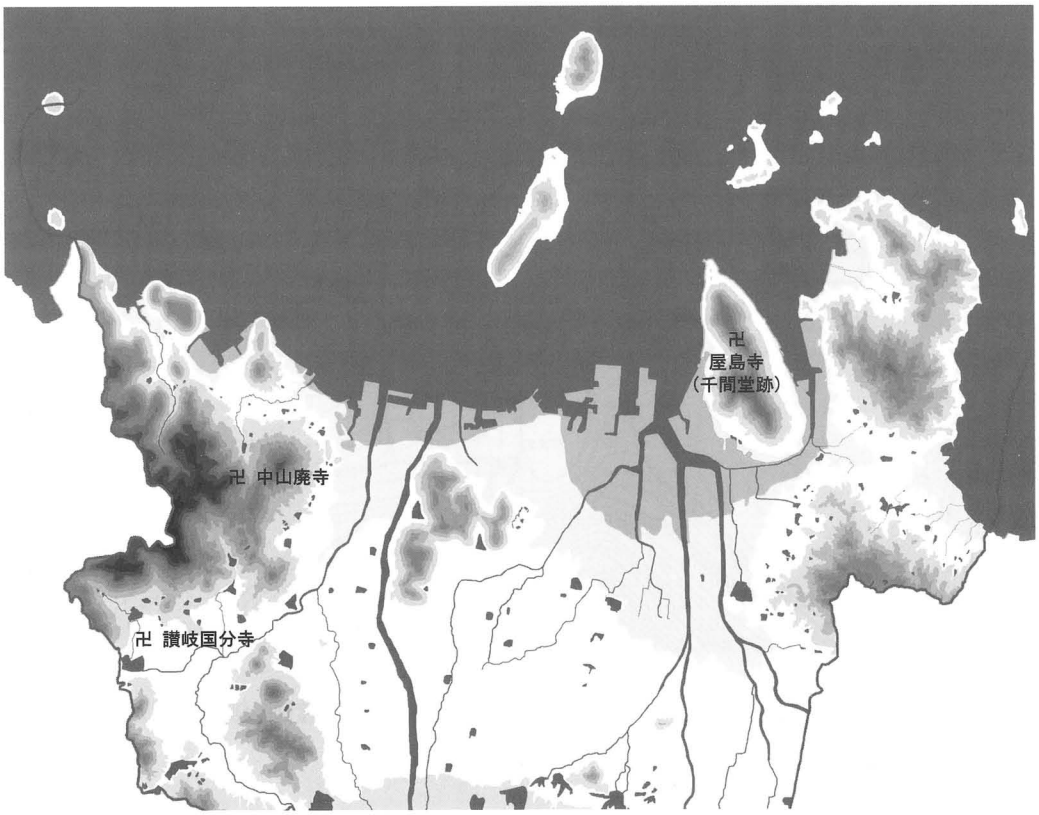
さて，古代において屋島寺と国分寺を直接つなぐ考古資料や文献資料は，現在のところ確認されていない。しかしながら，興味深い資料として，明徳２年（1391）の『大和國西大寺諸國末寺帳』に，国分寺，屋島寺そして鷲峰寺の３ヶ寺のみが讃岐国における西大寺末寺として記されていることである。永享８年（1436）の『大和國西大寺坊々寄宿諸末寺帳』でも同様である。中世において，各国の国分寺が西大寺を総本山とする真言律宗に組み込まれていったことは知られており，讃岐国分寺も例外ではなかった。その国分寺と連動したのが，讃岐国では屋島寺と，国分寺と近い距離にある鷲峰寺だけという点が重要であり，これら２寺は14～15世紀において国分寺と密接な関係にあったことが

うかがえる。この関係が古代にまで遡るかどうかは，今後の資料の増加が待たれる。

また，屋島寺を考える上で，屋島寺がある山田郡の特異性も注意すべきであろう。山田郡は，天平宝字７年（763）の『山田郡司牒案』によれば，大領に綾公人足，少領に凡直，主政に佐伯，復擬主政として秦公大成が記されており，大領から主政までの要職を郡外の有力氏族が占め，郡内で最も名前が頻出する秦公が復擬主政になっているに過ぎない。遡って古墳時代においても，高松市茶臼山古墳や久本古墳などのように地域色が薄く，畿内の影響が色濃く表れており，天智天皇６年（667）の屋嶋城築城に繋がるものと考えられる。このように山田郡は，古墳時代から畿内の影響力が強く，奈良時代になっても讃岐の他郡の有力氏族に支配が任されている状態であった。このことは，国分寺や国府がある阿野郡を支配し，讃岐国内で最も有力氏族と考えられている綾公が，大領として山田郡の実権を握っていたと考えることは容易であり，屋島寺の創建にあたっても関与していた可能性が指摘できる。

さらに，屋島北嶺にある礎石建物跡の基壇中から出土した須恵器多口瓶４点の存在も重要である。調査を担当した山元氏によると，類例として多口瓶が各地の有力寺院跡から出土しており，県内では丸亀市法勲寺から出土しているのみであるとされている（山元 2003）。県内の類例は，その後の調査や整理により，まんのう町中寺廃寺で灰釉の多口瓶が出土するとともに，讃岐国分寺跡で須恵器のものが出土していることが判明している。それでも，有力寺院跡から出土していることに代わりはなく，綾氏の影響が大きい讃岐国分寺跡や法勲寺から同じ須恵器の多口瓶が出土している点は，注目できる。

以上のように，屋島寺が讃岐国分寺の山岳寺院として創建された可能性を述べてきたが，現段階では根拠は少なく仮説に留まっている。なお，渡部氏により，讃岐国分寺から約 4.5km離れた中山廃寺は，出土する軒瓦（10 世紀前半）から国分寺に関係する山岳寺院の可能性が指摘されており注目できる（渡部 2006）。10 世紀代においては，平地の寺院である高松市拝師廃寺やさぬき市長尾寺においても，国分寺と同文（同笵？）の瓦が出土しており，将来的には平安時代における讃岐国分寺を核とした寺院のネットワークの存在も想定できるかもしれない。今後の資料の増加によって，屋島寺創建の歴史的事実が明らかになることを期待するものである。

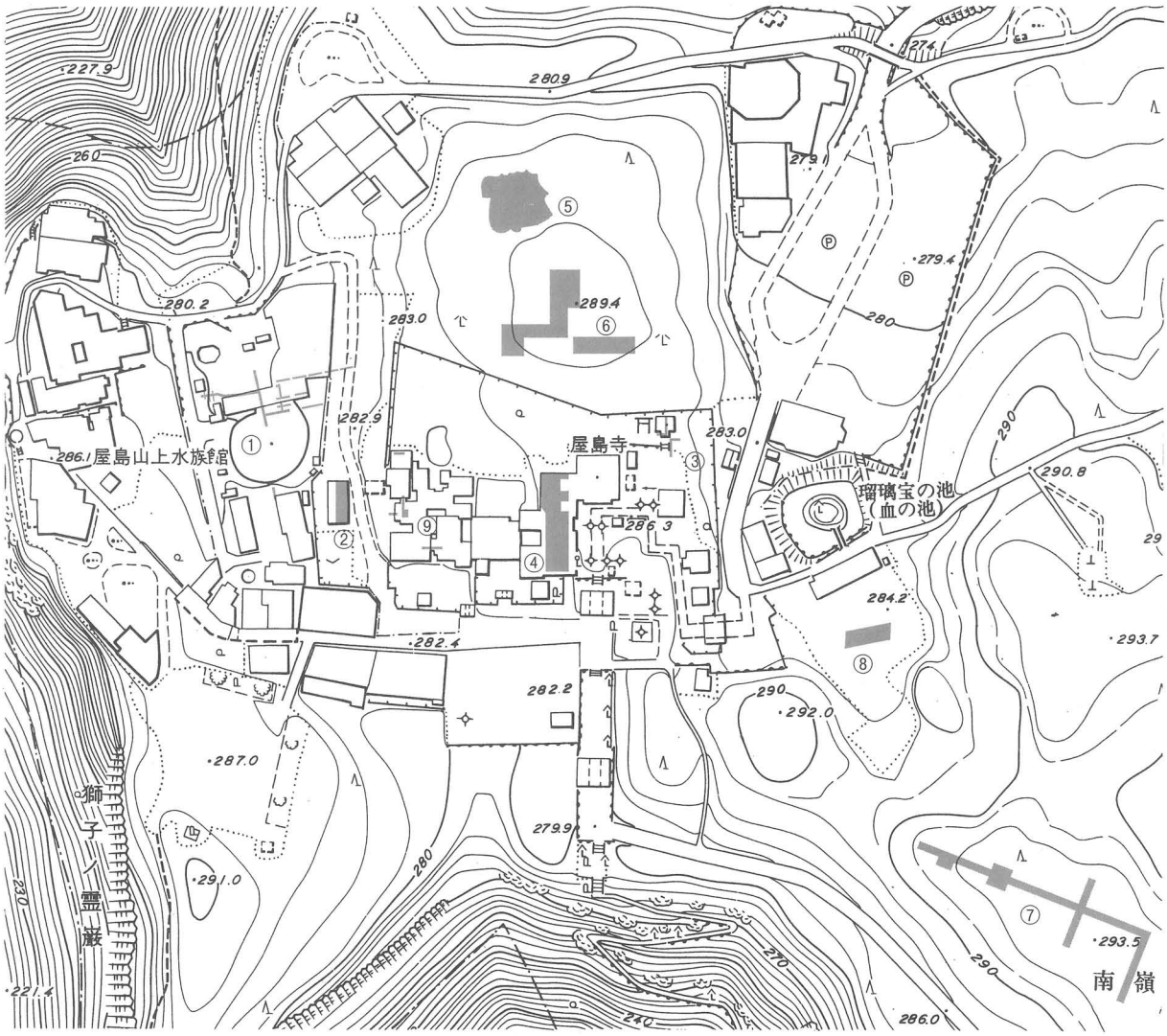


第 47 図　屋島寺・讃岐国分寺・中山廃寺の位置図

第５章 屋島寺周辺の調査

第１節　調査の一覧

屋島寺周辺においては，高松市教委や香川県教委によって，時々調査が実施されている。それは，屋島全体が史跡名勝天然記念物に指定されているだけでなく，屋嶋城跡や屋島寺といった重要な遺跡が屋島寺周辺に所在するからである。これらの調査は，今回報告した面的な発掘調査を除いて，すべて試掘調査や工事立会といった小規模なものである。そのため，調査内容が十分に周知できていない場合がある。本章では，市教委が実施した調査のうち，未報告のものを報告する。屋島寺周辺で市教委が実施した調査は，第48図のとおりである（屋嶋城跡の確認を目的とした調査は除く）。このうち，⑤～⑧は史跡天然記念物屋島基礎調査事業で実施したものであり，すでに報告済みである（山元 2003）。また④は今回の報告であり，残り①～③と⑨について報告する。



第48図　屋島寺周辺における高松市教委の調査地位置図（縮尺 1/3,000）

① 昭和42年度調査（水族館）　② 平成２年度調査（倉庫）　③ 平成２年度調査（鎮守社）
④ 平成２年度調査（宝物館）　⑤ 平成７年度調査（屋島基礎）　⑥ 平成８年度調査（屋島基礎）
⑦ 平成９年度調査（屋島基礎）⑧ 平成13年度調査（屋島基礎）⑨ 平成10年度調査（庫裏）

第２節　屋島水族館建設工事に伴う試掘調査

昭和 42 年度，屋島水族館建設に伴う試掘調査が実施された。当時は，本市に文化財専門員が不在であったことから，高松市文化財保護委員であった大西正男氏・小竹一郎氏・細溪福太郎氏が主体となり，香川大学および香川高校（現高松南高校）学生の協力を得て調査が行われた。調査期間は昭和 43 年１月 20 日から３月 31 日までで，その間の土日を利用した延べ 12 日が費やされた。調査は，屋嶋城跡の遺構確認を主眼とし，水族館予定地の試掘調査と，屋島寺周辺に残る土垣と浦生の石塁に対する分布調査であった。試掘調査では計 14 本（図面上，本文では 15 本，第 49 図）のトレンチを掘削したが，遺構は確認されず，石鏃と布目瓦片などが出土したに過ぎない。しかしながら，弥生時代と古代の可能性がある遺物が出土したことは，当時としては屋島山上の遺跡を考える上で重要であった。分布調査においては，土垣と石塁の平面図が作成された。

その後，調査終了すぐの５月に報告原稿がまとめられたが公表されることはなく，昭和 56 年の『屋島城跡』で簡単に触れられたに過ぎない（藤井 1981）。そこで，この報告原稿を今回掲載することにより，調査内容を公表したい。なお，出土遺物の年代比定や「土垣の状況」「結論」において明らかな誤りが認められるが，ここでは修正せず原文のまま掲載している。また，手書きの原稿が２部あり，１部は下書きで，もう１部は清書したものと推測される。ただし，清書したものは，なぜか結論が題名だけで内容が記されていないことから，今回の報告にあたり文章の大部分は清書したものを使用したが，結論は下書きのものを使用した。

屋島山上発掘調査報告

(1) 発掘調査の動機および目的

高松市屋島西町、浦生の櫓内に残存する屋島古城跡は、天智天皇６年（西暦 667 年）倭国高安城、対馬国金田城とともに、外敵に備えて築城された大規模な朝鮮式山城の史跡として昭和９年 11 月 10 日国の指定をうけている。

朝鮮式山城はその構造が山頂のみに止まるにしても（第１式という。）、または谷を包擁して石壘・石垣が設けられたにしても（第２式という。）、城塞としての機能を発揮するためには、必ずや山頂を中心として築城されたであろうことは、高所からは戦い易く、低所からは戦い難いという古代から近代に至る接近戦の鉄則からして、想像に難くはない。

屋島城も浦生の谷間にある櫓内に存在する以上は、北嶺または南嶺、または双方ともに含まれて、その機能を発揮した朝鮮第２式山城であったと考えられてきた。

しかし、山上南嶺には早くから鑑眞の開山という所伝をもつ屋島寺が開かれており、その周辺や北嶺は古城跡を思わせる数々の伝説に彩られながらも、一つには源平古戦場でもあった関係からか、城跡を実証する遺物・遺構が乏しいせいか山城としての輪郭がうすれ、果ては屋島山上を山城外におこうといった説まで飛び出す始末であった。

一方観光ブームにより山上の観光開発はすすみ既に北嶺の千間堂という伝説地も、南嶺の屋島寺東方も、それぞれ遊園地、休憩所、駐車場のために開発利用されて、いまや調査不能の状態になった。

加えて昭和 41 年５月南嶺山上は自然公園法による再開発計画の対象となり、宿舎区、園地区、墓地区などに区分し、これらを結ぶ道路の新設が計画され、厚生省告示第 262 号として告示された。

かくて南嶺山上も、その調査を待つことなくついに破壊されつくすのではないかという危ぐを生むに至った。

高松市教育委員会は、これをおそれて、すみやかなる調査の必要を痛感し、南嶺屋島寺西方の田畠を中心とする地域における「未開発文化財の基礎的調査、および屋島城跡の埋蔵文化財の発掘調査」実施を決定、昭和 42 年 10 月６日、文化財保護法に基づき、史跡・天然記念物の現状変更の許可申請を行ない、同年 12 月 22 日、その許可を得ると同時に高松市文化財保護委員会に調査実施を委嘱した。

(2) 調査地の位置および附近概況

屋島は高松市の東部に位置する標高 292.1 メートルの南嶺と、281.8 メートルの北嶺が連なった南北５キロ、東西２キロメートルのいわゆるメサ型の代表的な山である。

花崗岩の基盤上は、讃岐式安山岩といわれている古銅輝石安山岩の層が重なっている熔岩台地で山頂は平坦、頂上周囲の大部分が断崖絶壁となり、僅かに南北両嶺の連なる中央西部浦生に至る谷間が比較的ゆるい傾斜面をなしていて、今もここに屋島城の城壁であったと思われる石壘、石垣の一部が残っている。この浦生の谷間をのぼれば「弘法谷」となり、ついで南嶺、屋島寺東部（現駐車場）に至る。

なお水を追ってさかのぼれば、ルリ宝池（血の池）からさらに南の小ため池に至る。

寺伝によればルリ宝池は、屋島寺開山の際に本堂の辰巳（東南方）にルリ宝を埋めて築かれたとあり、南部の小ため池と一水系をなしているが、湧水は何れにもない。

調査予定地は南嶺屋島寺の西方約 150 メートルの位置にある水田、畠および荒地で、この最南端に大池があり、その西約 30 メートル離れて井戸が掘られている。

予定地の大部分は約 50 センチを掘れば湧水を得ることが可能であり、これら寺西の水は現在も少量ながら小溝を流れ、水道を通じて鑑蔵ヶ谷に至り、急坂を下って浦生の畠をうるおしている。この外水については、北嶺長崎道にそって「比丘泉」。東大門の側（甚五郎ホテル附近）に「出水」。旧利剣寺（現在仁王門西）の下に「大泉」。その他にも水不足に備えた井戸が数ヶ所あるが、何れも寺西の水系や、ルリ宝池の水系とは関係がない。

発掘調査予定地の西方、獅子の霊巌の存する断崖を下に約 50 メートル下れば、“物見台”の遺構とも思われる一辺 1.5 メートルの集石が認められ、ここからは西方海上一帯が望見せられる。北嶺にも西方に面してこの種のもの二、東西にも構築のあとは明らかではないが二あったと伝えられている。

いずれも“魚見台”といい伝えられているが、実際に魚群の発見にも役立つが、古代の望楼ともみられる。

南嶺と北嶺の中間やや北嶺よりに“櫓が丘”と伝えられる表面平かな岩台があり、ここからは島の東西両面が一度に展望される。周囲の岩相からみて自然に形成されたとも思えず、浦生の石壘、石垣所在地を“櫓の内”と伝えるのに呼応して屋島城の櫓の遺構と伝えられている。

また北嶺千間堂の池を構築した折に、この地下２メートル下から炭が出たという。(馬場安一氏談)

ここは古く寺院があったとも“のろし台”であったとも伝わっており、一帯に密生する松樹もこのあたりには殆んどないし、その北約 150 メートルの地点、松樹のなかに現に径 25 メートル位の円形の濕地があり、これまた“のろし台”との伝説をもっている。

南嶺屋島寺東に東大門跡がある。寺院の遺構であったか、屋島城に属するものの遺構かは不明である。

東大門跡から東方山下の安徳神社に通ずる急な道も、いまは山腹の崩壊防止施設のためとだえてしまった。

又屋島寺正面仁王門の外東西両面に自然石とみられる岩石を使用した野面積（乱積）の石壁があり、中世以降修復の跡が認められるが奈良朝時代以前のものであろうか、又仁王門外の寺院の基壇ようの階段は平安初期以前の様式であるが、その築造年代はわからない。

次に調査予定地を含む屋島寺周辺における土垣の存在であるが、表面調査によれば、寺の北側約 75 メートルに高さ約 50 ～ 70 センチの土垣が東西に連なり、その基底には石を敷いた形跡も認められる。一面の樹根に妨げられて土垣の識別の困難なところもあるが、この土垣は西にのび鑑蔵ヶ谷で一度切れ、再び霊巌の各茶店の裏の松並木道にそい約 30 ～ 50 センチの高さで南にのびて寺の正面から霊巌に通ずる道路に達する。一見これで切れたようであるが、この道路の南にそって東に走り、旧利剣寺院内に達し、ついで仁王門内に至ったごとくである。(第１土垣と称す。)

なお寺の北側において第１土垣から南に約 15 メートル離れた竹藪の中に第１土垣にほぼ平行して高さ約２メートルの土垣が東西に走っている。

これは、西端から直角に南走し、寺に近づいて切れていて、かねさし形をなしている。

この土垣は、外側は低く、内側はやや高く殆んど寺の境内の密生する竹林の中にある。(第２土垣と称する。)

屋島山上における地層は、地域によって異なるであろうが、ドライブウエーのために、現われた断層によれば、下部には花崗岩があり、その上層に緑色礫含有粘土、紅色礫含有粘土（表面黒色礫を含む）凝灰岩、安山岩の順序に層をなしており、安山岩は板状攝理又は柱状攝理を伴ない、その破砕面は玄武（亀の甲の形）に似たものもある。

(3) 発掘調査の経過

１　準備調査

高松市文化財保護委員会では屋島山上発掘調査の委嘱をうけ、ただちにこれに応ずべく 12 月 26 日委員会を開き小竹、細溪、大西三氏を中心とする屋島城跡埋蔵文化財発掘調査団を編成、調査を計画実施することとした。

調査団では先ず事前調査として奈良県、長崎県、福岡県に対し、その管下の高安城跡、対島の金田城跡、大野城跡等に関する調査の成果ならびにその研究調査者氏名の照会をするとともに既発表文献の調査研究を急いだ。

注　参考文献

斉藤忠著　古代城柵跡および住居跡

岡田唯吉著　屋島山の成因

それぞれ資料を得、研究調査者との連絡もついたので１月５日香川県文化財保護委員・松浦正一、六車恵一両氏の出席を依頼し、山上桃太郎旅館において発掘調査の実施計画を開催、松浦氏所有の地図などを参考に種々協議を行った結果

(1) 屋島城遺跡に焦点をしぼって山上､山下を調査する。

(2) 許可地内の南北に２本東西に３本のトレンチをまず掘る。

(3) その起点は最低面北端にとる。

(4) １月 20 日から発掘調査を開始する。

以上のことを決定し、作業員については、香川大学学生および香川高校郷土研究会の協力を得ることとした。

※香川高校は現在の香川県立高松南高校のこと

２　調査の経過

１月 20 日（土曜日）曇

指導者

小竹、細溪、大西、多田明善高校講師（歴史学)、多田香川高校教諭（地理学）

作業従事者

香川高校郷土研究会員　11 名

午後１時作業開始、最低面北端の起点から南へ第１トレンチにかかる。約 30 センチ掘りすすんで湧き水があり、かつ岩石多く掘進が困難であったが、午後５時第１トレンチの掘さく終了出土品なし。

１月 21 日（日曜日）晴

指導者

小竹、細溪、大西、多田（歴）

作業従事者

香川高校郷土研究会員　11 名

第２トレンチにかかる。北から掘進約 50 センチで集石塊にあう。集石はトレンチを横切り東西にのびている如くであり、南北約 2.8 メートルにおよぶ。

石はコブシ２倍大であり、田畠肥沃土中から出た廃石を集めたものであろうかと思考、流水のはけ口を作るため約 20 センチ巾に石をとり除いた。この集石の北辺に接して緑色の粘土層に紅色粘土層が重なっていることが判明したが、集石の東西の長さとともに次後の調査を待つことにし、そのまま残して更に第２トレンチを掘りすすむ。

集石の南に布目の瓦片一出土。

１月 28 日（日曜日）曇

指導者

小竹、細溪、大西、多田（歴）

作業従事者

香川大学学生　９名

第２トレンチの残部分の掘さく終了、ウワ薬の充分にかかった磁器破片少々出土、つづいて第３トレンチに進む。うち無柄石鏃一本弥生式時代か（縄文式時代に近い。）と思われるもの出土。

２月３日（土曜日）曇

指導者

小竹、細溪、大西、多田（歴)、多田（地）

作業従事者

香川高校郷土研究会員　11 名

第３トレンチより第４、第５トレンチに進む。このトレンチは壊土の下約 25 ～ 30 センチは赤色礫、ついで緑色礫を含む粘土層に達する。

その下は湧水あり、掘進困難、出土品みるべきものなし。

２月４日（日曜日）曇

指導者

小竹、細溪、大西、多田（歴）

作業従事者

香川高校郷土研究会員　13 名

総員を３班に編成し、第１班は７・８・９トレンチ、第２班は10・11・12トレンチに、第３班は第13トレンチにかかる。

第７～12トレンチは地山と考えられる紅色礫包含粘土を出すまでを目途として掘進し、第13トレンチは第２トレンチに現われた紅色礫包含粘土層と、緑色礫包含粘土層の重なりの南端の集石にそって西に進むことにする。

先ずこの両粘土層の南端の所在を確認するために、第２トレンチからこの第13トレンチの西端に至る間に、巾約50センチ、深さ約50センチの小トレンチを南北に４本掘り、これにより両粘土層の南端の概要を確かめ、第２トレンチからこの両粘土層の南端にそって約30センチの深さに第13トレンチを掘りすすめた。集石は西へ約２メートル（全長約６メートル）でなくなって、あとは粘土層のみとなった。このところ湧水は全然なく水田よりも低地にあり、乍ら水もちが悪く（所有者談）水田として利用されなかったのも、紅・緑色礫包含層の存在によるものであろうか。出土品なし。

２月10日（土曜日）晴

指導者

小竹、細溪、大西、多田（歴）、多田（地）

作業従事者

香川高校郷土研究会員　13名

前回同様３班で作業続行。

２月11日（日曜日）晴

指導者

小竹、細溪、大西、多田（歴）

作業従事者

香川高校郷土研究会員　13名

作業は前日に続く、10～11トレンチの表土浅く、出土品とまぎらわしい石片にうわ薬のかかった新しい磁器片のみ。午後は全員でこの調査地の中央を南北に流れる溝をさらえた。

溝の東西の土壇の倒壊を防ぐための木杭数本あり、須恵器よりは稍新しいかと思われる土器片出土。

２月18日（日曜日）晴

指導者

細溪、大西、多田（地）

作業従事者

香川高校郷土研究会員　10名

この日現地のボーリングによる調査を行なう。あらかじめ香川大学高桑礼博士の指導をうけ、実測、記録、機器の各班に分れ手廻しのボーリング機械により高さの異なる場所７ヶ所について調査。

２月24日（土曜日）晴

指導者

小竹、大西、多田（地）

作業従事者

香川高校郷土研究会員　９名

２班に分れ第１班は12～15トレンチ、第２班は、発掘現場をはなれて、寺院裏の第１土垣の清掃、実測調査を行なう。土垣は寺裏で巾１メートル、高さ約50～70センチ、発掘地西方で巾70～80センチ、高さ30～50センチ（何れも路面より）南方の一辺は西半分は巾２メートル、高さ30～50センチであるが、東の部分は全然不明。ただわずかに土垣上に顕著である樫の木が東方には大木となって並んでいることから、土垣が存在していたであろうことが推測されるに止る。

第２土垣は外側から測って高さ約２メートル、内側は約70～80センチ。密生する竹林中にあり、また雑木多く、破壊した所があり、実測を妨げるものが多かった。この土垣の表面には各種瓦が散布していた。

３月17日（日曜日）晴

指導者

小竹、細溪、大西、多田（地）

作業従事者

香川高校郷土研究会員　８名

第１土垣、第２土垣の実測ならびに10、11トレンチにかかる。出土品なし。

３月24日（日曜日）晴

調査団員一同浦生檜内に存する石壘、石垣の調査を行なう（第51図）。

３月31日（日曜日）晴

調査団員全員でトレンチの復元を行なう。

(4) 出土品

発掘にとりかかるまでは相当な出土品があるのではないかという期待をもっていたが、結果出土品からはその量から見ても質から見ても屋島城跡を実証するものは発見されず、期待を裏切られるものであった。

数少ない出土品中、第３トレンチ地表下約30センチの赤色を帯びた粘土中から一個の石鏃を発見した。(写真１)尖端は上下とも欠損しておるが、長さ推定2.4センチ、サヌカイトを磨いてあり、製作は功妙で弥生時代に属すると見られる逆し型石鏃である。同類型の石鏃は屋島東方の五剣山、源氏ヶ峯附近ですでに発見されているが、屋島では最初であろうか。

こうした石鏃がこの調査地から発見されたことについては色々のことが考えられる。まずその出土地点は、小規模の谷を形成するその谷の中央最低部であり、この地点東には屋島寺の境内とそれにつづく森があり、南には西鼻詰という広場のあるところから、この双方からの流水によって流れて来たものか、または開懇に当って人工的に壊土とともに搬入せられたことも考えられる。とに角、これによって屋島山上に弥生式遺跡の存在する可能性があるかも知れないし、(弥生式遺跡が300メートルの高地にもあり得る例としては、三豊郡詫間町柴雲出山遺跡がある。)また単に狩猟人が足跡を止めたということを物語るものかも知れないが、いずれにしても今後の調査による外はない。

次に土器であるが前記石鏃出土にもかかわらず、弥生式土器と断定し得るものは発見出来なかった。ただ第３・第４トレンチ発掘中に土器の器脚と見られるもの２ヶを発見したが(写真１)、いずれも焼成の硬さから、土師器よりもなお新しいものと思われるものであった。

このほか須恵器と思われるものの破片（口縁部）１ヶを中央溝の中から得たが他のもの混合して出土しており、かつ小形であった。

次に瓦片であるが、第２トレンチ集石の南から布目瓦を得た（写真２・３）。同様の布目をもつものは、表面調査により、桃太郎ホテル西の第１土垣附近からも、寺裏の第２土垣附近からも採集出来た。何れも平瓦の破片で表裏ことに裏面の布目の状態から見て讃岐国分寺跡出土のものとほぼ同様であり、まず奈良時代のものと考えられる。

(5) 調査地ボーリングの状況

この地は寺境内と霊巌の断崖高部とに狭まれた谷間をなし、南部は高く、北部は低く、３段の急傾斜段をもつが、谷全体がゆるやかに北に傾く。ボーリングの結果、紅色礫は常に緑色礫よりもさきに現われ、紅色礫包含層の下は緑色礫包含層をもつ。しかしこれらはともに粗雑で軟らかく、容易に伏流水の出入を許すようである。

ボーリング④の東南方は池であり、南方に井戸がある。

明治８年の屋島寺境内図によれば、上記井戸の位置に「池シキ八畝歩」とあるが、この井戸と東方の池との中間

の畠は大量の腐蝕植物を含む土であることから、古くはこの井戸を含めて一つの浅い大池であったことも考えられる。ボーリング④－1.35メートルにある薄黄の粘土層はかつて池であった時の底部に形成されたものであろうか。又各ボーリングにより発見されたち密な粘土層は相当堅牢であり、ボーリング①③などでは機器が通らず岩盤と誤解した程であったがこれも池の底部であったと判断せられる。そうであるとすれば北部第13トレンチの畠は、その地層から判断して池の土提をなしていたものではなかろうか。

第2トレンチから第13トレンチの畠地にまたがって東西約6メートルにおよぶ集石は池の水門として堤防の破壊をまぬがれるために築かれたものでもあろうか。しかしこの集石が例え池の水門として築かれたものであったとしても、屋島城の遺構であるとは断定出来ない。

(6) 土垣の状況

第1土垣は第50図の通り、寺の裏のもの、調査地西部のもの、同南部一部のものに分れており、これらは当初互にゆるい曲り角をもって連なり、寺を包んだことは一見して明瞭である。なお寺の東部境内簑山神祠東部からほぼ南北に長く、土垣が一本存在したかも知れないことはその南部の草むら中の土壘から想像される。

この土垣の表面調査の結果は、時代を決定する積極的な資料は観られない。露出する土石のうち平板なる石が総て平らかに土中に包まれていることで、その構築が版築による土垣であることを知ることが出来る。

寺裏（北面）土垣中に約一米の切れ目があって現に交通に利用されてはいるが土垣構築当初作られた門か否かは不明である。後世崩壊利用されたものかもしれない。

この土垣西北角（調査地の北部）は方形の一角でなく、大きく丸みをもっていたことが実測により明らかとなった。これは飛鳥時代より奈良朝時代から平安朝時代の寺院や城跡が全部直角であるのに比して著しく異なる点である。

次に西部の土垣の主軸は北10°～南190°の方位を指す。（以下第50図参照）推定される寺の東部境内の土垣もほぼ同様であろうし、南部の残在土垣の一部が西280°－東100°であることは寺の本堂、四天王門、客殿、大坊、同門、仁王門、参道寺がそれぞれ西280°－東100°、南190°、北10°であるのと調和し、何れも正北（太陽南中の反対側）を基準とするものである。

磁石の北（中北）とは現在（1968年）で約10°の偏角をなしている。

寺の北の土垣の主軸は西300°～306°東120～126°で著しく他の辺や寺の建造物と不調和である。

磁北（磁石の北）によったとしてもこうはならない。日本地方の磁北は4世紀以来では、A.D.650年は偏角は最高で西に約17°、920年ころは西に約16°、1250年ころおよび1680年ころは何れも東に6°であって、土垣北辺の東に30°という偏角のあった時代は考えられない。（NHK、竹内均、上田誠也、地球の科学P118、46表　角川、藪内清、中国古代の科学P172～173）

土垣北辺は道にそっている。これは土垣西北角の浦生道（鑑蔵ヶ谷にそう）を通じて浦生に至る道や、駐車場の東部墓地の中を通ずる西300°－東120°の土垣と墓石の列並びにその中を通る旧道と一連の道をなしている。寺裏の土垣に沿う旧道から西の海上に至る浦生への道、東の海上に通ずる東大門から直ちに山下の安徳神社附近の海上に通ずる。これらは一連の連絡路であったことを物語るものであろうか。

そうなると土垣も、これらの連絡路も、寺とは直接の関係はなく、屋島という、この島に築かれた水城に関係した連絡路であり、また土垣でなくてはならない。寺の創建以後は専ら寺の門前の東西道が利用されることとなり、明治8年以降になって墓地中の旧道に対して、新しく甚五郎ホテルの北に通ずる道も成立したのであろう。

土垣には絶対年代を明示する根拠はないが、北辺土垣の東端（藪の中）は土壇によって崩れ去っている。そしてそこに卓越する古瓦は、平安か鎌倉時代のものと思われるようなもの裏面に細かい布目（タテ糸34本・横糸34本）をもったもので、寺宝物館保存の天文2年丸瓦より古いものであるから、この建築により土垣北辺東部は崩れ去ったか簑山神祠の参道が湾曲していることは、東北角に土垣がかつて存在した、その湾曲部であったことを物語るものと思われる。

藪の中に著しく散布する古瓦が第一土垣中には一片もないことは、消極的にであるが土垣が寺院建立以前即ち古代城跡の城郭であることを物語る以外の何ものでもなかろう。

(7) 結論

屋島城遺跡である石壘、石垣が浦生の「櫓内」という谷間にあることはこの古代城は朝鮮式第2式であったことを物語り、山上を含めての一大城跡であったことは建築史学上問題のない事実である。

今回の調査地の発掘調査によって、僅かに出土した弥生式石鏃一本、土師器の器脚2本（古墳後期～奈良時代）、古墳時代の須恵器片などが出土していて、屋島寺開基以前に既に人の足跡印せられたことが明らかである。しかしこの少ない出土品は自然に流入し、または開懇時に人工的に搬入された壊土とともに外部から入りこむ可能性がある。しかし湧水または天水を保存利用の可能性のあることならびに自然の紅色礫、緑色礫含有粘土層に合わせて設けられたと認められる土提・集石に従って水とり口遺構はここが古代城跡であることを物語ると思われる。

表面調査に於いて、第二土垣ならびに第一土垣（桃太郎旅館西側の部）にて採集されたと同様式の奈良時代の瓦片が集石のやや上流からも出土したことは何を物語るのか。瓦は上代早く寺院にのみ使用せられたと考えられるから、この地の水は寺院によって使われるために、寺院によって集石などが始めて作られたのではないかとの憶測もなりたつが、城が廃城になったあと、または廃城にならないうちにここに早く寺院が開かれたと解しなければならない。古瓦は、しかし石鏃同様、第2トレンチに出土したことは、外部からの流入または搬入の可能性もある。霊巌下50メートルの物見台は明らかに城塞等防衛用であって、寺院には何の関係もなく、また伝説もない。ことに城塞でありながら、その廃城以前にその城中に四天王が祀られた実例もある。例えば福岡県大野城は大宰府の防衛城として重要な機能を果したが、この城は天智天皇4年（665年A.D.）に築城されたが、廃城の以前宝亀5年（774年）早くも城内に四天王が祀られていて、国家鎮護の役割を果している。このことは奈良時代の国分寺が「金光明四天王寺」とも称され、仏寺創建が四世界鎮護の四天王を祀ることによって国家鎮護の目的を果たす為であり、防衛を第一としたことでも明らかなように、寺の建立が城塞築造と同一目的でもあったのである。また宮城県多賀町多賀城に附設して多賀廃寺（陸奥国分寺）が奈良時代初期に創設されたのも同様であったと思われる。

この為に屋島城跡の中心部に屋島寺が開かれたこともあり得たと思われ、早く廃城となったために、いわゆる本殿の位置に寺院が開かれたのであろうと推定せられる。仁王門の西側の乱積の石垣も、城跡を示すものかもしれない。寺開山の時が何時かは、数少ない出土品から正確にきめることは出来ないが（1）まず奈良時代と見られる屋島

第一式の瓦が出土し、また散布していること、(2) 山獄仏教は平安時代初期に流行したことのほか、鑑真（没年763年淳仁天皇時代、年77才）（784年長岡遷都）の弟子恵雲によって開かれたとする寺伝を考え合せて、奈良時代末年か或いは平安時代初期と見られる。しかし弘法大師時代にひき下す必要はなく、律宗の寺がのち大師により真言宗に改められ四国八十八ヶ所に編入されたと解すればよい。寺の三方を取囲む第一土垣、これは西部・南部は寺と方位を同じくするが、北部は○○寺とは関係がなく土垣にそって走る道とともに、東大門内の土○と道と一連をなし、西は浦生、東は檀浦に通じていて、寺とは関係がなく、またその土垣中に後代の出土品を含まないことを考え合せて、また西北方・南西方の両角の丸みと合せて古代城に附設の土壇と考えられる。城の中心は何処か。南嶺の大部分が聖域である今日、発掘調査は許されず、表面調査のみでは決定的な結論は出ないが、強いていえば寺院の本堂は東殿、客殿は本殿、大坊は西殿の位置に当り、本堂裏第二土垣に囲まれた土壇あたりは、室町以後に寺院関係の建築遺構であろうか。この詳細は将来の調査を待って明らかになることであろう。(43.5.31)

高松市文化財保護委員（五十音順）
埋蔵文化財係　大西　正男
小竹　一郎
細溪福太郎

※　○は，判読不能の文字を表す。

以上が昭和43年に作成された報告文である。他に残された資料は，付図としての図面，写真，実測図・拓本の一部しかなく，調査の詳細はこれ以上知ることはできないが，この調査に対して検討を加えたい。

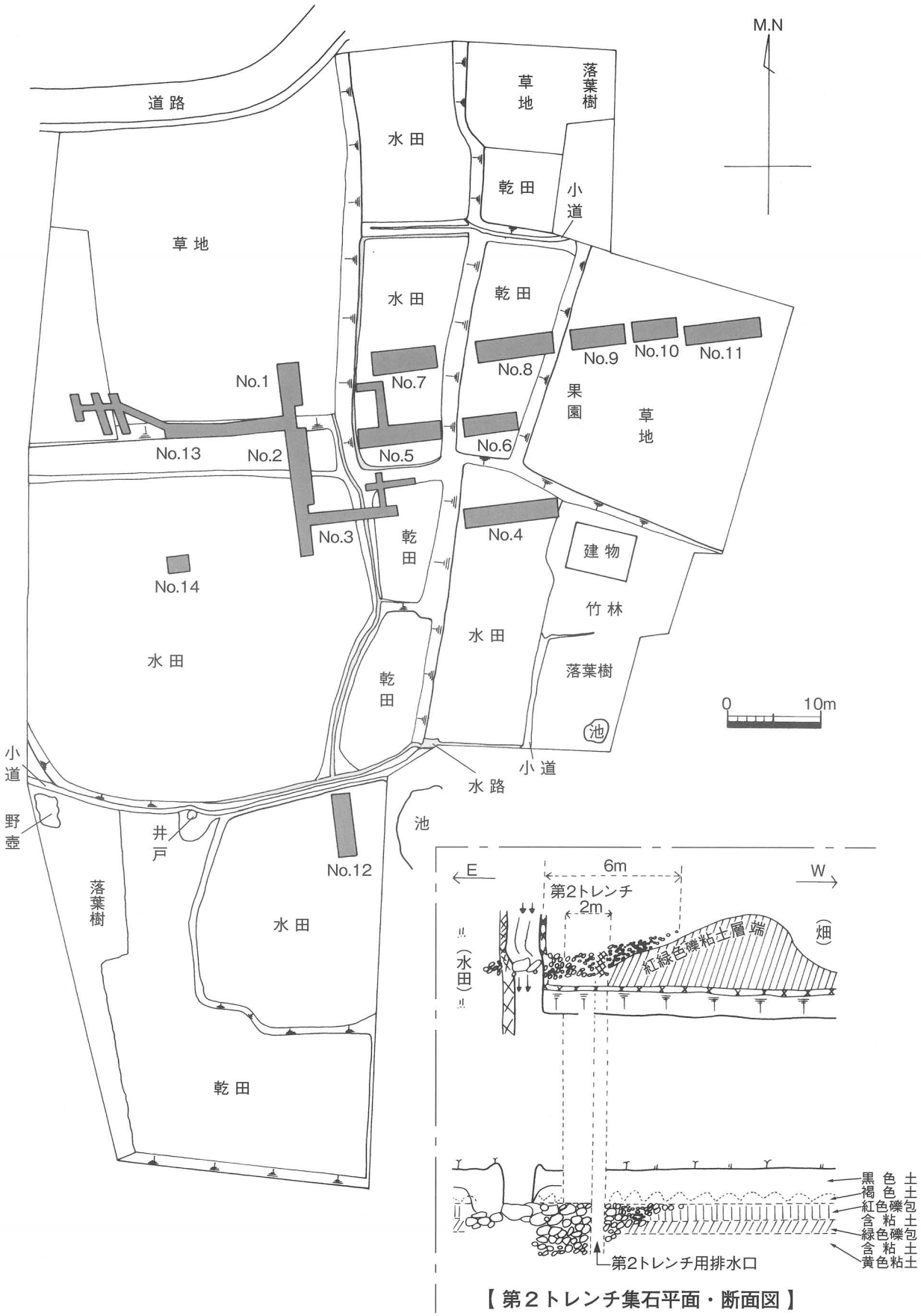
まず出土遺物であるが，実物は所在不明なので，写真・実測図・図面から推測したい。石鏃は，先端と基部の一部を欠くが，凹基無茎式のもので弥生時代のものである。屋島南嶺では弥生中期の土器が一定量出土することから，この石鏃も同じ時期のものと考えられる。土器の器脚としたものは，土師質土器釜の脚部と考えられ，中世のものと考えられる。写真に写っている他の土器片も中世のものと推測される。布目をもつ瓦片は古代～中世のものと推測でき，南嶺の調査では平安時代以降の布目瓦が確認されていることから，これら布目瓦片も平安時代以降から中世までのものと考えられる。

次いで調査の検討である。トレンチ調査では，第２トレンチの集石以外は明確な遺構は確認されておらず，掘削できた深度も30～50cmと浅かったようである。集石についても伴う出土遺物はなく時期・性格とも不明である。トレンチ調査だけでなく，ボーリング調査も実施されているが，地下２～４ｍで岩盤に当たり，岩盤までの堆積層を確認したのみに終わっている。しかしながら，現在の古代山城研究と屋嶋城跡の調査成果からすると，調査地北側の道路より北に「北水門」と呼ばれる石積みが確認されており，調査地南側にあった池が屋嶋城跡の貯水池の可能性が考えられている（山元2003）。なお，ボーリング調査において，この池が昭和42年度の調査時より以前は西へ広がっていたと推測している点は注目できる。後述する屋島寺庫裏改築工事においても，池が江戸時代以前は東へ広がっていたことが確認されている。池が広がっていることから，第13トレンチの畑を堤と見立て，第２・13トレンチで確認された集石が水門の可能性も報告文で指摘されているが，報告文で慎重を期しているとおり，集石が屋嶋城跡に関わる遺構かどうかは判断できない。

土垣のうち南嶺を広くめぐる第１土垣については，時期は不明ながら，報告文では屋嶋城跡に関わるものと推測されている。しかしながら，古代山城の類例では平坦地から傾斜地へ変わる地点に沿って土塁が巡り，そのため土塁の形は地形に沿って不定形なのに対し，第１土垣は平坦地においてほぼ四角形に巡っているだけである。また，屋嶋城跡では，傾斜変換点において土段状の土塁や石塁が現在では確認されていることから，第１土垣は古代山城に伴うものではないと考えられる。しかしながら，充分な調査が現在もされていないことから，土垣の年代や築造目的は不明である。

一方，屋島寺北側にある第２土垣については，平成８年度の屋島基礎調査事業において，室町時代の屋島寺の寺域を画するものであることが明らかになっており，これについては報告文の推測と合致している。

最後に，浦生で調査された石塁についてである。「屋島城址碑」がある谷奥部の石塁については，古代山城に特有な谷を塞ぐ形で構築されており，現在も屋嶋城跡に伴うものであると考えられている。しかし，その下にある総長167.6ｍの石垣は，単に土地の区画に沿って構築されているだけであり，屋嶋城跡との関係はないと考えられる。しかしながら，調査がされていないことから，石垣の年代や築造目的は現在でも不明である。



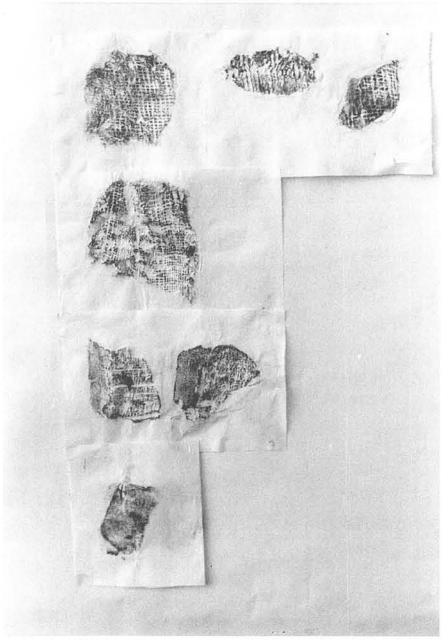
第49図　屋島水族館建設工事に伴う試掘調査平面図（縮尺 1/600）

↑写真１

土師器片 （赤褐色）	石鏃 （欠損）弥生式
土師器片　須恵器片 （黄褐色）（微黄ネズミ色）	
土師器片 口縁部・赤褐色	土師質 土器柱脚　同左 （１）　（２） （赤褐色）

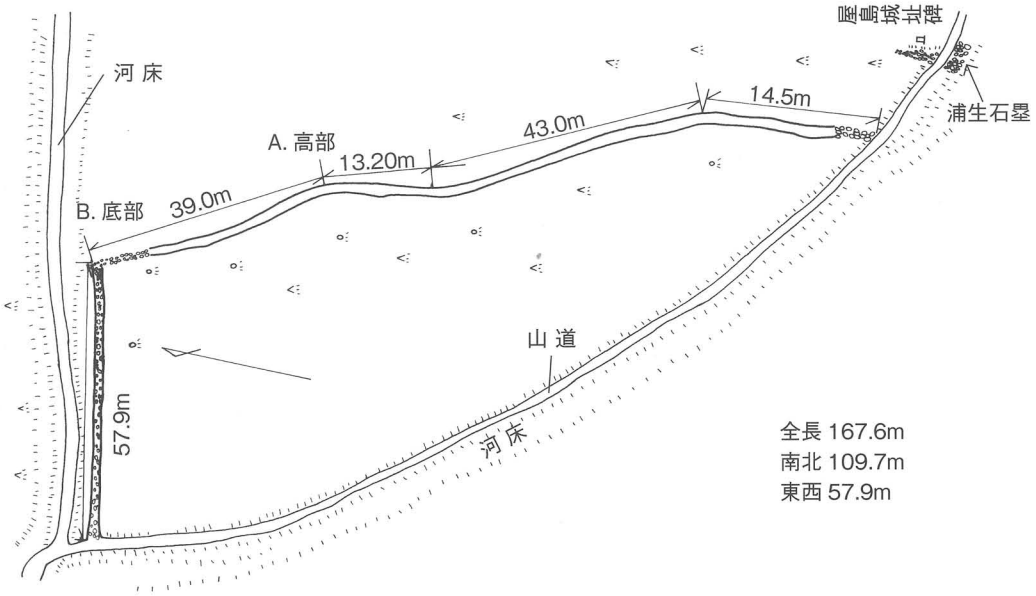
←写真２

写真３→



Ⅰ	A屋島寺西 第二トレンチ出土瓦片 厚さ 24.2mm　（平瓦）	B第一土垣（桃太郎ホテル西） 採集瓦片（平瓦） 厚さ 19.0mm	A裏面　B裏面　B裏面
Ⅱ	屋島寺裏第二土垣出土 丸瓦（厚さ 17.7mm）		同左裏面
Ⅲ	A第３トレンチ出土丸瓦片 （厚さ 18.0mm）	B寺境内（寺裏）採集丸瓦片 厚さ a.33mm	同左A裏面　同左B裏面
Ⅳ	A寺裏第二土垣出土 平瓦片	B同左出土軒先瓦（布目なし） （単弁十二葉）	同左A裏（擦過様文）

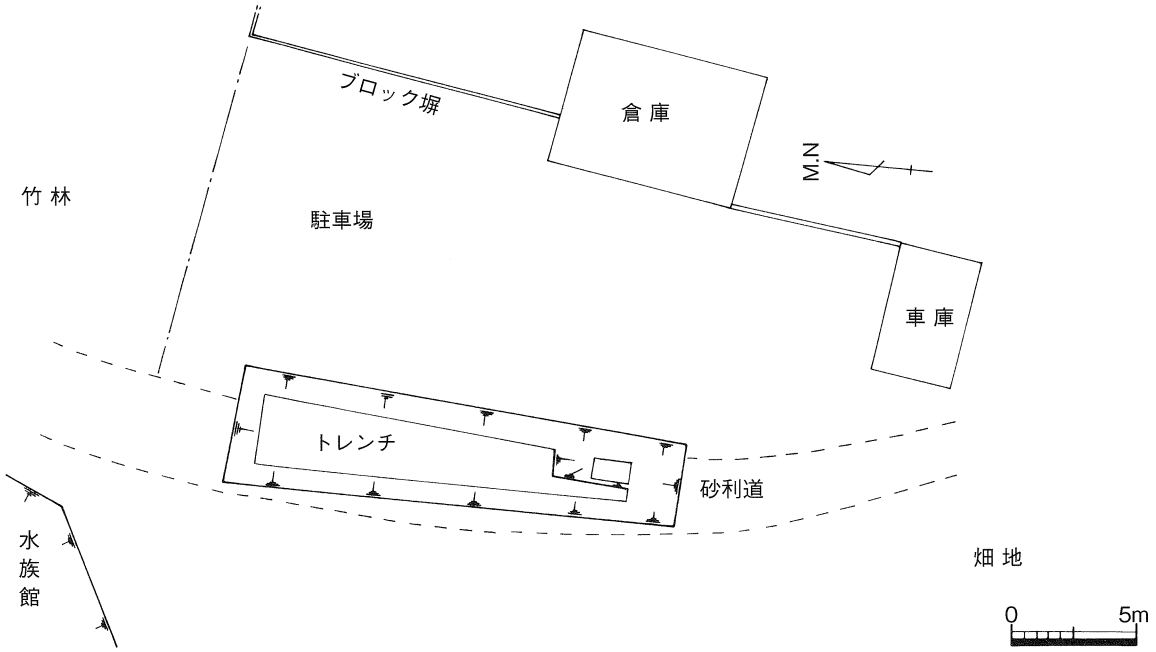
第 50 図　屋島南嶺における土垣位置図



第 51 図　浦生櫓内に所在する石墨・石垣位置図（縮尺 1/300）

第３節　屋島寺西側倉庫建築工事に伴う試掘調査

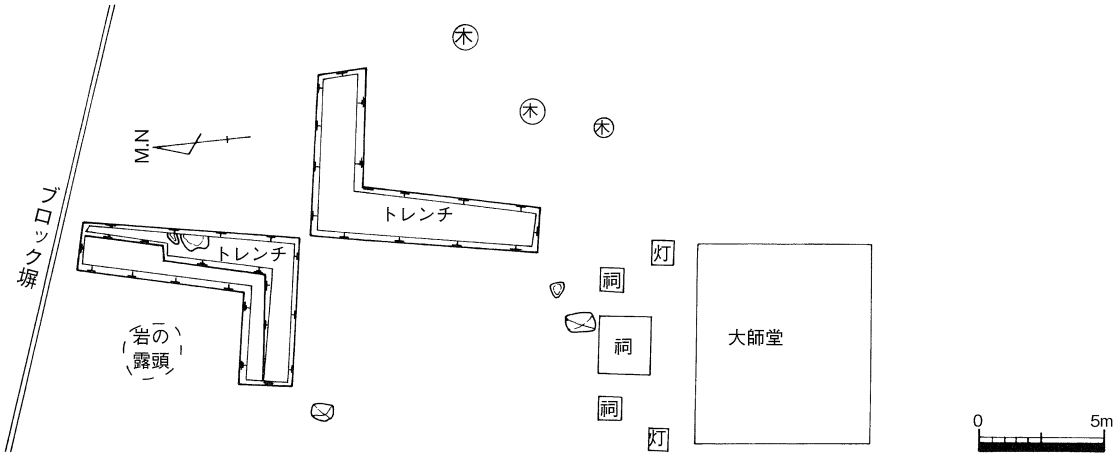
屋島寺西側にあたる駐車場・畑地において，倉庫建築が計画されたことを受けて，本市教委と事業者である屋島寺は，事前に試掘調査を実施することで合意した。調査は，鎮守社移築工事に伴う試掘調査と併行して，平成２年３月 27 ～ 30 日に重機によるトレンチ掘削で本市教委が行った。トレンチの長さは約 18m, 幅は 3.2 ～ 4.6m で, 建築予定の倉庫に合わせた南北に長い四角形となった(第 52 図)。試掘当初から池がかつてあった場所と想定していたが, 調査結果はその予想を裏付けるものであった。地表から約 2.6 ～ 2.8 m までは池を埋めた際の埋土であり，その下に約 20cmのヘドロ層が溜り，ヘドロ層を除去すると白色の岩盤（凝灰岩）が露出した。出土遺物は確認されなかった。先の昭和 43 年調査の第 49 図を見ても，当該地は池にあたり，昭和 40 年代以降に埋め立てられた池と判断できる。そのため，工事に先立つ埋蔵文化財の保護措置は必要ないものと判断した。

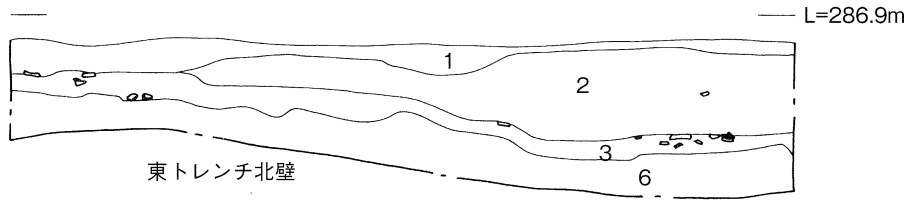


第 52 図　屋島寺西側倉庫建築工事に伴う試掘調査平面図（縮尺 1/300）

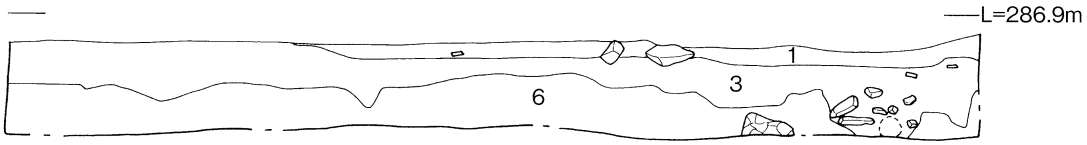
第４節　鎮守社移築工事に伴う試掘調査

屋島寺本堂東側にある鎮守社（熊野権現社）を本堂の北東方向に，つまり現在地から北へ移築する計画がなされたことを受けて，本市教委と事業者である屋島寺は，事前に試掘調査を実施することで合意した。調査は，屋島寺西側倉庫建築工事に伴う試掘調査と併行して，平成２年３月 27 ～ 30 日に重機によるトレンチ掘削で本市教委が行った。幅２ｍのトレンチを移築予定地に十文字の形で設定し，南北の長さ約 18m，東西の長さ約 13m となった（第 53 図）。最も浅い西端において深さ約 20cm，最も深い東端において深さ約１ｍで，地山である赤色粘質土層（第６層）に達した。このため，現在は平坦地だが，旧地形は西から東へ緩やかに傾斜していたことが明らかとなった。堆積土層は第１～５層に分層でき，第２層から江戸時代以降と考えられるいぶし瓦片が出土したのみで，遺構は確認されなかった。そのため, 工事に先立つ埋蔵文化財の保護措置は必要ないものと判断した。しかしながら，周辺には古代から中世の布目瓦片が散布しており，付近に古代から中世の屋島寺に関係する遺構が残されている可能性がある。

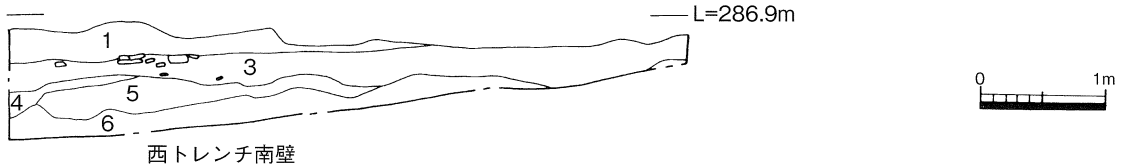




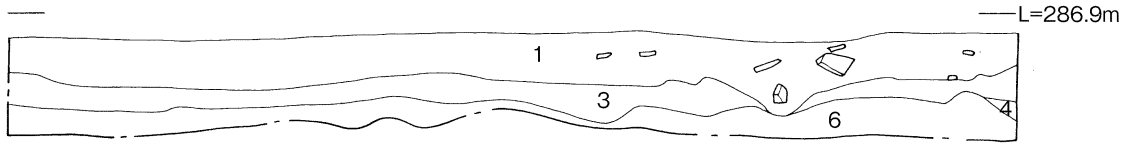
東トレンチ北壁



南トレンチ西壁



西トレンチ南壁



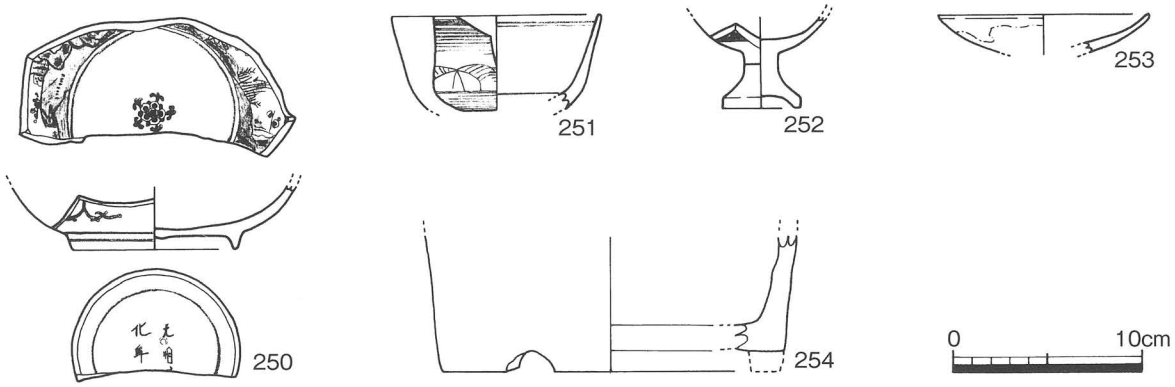
北トレンチ東壁

1. 灰黄色土（2.5Y 6/2, 瓦片・落ち葉を含む表土）
2. にぶい赤褐色土（2.5YR 5/4, 瓦片を多く含む）
3. にぶい赤褐色土（7.5YR 4/3, 赤色粘質土をブロック状にわずかに含む）
4. にぶい赤褐色土（7.5YR 4/3, 赤色粘質土をブロック状に含む）
5. にぶい赤褐色土（7.5YR 4/3, 赤色粘質土をブロック状に多く含む）
6. 赤色粘質土（7.5YR 4/8, 赤灰色の小礫を所々含む）

第 53 図　鎮守社移築工事に伴う試掘調査平面図（縮尺 1/300）トレンチ土層図（縮尺 1/60）

第５節　屋島寺庫裏改築工事に伴う試掘調査

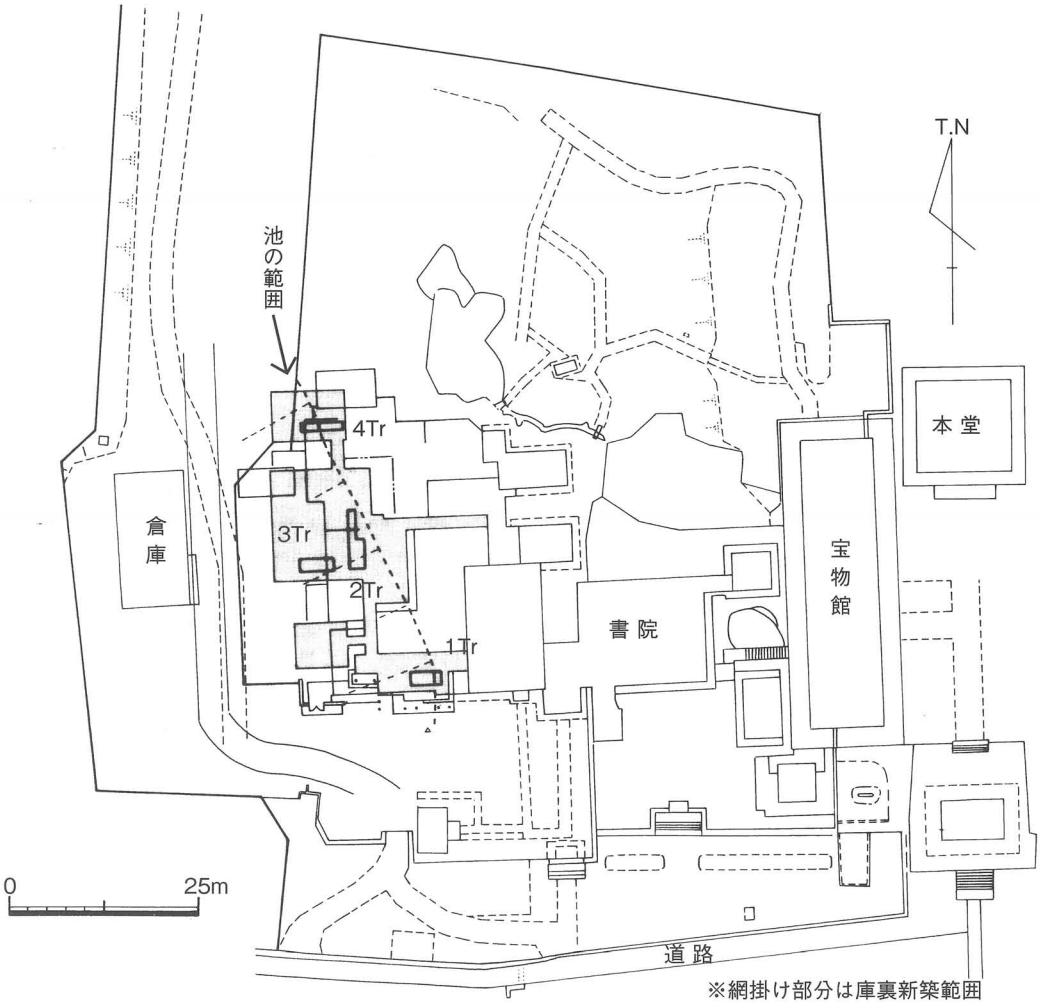
屋島寺の庫裏を改築する計画がなされたことを受けて，本市教委と事業者である屋島寺は，事前に試掘調査を実施することで合意した。調査は，平成11年３月24日に重機によるトレンチ掘削で本市教委が行った。幅１ｍ，長さ４～８ｍのトレンチを４ヶ所において設定し，南から順に第１～４トレンチと呼称した（第55図）。その結果，伝承どおり全トレンチにおいて池の埋立地を確認した。特に第１・４トレンチにおいて，池端を確認しており，昭和43年調査の第49図に記されている池が，かつて屋島寺の庫裏にまで広がっていたことが明らかとなった。さらに，第４トレンチ東半分において，溝１条と柱穴６基を確認した（第56図）が，トレンチからの出土遺物は江戸時代のものしかないことから，これら遺構も江戸時代以降のものと考えられる。図化できた出土遺物は第54図で，250～253は第４トレンチの池埋土，254は第３トレンチの池埋土から出土した。250は肥前系磁器鉢で18世紀前半のものである。251は肥前系磁器の端反碗で，19世紀中頃のものである。252は肥前系磁器仏飯器で17世紀後半のものである。253は京信楽系陶器の灯明皿で，18世紀末から19世紀前半のものである。254は土師質土器の火鉢で，19世紀のものである。これら出土遺物の年代から，池の一部を江戸時代末期に埋め立て，その後，屋島寺の庫裏が建築されたと考えられる。このことから，工事に先立つ埋蔵文化財の保護措置は必要ないものと判断した。



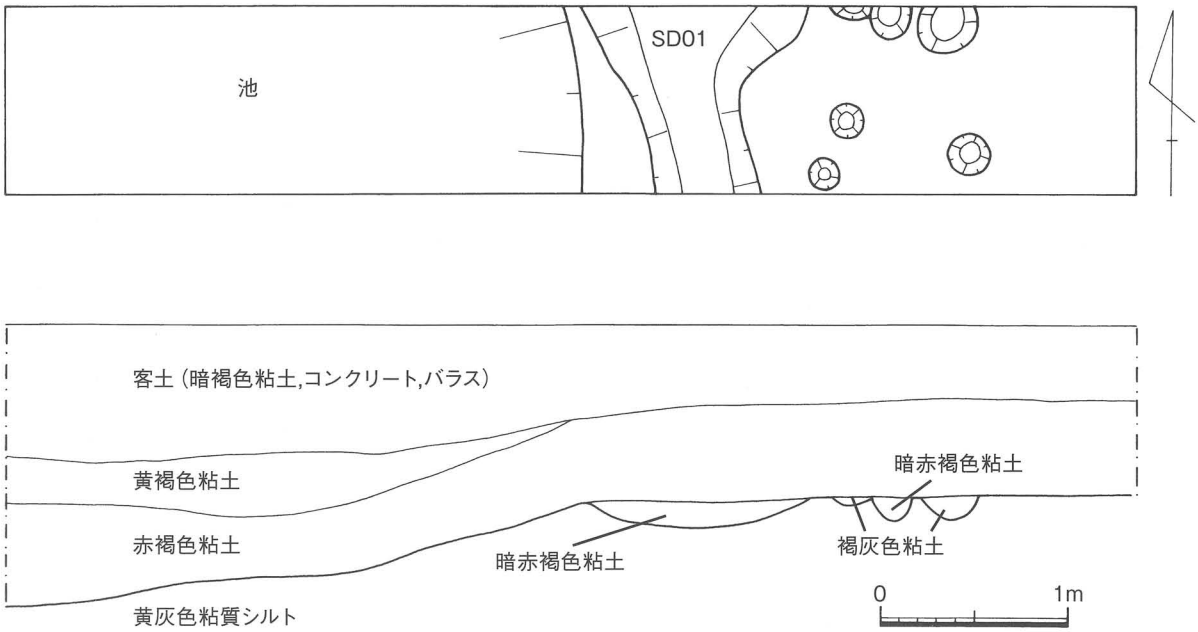
第54図　屋島寺庫裏改築工事に伴う試掘調査第出土遺物実測図（縮尺1/4）

《参考文献》

石井清司　1995「篠窯須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
上原真人　2000「山岳寺院の考古学・総説」『山岳寺院の考古学』大谷女子大学
上原真人　2002「古代の平地寺院と山林寺院」『佛教藝術』265号　毎日新聞社
香川県　1986『香川県史８　資料編　古代・中世史料』
角川書店　1985『角川日本地名大辞典』37香川県古代の土器研究会編
　1992『古代の土器１ 都城の土器集成』
佐藤竜馬　2003「出土瓦の検討」『高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』香川県教育委員会
田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店
中西克也　2005『高松城跡（無量壽院跡）』高松市教育委員会
毛利光俊彦・佐川正敏・花谷浩
　1992『法隆寺の至寶　瓦』法隆寺昭和資財帳編集委員会・小学館
藤井雄三　1981「Ⅵ南嶺山上の調査」『屋島城跡』高松市教育委員会
山崎信二　2000『中世瓦の研究』雄山閣出版
山元敏裕　2003『史跡天然記念物屋島―史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅰ―』高松市教育委員会
渡部明夫　2006「高松市中山廃寺について～香川における初期山岳寺院とその仏像～」
　『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅱ』



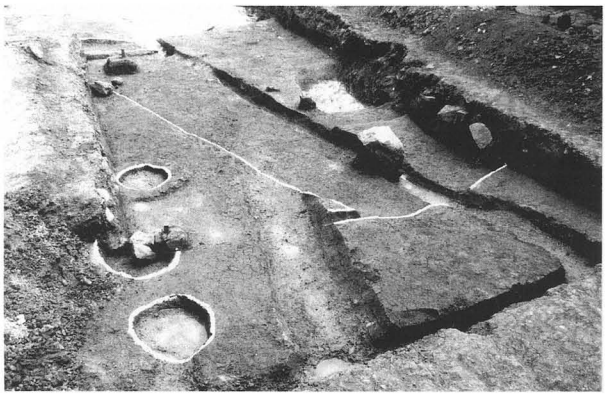
第 55 図　屋島寺庫裏改築工事に伴う試掘調査トレンチ位置図（縮尺 1/1,000）



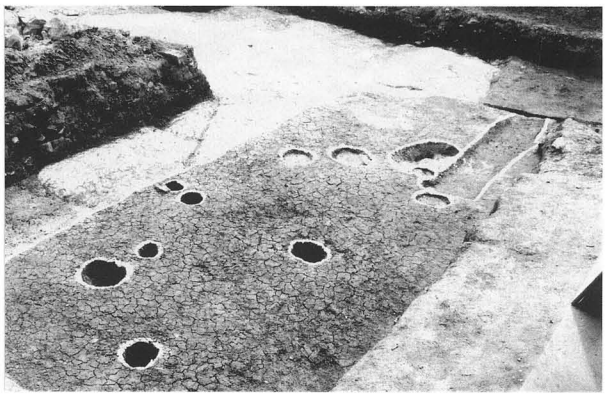
第 56 図　屋島寺庫裏改築工事に伴う試掘調査第４トレンチ平面・土層図（縮尺 1/40）

1 調査前風景（北から，溝は試掘坑）

2 調査前風景（南から，奥は本堂）

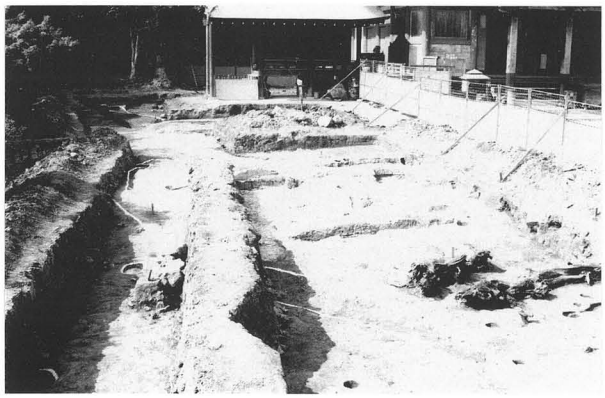


3 調査区北側北部全景（北から）

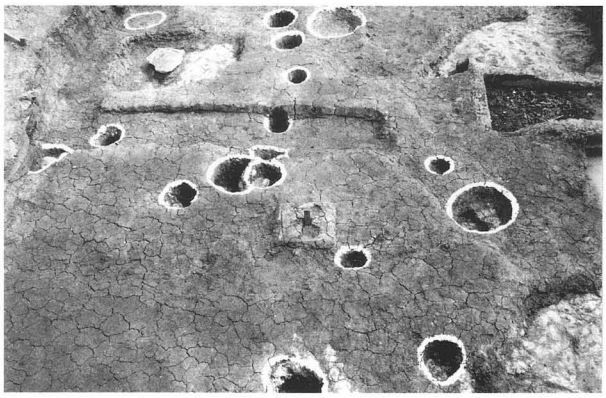


4 調査区北側南部全景（北東から）

5 調査区南側全景（北から）



6 調査区南側全景（南から）

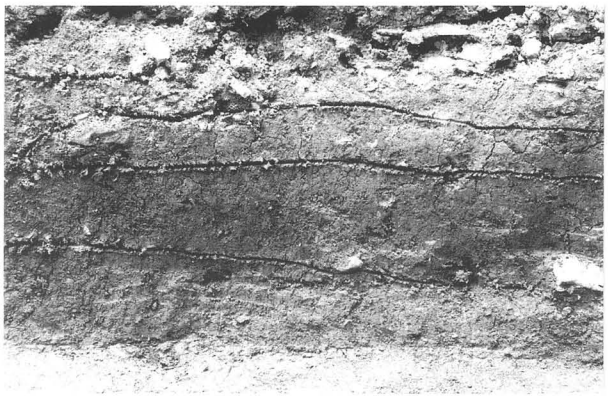


7 調査区南側北部全景（北から）

8 調査区南側南東部全景（北から）

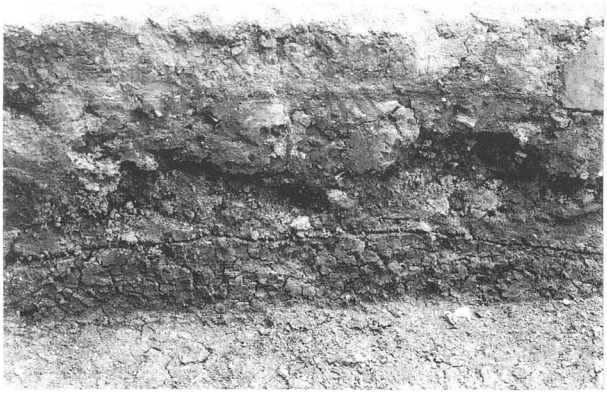
1 調査区壁面①

2 調査区壁面② 南側



3 調査区壁面② 中央

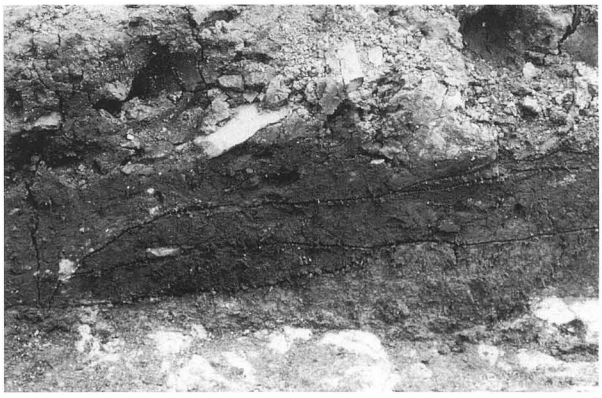
4 調査区壁面② 北側



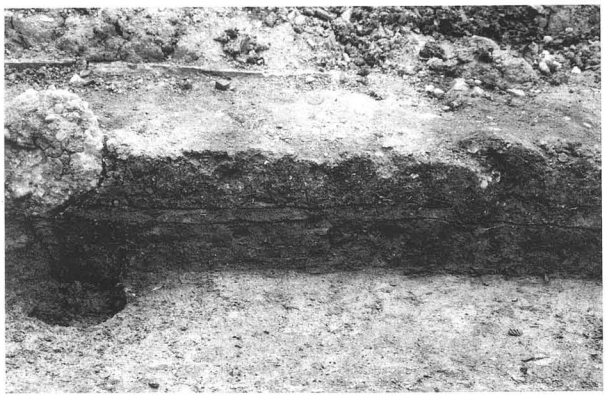
5 調査区壁面⑤

6 調査区壁面⑥

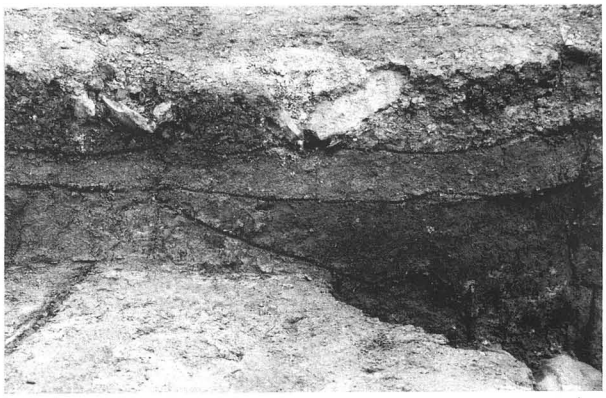
7 調査区壁面⑦



8 調査区壁面⑧

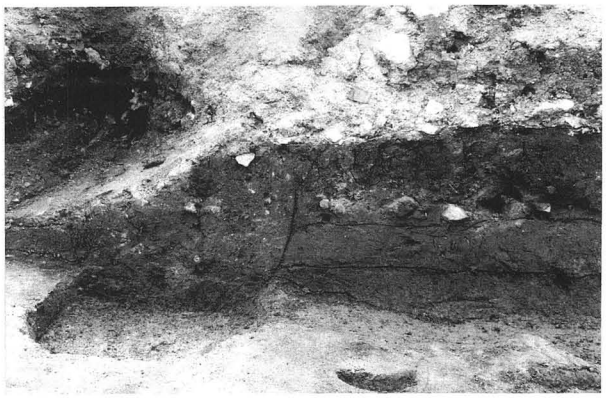


1 調査区壁面⑨ SP17 付近



2 調査区壁面⑨ SP21 付近

3 調査区壁面⑨ 中央



4 調査区壁面⑨ SP58 付近

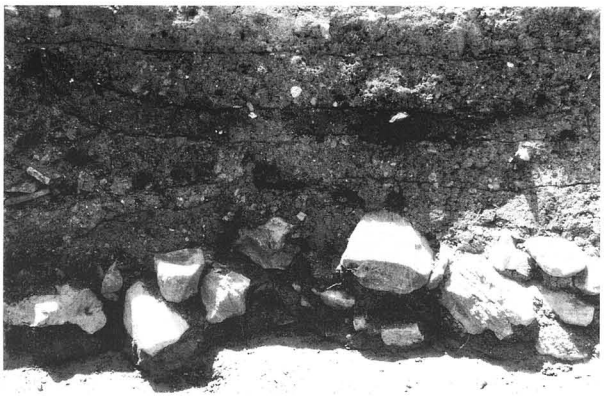
5 調査区壁面⑨ 南側

6 調査区壁面⑨ 南端

7 調査区壁面⑩ 東側

8 調査区壁面⑩ 西側

1 調査区壁面⑪ 南端



2 調査区壁面⑪ 集石南側

3 調査区壁面⑪ 集石北側

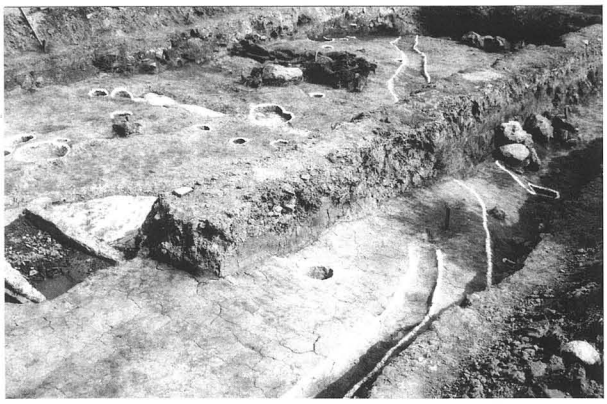
4 調査区壁面⑪ 埋甕付近

5 調査区壁面⑪ SK02 付近

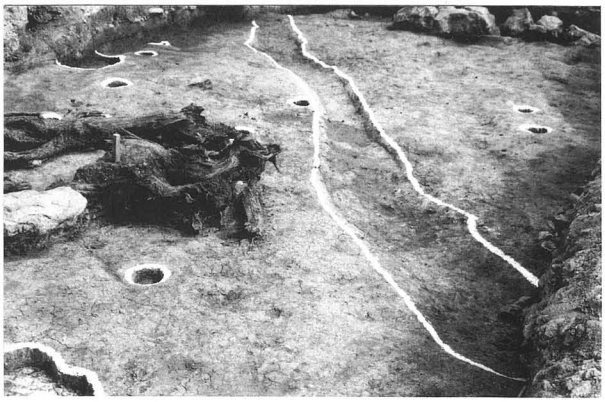
6 調査区壁面⑫ SP63 付近

7 調査区壁面⑫ 中央

8 調査区壁面⑫ 北側

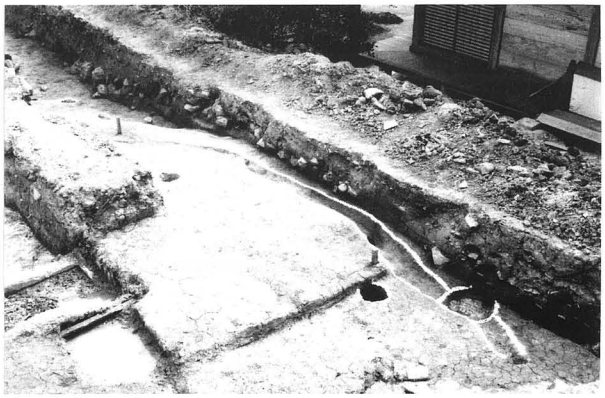


1 SD04全景（北西から，手前はSD05）

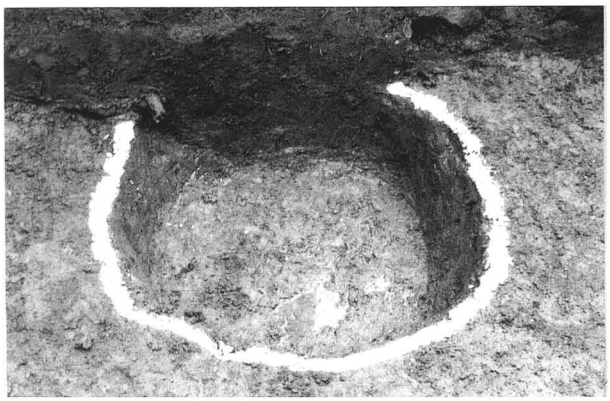


2 SD04南側（北西から）

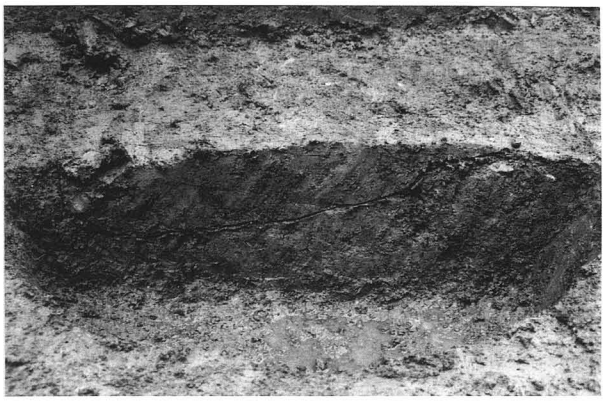
3 SD04南側（南から）



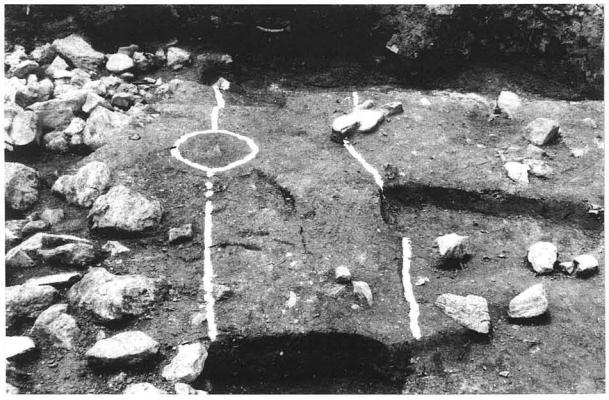
4 SD05全景（北東から）



5 SK01全景（北から）

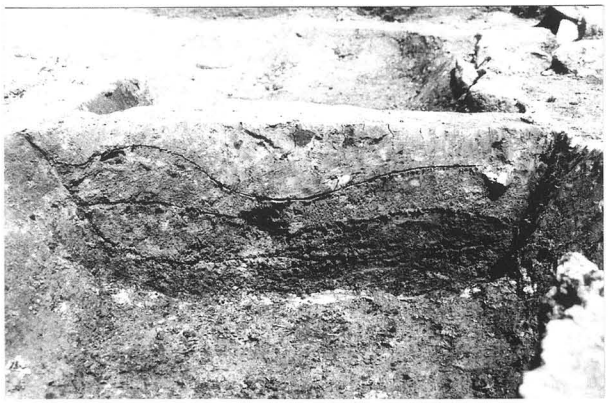


6 SK01断面（北から）



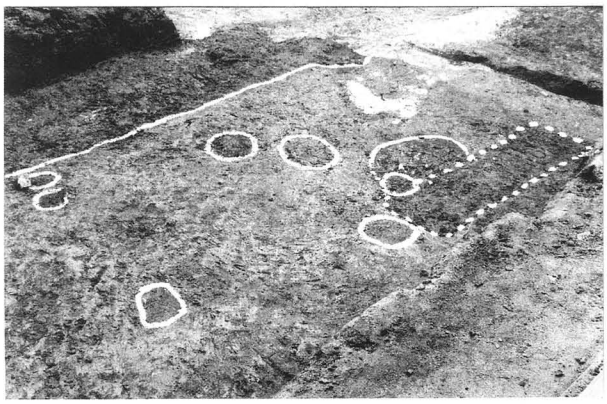
7 SK03東側検出状況（東から）

8 SK03東側全景（北東から）

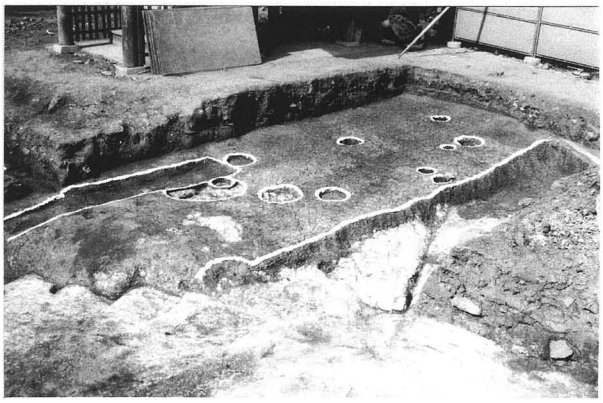


1 SK03東側断面（東から）

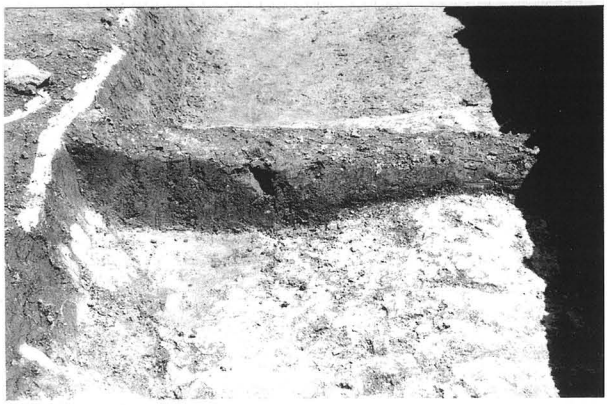
2 SK03西側全景（西から）



3 SD02・溝状落ち込み（段）検出状況（北東から）

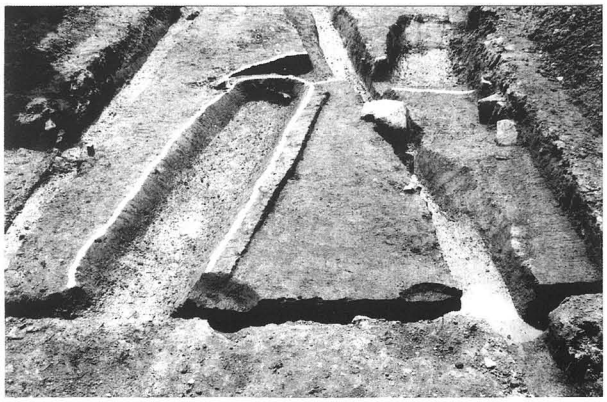


4 SD02・溝状落ち込み（段）全景（南西から）



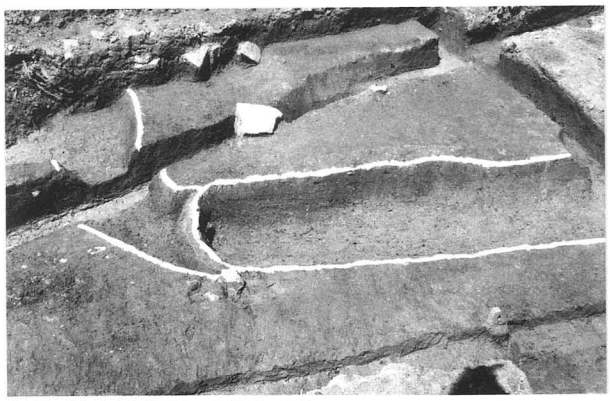
5 溝状落ち込み（段）断面（西から）

6 瓦溜め遺構全景（南西から）

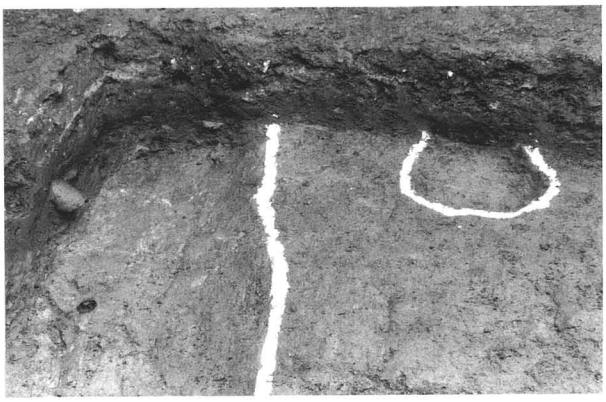


7 瓦溜め遺構全景（北から）

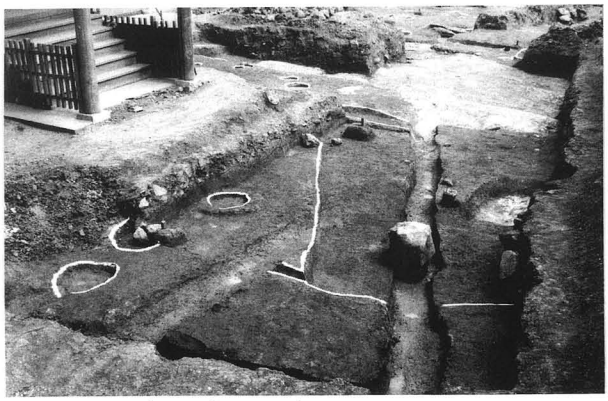
8 瓦溜め遺構断面（南から）



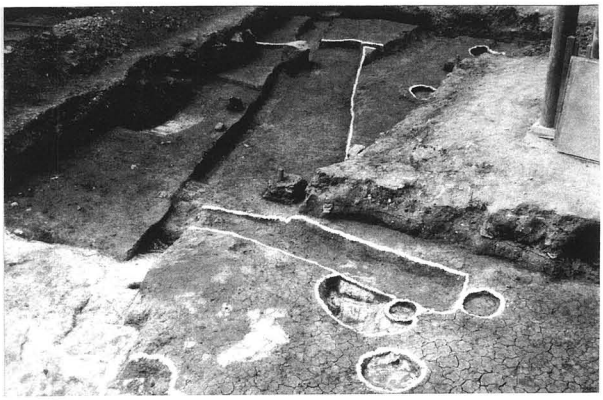
1 SX01全景（東から）



2 SX02・SP01全景（北から）

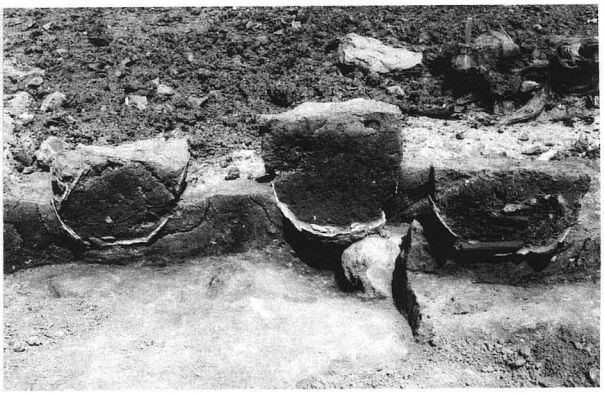


3 SX03全景（北から）

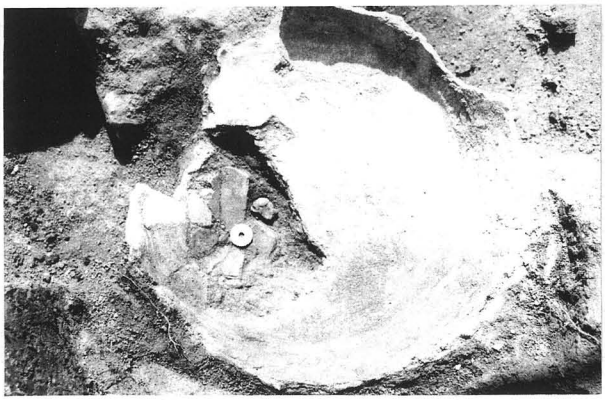


4 SX03全景（南から）

5 埋甕１～３検出状況（北東から）



6 埋甕１～３断面（東から）

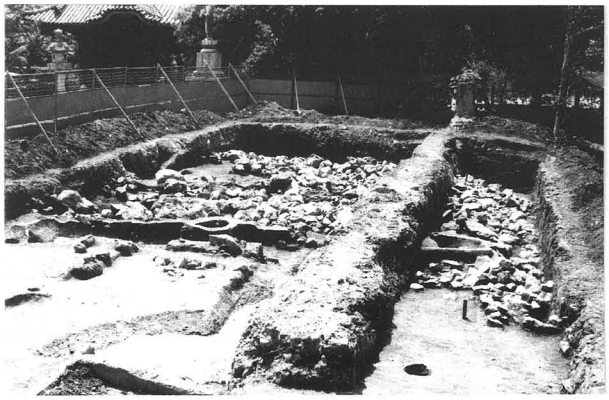


7 埋甕２ 寛永通宝出土状況（北から）

8 SP01瓦出土状況（北から）

1 SB01全景（西から）

2 集石検出状況（南から）



3 集石全景（北西から）

4 集石全景（北から）

5 集石全景（南から）

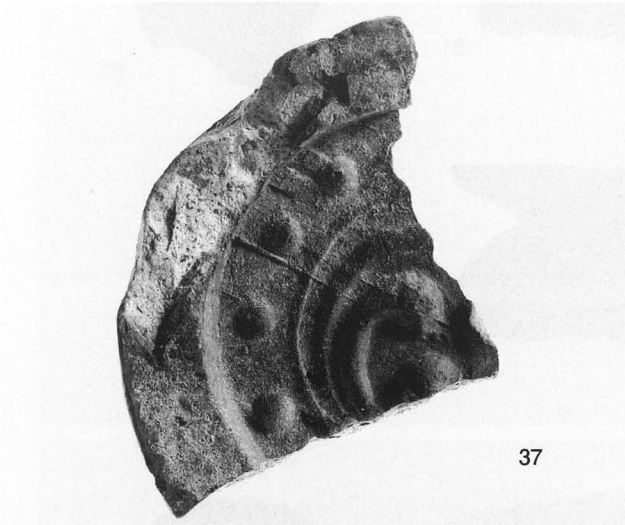
6 集石 軒丸瓦出土状況

7 集石 軒平瓦出土状況

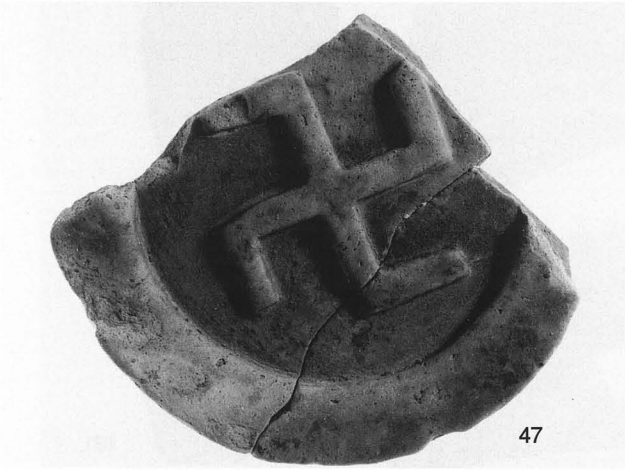
8 集石 陶器碗出土状況

35

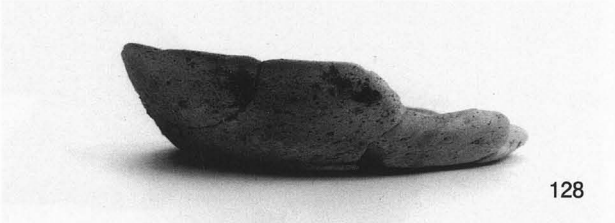
49


37

51


47

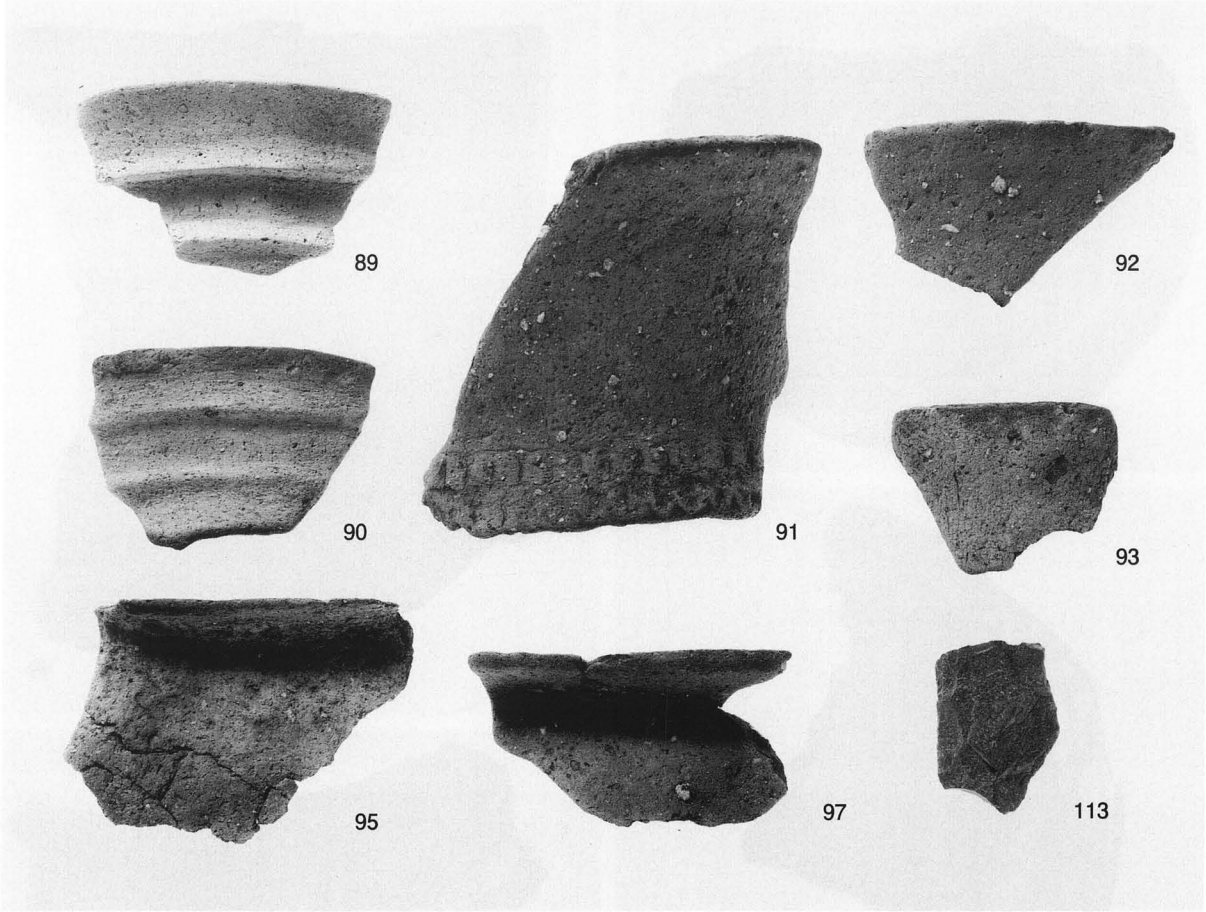
66

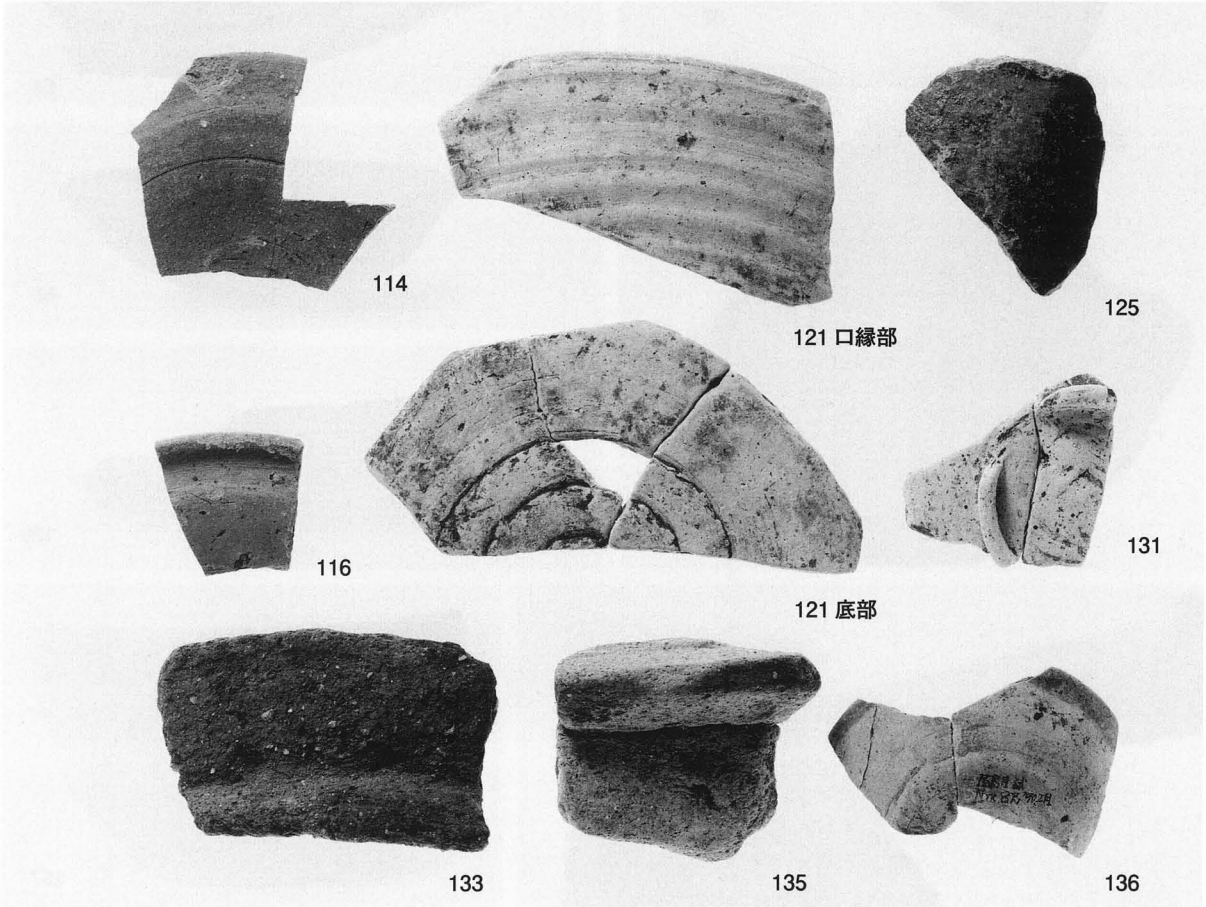

128

49

157

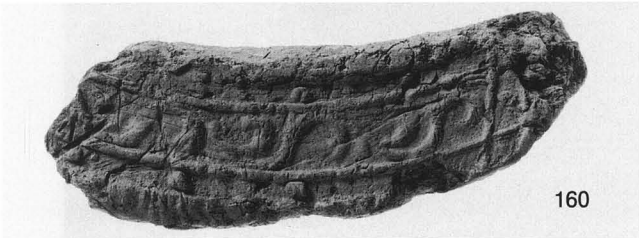
図版10

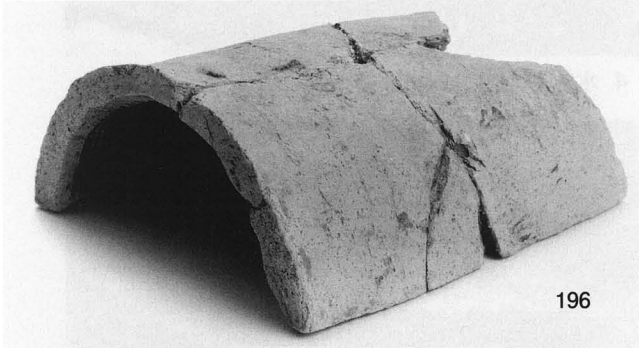




159

237


160


196

239

240

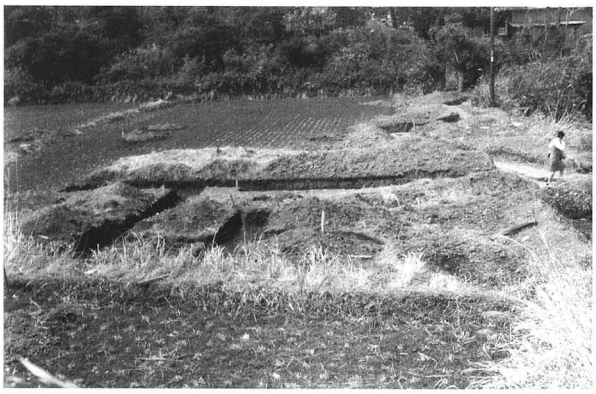
247

244

246

1 水族館試掘調査前風景（北から）

2 水族館試掘No.1・2トレンチ（北から）



3 水族館試掘No.2・3トレンチ（東から）

4 水族館試掘No.4トレンチ（西から）

5 水族館試掘No.7トレンチ（東から）

6 水族館試掘No.9～11トレンチ（西から）

7 水族館試掘No.12トレンチ（北から）

8 水族館試掘No.13トレンチ（東から）

1 屋島寺西側倉庫トレンチ全景(南から)

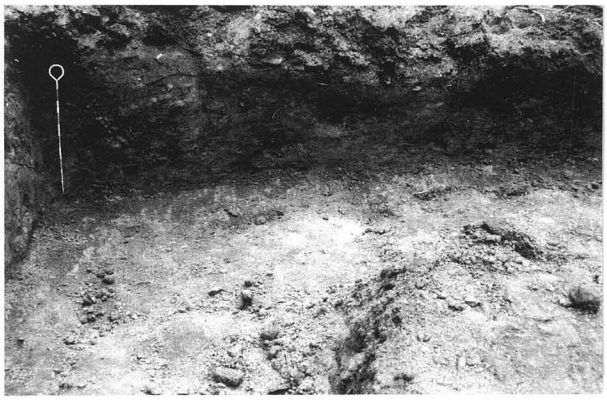
2 屋島寺西側倉庫トレンチ深掘

3 鎮守社 北・西トレンチ全景(南から)

4 鎮守社 南・東トレンチ全景(西から)

5 鎮守社 東トレンチ北壁(南から)

6 鎮守社 南トレンチ西壁(東から)



7 鎮守社 西トレンチ南壁(北から)

8 鎮守社 北トレンチ東壁(西から)

報告書抄録

ふりがな	やしまじ
書名	屋島寺
副書名	屋島寺宝物館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第107集
編著者名	川畑　聰
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目8番15号　TEL087－839－2636
発行年月日	西暦2007年10月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（しょざいち）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
屋島寺（やしまじ）	香川県（かがわけん）高松市（たかまつし）屋島東町（やしまひがしまち）	37201		34°21′28″	134°06′03″	1990.4.5～1990.5.31	300㎡	宝物館改築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
屋島寺	集落？	弥生時代 飛鳥時代	包含層 土坑	弥生土器，石器 須恵器，瓦	
	寺院	平安～鎌倉 江戸時代	溝，包含層 土坑，溝	須恵器，土師質土器，瓦 陶磁器，瓦	

要約	本調査は，屋島寺境内で唯一実施された本格的な発掘調査である。確認した遺構・遺物は，寺院以前のものとして弥生時代や飛鳥時代のものがあり，寺院にかかわるものとしては平安時代以降のものを確認した。これにより，平安時代以降における屋島寺の寺院活動を考古学的に証明できた。さらに，現在は平坦地が広がっている境内が，かつては山岳の起伏がある地形であり，時代とともに造成工事を繰り返して，現在の姿になったことが明らかになった。

屋島寺

―屋島寺宝物館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成19年10月31日

編集　高松市教育委員会
　　高松市番町一丁目8番15号
発行　高松市教育委員会
印刷　(有)中央ファイリング